# 僕と親友と漫画の世界

からり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と親友と漫画の世界

【Ｎコード】
Ｎ２８５８Ｘ

【作者名】
からり

【あらすじ】
ＲＥＢＯＲＮ！の世界へ転生してだらだらと日常を送るお話。（転生要素皆無の予感）
基本は原作沿いですが、原作部分を大幅に省いているので知らない人には読めないかもしれません。
原作キャラとオリキャラの恋愛要素があります。

※この物語はノリと勢いと自己満足で出来ています。

合わないと思われた方はそっとタブを閉じてください。
２９日分まで予約投稿済（１０：００更新）
いつにもまして意味不明な内容が続きます。

※１０／２５　２．僕と彼の一部を修正しました。

## 1. 僕と幼馴染

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い

腹が燃えるように熱い

痛い、痛いよ

助けて…『　』

「…なちゃ…雛ちゃん」

僕の名前を呼ぶのは誰？
聞いた事がない声…いや、僕の知っている子？

そんな事を考えながら僕が目を開けずにいると、僕の名前を呼んでいた子は僕の身体を揺すってきた。
あれ？僕ってなんで目を閉じてるんだろう。
背中には硬い感触。間違っても布団に寝ている訳じゃない。
ああ、お腹が痛い…。

目を瞑ったままではどうしようもないので、僕は起きることにした。
目を開けて最初に飛び込んできたのは、ぼろぼろと涙を零しているくせっ毛の男の子の顔。
僕が起きた事に安心したのか、良かった。と小さく口にしていた。

この子は誰だろう。僕の知っている子だろうか？
ああ、それにしてもお腹が痛い。

「良かった雛ちゃん。大丈夫？痛くない？」
「…大丈夫だよ綱吉君」

するりと彼の名前が出てきた。
そうだ、彼の名前は沢田綱吉。
僕の家のお隣さんの子で、運動が苦手な同い年の男の子。
その彼が何故泣いているのか…。

「僕は…」
「もうあいつらはいなくなったよ。雛ちゃん起きれる？」

あいつら？
僕は上半身を起こしながら周りを見渡した。

僕と綱吉君以外公園には誰もいない。

その『あいつら』と僕のお腹が痛いのと関係が……そうだった。
綱吉君が近所の悪ガキ3人組に苛められてて、その中に入ったんだ。
殴られそうになって頭は庇ったけど、ノーガードだったお腹を蹴られたんだった。
それでさっきから痛いのか。

何も言わない僕に不安になったのか、またぼろぼろと綱吉君の目から涙が零れた。
可愛いなぁ。
同じ7歳なのに、なんだか弟みたい。
ん？7歳？
7歳ってこんなに色々考えてるものだっけ？
僕の時は・・・って僕が今7歳なんだ。
何考えてるんだろう。

泣き止まない彼を安心させるように、彼の頭を撫でてあげる。
物凄くふわふわで触り心地のいい髪だなぁ。

「雛ちゃん？」
「帰ろう？綱吉君」
「うん！」

うう、まだ痛い。
そんな事を言うと敏い彼が心配するから、なんとか顔に出さないように立ち上がる。
うん、綱吉君は気付かなかったみたいだ。

それにしても僕は何か習い事をしていたんだろうか？
女の子の僕が悪ガキ３人組に立ち向かっていくなんて。

その疑問は、家に帰ってすぐに解けた。
解けたというか思い出した。

僕の父親、正確には叔父さん、が警察官で身体を動かすのが趣味だった。
空手とか柔道とか格闘技全般を習っていたらしい。
通いで近くの道場で師範もやっていたりする。
朝錬する父さんに興味を持ったのがきっかけで、子供だけど父さんと運動してるんだ。

正確には叔父さん。っていうのは、父さんは僕の実の父親じゃないから。
僕の両親は少し前に事故で死んじゃったんだ。

親戚中盥回しにされそうな所を叔父さんに引き取られたんだったかな？
まだ３０で結婚してないのに、瘤つきになっちゃって大丈夫かな父さん。

そんな訳で、僕は運動神経が良い方だったみたいだ。
うん、でも3対1は無謀だよね。
次から気をつけるよ。

## 2．僕と彼

僕は『　　』を読んだ事がある。
でも特別好きと言うわけでもない。

僕がそれを読んだのだって、親友の女の子が熱心に勧めてきたから。
ただそれだけ

○○と△△の組み合わせいいよね！
この二人ってデキてるよね！？
あぁ禁断の恋って素敵・・・！

感想なのか僕を洗脳しようとしてたのかよくわからないけど、とり
あえず彼女は『　　』と『　』が好きらしい。
腐った意味で。

そういう世界があるっていう事は知ってたけど、
薄々は親友もそういう趣味を持ってるって気付いてたけど、
僕を巻き込まないでほしいなぁ。

僕も一応男なんだから。

「……男…？」
ぱちっと目を見開き、僕は呟いた。

変な夢を見た。
学生服に身を包んだ男と女がどこかの屋上で会話する夢。
いや、会話？じゃなかったかもしれない。

女が何か薄い本を読みながら、男に一方的に話しかけていた。
それを聞き流しつつ、男は僕を巻き込まないでとか考えていた気がする。

第三者の位置から二人を眺めているような感覚だったけど、思考していたのは紛れもなく僕だった。

男？
僕が男？

一人称は僕だけど、僕は女だ。
それに小学生で、小学校には私服で登校している。

間違っても学生服を着たことなんてない。

「……変な夢」

夢の事を深く考えても仕方ないよね。

父さんと一緒に近所をランニングして、ご飯を食べて小学校へ。
勉強は退屈。
できないからじゃない、なんだか見覚えがあるんだ。
初めて習うはずなのに、見たことがあるような…とにかくすぐに答えがわかって面白く無い。

問題を解き終わって暇な僕は、いつものように綱吉君に教えてあげる。
ゆっくり時間をかけて解けば彼だって解けるのに。
先生は最初から出来ないものとして綱吉君を無視するし、周りはダメツナって呼ぶし。

学校って嫌なところだ。

退屈な授業が終わって下校の時間。
今日は叔父さんが道場に教えに行く日だし、覗いてみようか？
そんな事を考えながら、僕は教えてもらった道場へ歩いていく。

「もっとぶつかっていけ！」
「ハイッ！ありがとうございました！」
「お前はもっと腰を落とせ！」
「おっす！」

こっそり窓から覗いた感想…なんていうか、濃い。
汗臭さと野太い声…男の世界って奴だろうか。
もう少し大きくなったら僕も通ってみようかなって思ってたけど、
これはやめた方がいいかもしれない。

「ねぇ、そこで何してるの？」

僕は声がした方へ体ごと振り向いた。
誰もいないと思っていたのに、声を掛けられたせいで動揺してたみたいだ。
なんですぐ逃げなかったんだろう、じっくり声を掛けてきた子を観察してしまった。

第一印象は、『目付きが悪い』
切れ長の目に睨みつけられて、怖がらない人はいるんだろうか。
例外なく、僕も彼が怖い。

この道場の生徒さんなのかな。胴着を着ている。
うっすら汗をかいてるし…ちょうど練習が終わったところとか？
そして両手にはトンファー。
え？子供が持つものじゃないよね？

「ねぇ、聞いてるの？何してるのかって聞いてるんだけど」

何も答えない僕に苛々したのか、言葉に棘が…
いや、だって武器持ってる子供とか怖いです。
あと睨まないで下さい。
これが蛇に睨まれた蛙って奴か！
あれ？僕結構余裕あるのかな。

「まぁいいや、侵入者は咬み殺していいよね？」

くだらない事を考えていたら、彼がニヤッと嗤った。
そして次の瞬間、僕の方へと跳躍した。

「っ！」
「！」

トンファーが振り下ろされる瞬間、腕をクロスさせてそれを受け止

める。
辛うじて動きが見えたから防御したけど、痛い。物凄く痛い。
折れてないよね？大丈夫だよね？

次は防げないだろうな。と思ったけど意外にも彼は追撃してこなかった。
後方へ飛び僕と距離を取って、そしてまた口の端を軽く上げて嗤う。

トンファーを受け止めた時一瞬、本当に一瞬だけど目を見開いて驚いてた気がした。
気のせいだったのかな？

「ふぅん…君面白そうだね。まだ弱いけど」
「面白くないです！」

トンファーはいつの間に仕舞わたのか、彼の手にはない。
まさか、仕込みか。仕込みトンファーなのか。
その仕込みトンファーで通行人を殴りつける訳か。
通り魔じゃないか。

「ええと、帰っていいですか？」
「そうだね。もう少し大きくなったら、噛み殺してあげるよ」

全　力　で　遠　慮　し　ま　す　。

父さん、僕は通り魔に目をつけられてしまったようです。

その日、帰って来た父さんに稽古をつけて欲しいことを忘れずに伝えた。
見た感じ僕と同い年か少し年上って感じだったし、どこかの学校で一緒になるかもしれない。
強くなっておかないと咬み殺されてしまう。

子供のうちは安全っていうのが救いだろうか？
ああ、大人になんてなりたくない。

## 2．僕と彼（後書き）

『』の中は今後明らかになる、かもしれません。

幼馴染⇒親友

１０／２７修正

## 3．僕と入学式

今日は並盛中学校の入学式。
僕もついに中学生です。

「おはよう雛」
「おはようツナ。じゃあ行こうか」

お隣の幼馴染と仲良く登校。
男女という事もあり照れ臭さから疎遠になるかと思えば、今も彼とはいい付き合いをしている。

一回聞いてみたけど、どうやら僕は女の子って感じはしないらしい。
一応髪は腰まで伸ばしているけれど。
そういうことじゃなく、世間一般の女の子とは趣味が違うからって事だろうか？
そうだね、僕コイバナとかしないし。

「今日から中学生かぁ。緊張するね」
「そうだねぇ、同じクラスだといいね」

ついでにトンファーの彼とも出会わないといいね。

心の中でこっそり付け足した。

他愛無い会話を楽しみつつ歩いていたら、並中の校門が見えてきた。

って、えええ！？

「なんで、いるの」

「雛？」

立ち止まる僕を、不思議そうにツナが見ていた。

いつもなら何かしらフォローを入れるけど、今はツナに構っていられない。

だって、いるのだ。要注意人物が。

学ランを羽織って、腕には風紀委員の腕章を付けて。

記憶の彼よりも成長しているが、切れ長の目は変わっていない。

校門に、トンファー使いの彼が立っているのだ。

「雛、大丈夫？真っ青だよ」

「ツナ…」

運動音痴な彼を付き合わせる訳にはいかないだろう。

興味が移るとは思えないが、僕と一緒にいるせいでツナにも被害が及ぶかもしれない。

「ツナ、ごめん。先行ってくれる？」

「いいけど、大丈夫？」

「うん。後からちゃんと行くから」

心配そうにこちらを振り返りながら、ツナが先に校門をくぐった。
一瞬切れ長の目がツナのくせっ毛を追ったが、すぐに興味がなくなったのか校門をくぐる生徒に視線を戻る。

あれって、やっぱり探してるのかな？
まさか、ね。

でも素直に校門をくぐるのも怖いなぁ。

僕はくるりと踵を返して裏門を探すことにした。
切れ長の目が僕の後ろ姿を捉えていたことなんて気付きもしないで。

「裏門あるにはあったけど…」

閉まってた！
しかも鍵錆びてる！
使われてないっぽい！！

「うう…でも周りの塀よりも低いからよじ登れるかなぁ」
「並盛生なら校門から入りなよ」
「校門には怖いお兄さんがいてですね。って、え？」

普通に答えちゃったけど、何故いる。
聞き覚えのある声、セリフに僕はすぐに振り向けずにいた。
「久しぶりだね。少しは強くなったのかな」
会いたく無かったです。できればそっとしておいてください。
「ねぇ、こっちを向きなよ。じゃないと咬み殺すよ？」
「はいいいいいい！」
慌てて振り向いた、はずが足がもつれて転びそうになる。
えええ、この人の前で体制崩すとか自殺志願者か…！
襲い来るだろうトンファーの衝撃に備えて目をぎゅっと瞑る。
が、一向に衝撃はこなかった。
代わりに腰を支えられているような…。
おそるおそる目を開けると、吐息がかかるくらい近くに彼の顔があった。
切れ長の目しか記憶に残ってなかったけど、無駄に造詣が整ってて迫力がありすぎる！怖い！！
「何やってるの」
「ご、ごめんなさい」
はぁ、と溜息を吐かれた。
元はといえば咬み殺すとか物騒なことを言っていた彼のせいだとは思うけど。
体を支えて貰っているので、素直に謝っておく。

支えて貰っている？
ええと、今の状態は彼の腕が僕の腰に添えられていて、上半身が密着して…ええええ！

顔が熱い。きっと今真っ赤になってるんだろうな。

いや、だってあれだよ？
醜態晒した挙句に助けてもらって呆れられたんだよ。
物凄い恥ずかしい。

突き飛ばして逃げたいところだけど、相手が相手だからそんな事したらどうなるかわからない。

どうしようどうしようどうしようどうしよう

キーンコーンカーンコーン

そんな事を考えていると、予鈴がなった。
遅刻した！

目の前の男が口の端を上げて笑う。
とても、凶悪な笑顔です。
昔会った時と変わってませんね、繰り返します。
とても、凶悪な笑顔です。

「遅刻だね」
「そうですね…っ！？」
彼の空いている手には何時の間にかトンファーが。

それが僕の頭目掛けて襲い掛かってきた。
とっさに学生鞄を掲げて防ぐ。
ばしっと良い音がした。ああ、僕の鞄…ごめんね。
「ワオ。反射神経は相変わらずいいね」
「…どうも」
あなたに咬み殺されないように必死に訓練しましたから。
口にはしないが。

「少しは楽しめそうだ」

僕の身体を支えていた腕が外されたと同時に、彼のトンファーが僕を襲ってきた。
僕は後ろへ大きく跳んでそれを躱すと同時に距離を取る。

ああ、逃げたい。
逃げたいけど逃げられない。
背中を見せたが最後、僕はトンファーの餌食になるだろう。

入学式が始まったのか、歌が聞こえてくる。
校歌だろうか？

「入学式、始まっちゃったんですけど」

「僕には関係ないことだよ」

取り付く島もないとはこのことだろうか。
風紀委員なら注意くらいするんじゃないの？
あれ？注意＝咬み殺すなのか？

くだらない事に意識を向けた瞬間、彼が一足で距離を縮めてきた。
振り被った右手には勿論トンファー。

今度は鞄も間に合いそうも無い。
僕は腕を犠牲にする覚悟を決めて、左腕でトンファーを防ぐ。
やっぱり、生身じゃ痛い。

初撃を防いだものの、その衝撃に動作が遅れる。
今度は以前と違って左の追撃が来た。
その動きを捉えてはいたものの、体が反応しない。

これは終わったな。
入学早々入院か？

緑～たなびく並盛の～

心の中で父さんに謝っていたら、何故か彼の動きが止まった。
電子音のせい？ってさっき聞こえてきた校歌じゃないの？これ。
不思議に思ってみていると、舌打ちしてポケットから携帯電話を取り出していた。

えええええ！この人校歌を着メロにしてるの！？

「何の用？僕の邪魔をするなんて良い度胸だね草壁」

ありがとう草壁さん！誰だかしらないけど。
貴方のおかげで彼は咬み殺す気がなくなったようです！

トンファー仕舞ってるし、もう安全だよね？
って、僕目そらしてないのにいつ仕舞ったの。どこに仕舞ったの。
何この風紀委員怖い。

今なら逃げられるかな…

「逃げたら咬み殺すよ。ああ、こっちの話」

何故バレた！
なんだろう、この人読心術とか使えるんだろうか。

「……人手が、足りないか」

そこでちらりと僕に視線を投げかけてきた。
いいものを見つけた。とでも言う様に彼の口が歪む。
ああ、嫌な予感がする。

「今から一人連れて行くよ」
「あの、僕そろそろ行きますね」

くるりと反転して駆け出した…はずが襟を掴まれて首が絞まった。

「どこに行く気？」
「うう…入学式に…」
「そんなのいいよ。どうせもう終わるんだし、そんなことより僕の仕事を手伝いなよ」
「嫌です！」
「君の意見は聞いてない。決定事項だよ」

中学校入学初日、僕はトンファー使いの人に拉致されました。
向かった先は教室でもなく、体育館でもない、応接室。

僕の中学校生活はどうなるのでしょうか。

## 4．僕と風紀委員会

僕は教室でも体育館でもなく、応接室とやらに連行されました。
襟を引っ張られて。
引きずられなかったのが凄いと思います。
泣きたいです。

応接室に連行された僕は、ソファに座らされた。全く訳がわからないよ！
それにしてもこのソファ、黒皮張りとか高そうなんだけど。

「どうぞ」
「…どうも」

何か説明してくれないのかなぁ。とか思いながらトンファーの人を眺めていたら、リーゼントの人が紅茶を持って来てくれた。
出されたものを残す訳にもいかないので、一口飲んでみたけど結構美味しい。
いい葉を使ってるのかな。

香りを堪能しつつ紅茶を飲んでいたら、今度はリーゼントの人が紙の山を持ってきた。

吹き出さなかった僕を誰か褒めて欲しい。
だって、５０ｃｍくらいあったんだよ高さが。おかしいでしょ。
しかも僕の前、カップの横にそれを置いていくし。
どさって音がしたよ、どさって！

「それ片付けて」

片付けてってなんですか、燃やせばいいんですか。

考えてたことがバレたのか、トンファーの人に睨まれた。
そういえば名前を聞いてない。心の中でトンファー（仮）と呼ぼう。

これ以上何もしないでいるとトンファー（仮）がトンファーで殴りかかってきそうなので
ややこしいな！
仕方ないので一番上から一枚だけとって目を通す。
字がびっしりで目が痛……あれ？これって。

「なんで風紀委員が町の財政計算してるんですか」
「ワオ、その書類の意味がわかるの？」

どうでもいいけどワオって口癖なのかな。

「なんとなくなら…」
「凄いですね。中学に入ったばかりなのに」
「読めば誰だってわかります。ええと…」
「草壁と呼んでください」

「草壁、さん」

草壁さん！このリーゼントの人が草壁さん！
僕の救世主か！

どうやら副委員長なんだそうだ。
つまりトンファー（仮）は草壁さんより偉い訳だから、委員長なのか。
こんな人の補佐だなんて大変そうだ。
そう考えてたら睨まれた。

本当に読心術使えるんじゃないの？それとも顔に出やすいのかな。
そんなことを考えながら書類を眺めていく。
わかるのだけ書いて、わからないのは分けておこう。

それにしても中学生に予算立てられる町って大丈夫なの？

「終わったあああ！」
「煩いよ」
怒られた。
いや、でも声に出して喜ぶくらいいいじゃないか。

最初は５０ｃｍくらいの紙の山だったのに、どんどん追加されていって…あれは恐怖だね。
片付けても片付けても減らない書類とかどこの学校七不思議に入れてもいいと思うよ。

今気付いたけど空が赤い。もう夕方じゃないか。
疲れて机に突っ伏していると、草壁さんがケーキと紅茶を持って来てくれた。
ショートケーキ美味しいです。

「君にこれ渡しておくよ」

委員長が何かを投げてきた。
それは風紀委員と書かれた…

「腕章？」
「風紀委員はそれを付ける決まりだからね。本当なら学ランも着なきゃいけないけど」

学ランに腕章って…いや、それよりも

「なんで僕が風紀委員に入る事になってるんですか？」
「僕が決めた」

俺様！

「拒否は」
「認めないよ」

助けを求めるように草壁さんを見ると、紙を一枚僕に見えるように

持っていた。
誓約書？
風紀委員に入る？
署名欄に僕の名前！？

「一体いつ書いたんだ僕！」
「さっき書いてたじゃない」

やられた。
どうやら紙の山に紛れ込ませていたらしい。
なんで気付かなかった僕！！

そんな訳で、僕は今日から風紀委員らしい。
父さんのご飯作らなきゃいけないから、放課後はあんまり残れないって事だけ了承してもらった。
あと腕章もお仕事の時だけって事にしてもらったよ。
いやだって毎日毎時間付けるとか、恥ずかしくない？
すんなり要望が通った時は驚いたけど、結構融通効くのかな？

「じゃあ帰るよ」
「お疲れ様でした委員長！」
草壁さん、昇降口までお見送りですか。
９０度のお辞儀とか中々見ないよね。
それにしても、
「見事に真っ暗ですねー」
書類が終わってから風紀委員としての仕事内容とか聞いてたら外は真っ暗になってた。
説明は草壁さんがしてくれた。委員長は紅茶飲んでただけだった仕事しろ。
今日は父さんは帰ってこない日だったはず。
良かった良かった、そうじゃなかったら怒られる。
「じゃあお先に失礼します」
「？どこ行くの」
一応先輩だから挨拶して帰ろうと思ったのに、不思議な顔をされた。
どこ行くのって家に帰ろうと思うのですが。
「早く乗りなよ」
「バイク！？」
「それ以外の何に見えるのさ」
「え、免許は？？」

「並盛では僕が法律だよ」

もう一度早くしなよ。と言われてしまったので、お言葉に甘えて委員長の後ろに座らせてもらう。
ヘルメットなしっていいのかな。
それよりも中学生がバイクっていいのかな。

「捕まっておきなよ」

どこに？
そう思ったけど動きだしてしまったので慌てて委員長の腰に腕を回して抱きついた。
そういえば彼は僕の家を知っているんだろうか。

「着いたよ」
「うう、バイク怖いよ」
「全く」

委員長が呆れたような声を出していたが仕方ないと思う。
スピード出しすぎ。
僕は絶叫系が苦手で、早い乗り物も苦手だ。
なのにヘルメット無し、固定するもの無しの状態でスピードを出されれば誰だってこうなるだろう。

数分後、ようやく立ち直った僕は委員長に抱きついたままだった事に気付き青褪めた。
トンファーが飛んでくるかもしれないんだよ。

意外にも飛んでこなかったけど。

表札を見ると、しっかりと僕の家の前だった。
なんで知ってるんだろう。
ああ、でも今日の書類の山を見るに、委員長に知らないことなんてなさそうだ。

「じゃあね、山雀雛」
「ありがとうございました」

頭を下げるが振り向きもせずに委員長は行ってしまった。

変な1日だった。

## 4．僕と風紀委員会（後書き）

山雀＝やまがら

## ※委員長と彼女

それは並盛中学入学式前日の事。
並盛中学校の応接室で、雲雀恭弥は一人笑っていた。
手許には先ほど届けられた『山雀雛』の調査書。

―――――――――――――――

名前：山雀雛（やまがらひな）
住所：〇〇〇並盛町△△△
電話番号：ｘｘｘ－ｘｘｘｘ－ｘｘｘｘ

性別：女
身長：１５０ｃｍ
体重：４３ｋｇ

誕生日：３月３日
血液型：Ａ

趣味：体を動かす事。料理。
特徴：腰まである黒髪。

性格：良く言えば穏やか、悪く言えば面倒臭がり。
会話が苦手なのか無口で表情が乏しい。

授業をよくサボり、父親が通う道場へ通っていた経歴あり。
勉強が嫌いなのかと思いきや、テストは満点、体育でも好成績。

どことなく近寄りがたく、学校では浮いた存在。
幼馴染の沢田綱吉とだけ、特別仲が良い様である。

勉強ができず、運動音痴な為苛められていた沢田を助けに入る場面も。
父親から格闘技を教わっているのか、子供とは言え男3人を撃退。
助っ人の中学生もほんの数秒で沈めた過去がある。

――――――――――――――――――――

子供の頃、道場でほんの数分顔を合わせただけの少女。
僕の初撃を素手で受け止めた彼女は、あれからも自分を鍛え続けていたらしい。

「会うのが楽しみだよ山雀雛」

咬み殺すのが楽しみだ。と雲雀恭弥は嗤った。

後日直接会話して調書のような人間ではない。と知る事になるが、
それはまだ先の話。

## ※委員長と彼女（後書き）

色々と考えてるんだけど口に出さないから無口っていう認識…？
キャラ説明兼ねてます。

## 5．僕と日常

あれから一ヶ月が経った。
変わった事は…毎日が変わっている気もする。

まず、僕はクラスから浮いた存在になった。
応接室に通っていたのを見られたのか、腕章をしていないが風紀委員会に属していると噂が流れたらしい。
自分が思っていたよりも風紀委員会は恐れられているようだ。
委員会に属している＝怖い人。
という方式が成り立っているみたいだよ。

友達がツナしかいないのはちょっと寂しい。

そうそうツナの家からたまに爆発音が聞こえてくるようになった。
ツナのお母さんに聞いたけど、家庭教師？を雇ったんだって。
まだ見たことはないけど、可愛い子って言ってたかな。
子？どんな人なんだろう？

ツナと言えば、最近クラスメイトの笹川京子に告白したんだって。
パンツ一枚の変態！っていう噂も流れてるみたいだけど、どういうことなんだろう。
ツナに露出趣味とかあったっけ？
京子さん関係で剣道部の先輩と一騎打ちして勝ったんだってね。

僕はちょうど委員長に呼び出されて見に行けなかったけど、幼馴染みとして鼻が高いよ。

家庭教師が来てから積極的になったんじゃないかな？
これからもっとツナの良い所が前に押し出されていけばいいよね。

あとは、風紀委員長の名前をようやく知った。
並盛で逆らってはいけないランキングＮＯ．１という噂と共に。

雲雀恭弥って言うらしい。僕とは鳥繋がりだ。

やまがらとひばりだからね。
どっちも鳥の名前だね。

最後に、１週間くらい前から一人暮らしすることになったよ。
父さんが転勤の辞令を受けたらしくてね。
警察官なのに転勤？って思ったけど、同県内ならよくある事みたいだね。
家はそのままにして、父さんは官舎っていう社宅に入るらしいよ。

２人でも広いと思ったのに、この家で一人暮らし…。
ちょっと寂しいね。

## 6．僕と飛び降り

「ええと、そこで何してるの？」

朝から気分が悪かった僕は、授業をサボって足の向くまま屋上に来ていた。
屋上への扉を開けて僕は驚いたよ。
だって柵の向こう側に人が立ってたんだから。
それにしても間抜けな質問をしたものだ。

相手も人が来るとは思わなかったらしく、目を見開いて驚いていた。
でもすぐに立ち直ったのか僕をきつく睨みつけてくる。

「別に？君には関係ない」
「まぁそうなんだけどね。でも見ちゃったからには止めないと」
「知り合いでもない君が？偽善は止めた方がいいよ」
「偽善なのかなぁ」

確かに彼女が死のうが僕には関係ないけど。
自分で悩んで決めたことなんだろうし、勝手に死んでくれって思うけど。
でもさそれは僕の知らない所でって話で、見ちゃったからには止めないと。と思うんだ。
なんだか矛盾してるけど、ここで引き止めないってのも後味が悪……あれ？偽善なのか？

「君、変な奴だね」

「へ？」

どうやら僕は考えていたことを全部、ぶつぶつと口に出していたらしい。
それはどうみても変だ。というか近寄りたくない部類だ。

「そうだね、君の言うとおり死ぬならこんな目立つ場所じゃなくてひっそりと死ねばいいんだ。ここに来たのは、もしかしたら誰かが止めてくれるかもしれないって思ったのかもね」

彼女がそう言って笑う。
もう飛び降りる気はなくなったらしい。いや、元からそんなに本気じゃなかったのかな？
やめたのはいいけど、僕に事情を説明する気っぽい。いいのか悪いのか…

「まぁ、暇潰しにはなるかな」
「人が死ぬ理由が暇潰しか、君は本当に変な奴だな」

「…変な奴っていうか酷い奴だな」

また、変な夢を見た。
相変わらず視点は第三者、登場人物は僕と彼女の二人だけ。
僕は女だから、夢の男が僕っていうのも変な話だけど。

「でも、僕が立ち会っても同じ事を言うかもしれないな」

なんにせよ変な夢だ。そう結論付けて僕は目覚まし時計で時間を確認…

「9時…だと」

盛大に遅刻しました。

学校に来たはいいけどもう授業始まってるし、入りにくいしで今日も今日とて応接室でサボ…いえいえお仕事です。
委員長に睨まれました。本当に読心術もつかえるんじゃないでしょうか。

不思議な事に、中学の勉強も小学校の頃と同じくわかる。
教科書を一通り眺めただけだけど、問題の答えが浮かんでくるので受けなくてもいいかなと思ったんだ。

教師も僕が風紀委員と知っているからか、咎めてこない。

友達ができないのは寂しいけど、これに関してはいい特典だと思った。

「今日はラ・ナミモリーヌのミルフィーユです」
「ありがとうございます！」

そういってケーキと紅茶を持って来てくれたのは草壁さん。
いつもありがとうございます。ここのケーキ美味しいです。

書類を脇にどけて、ミルフィーユを堪能する。
美味しい。物凄く美味しい。
甘すぎずにあっさりしたミルフィーユは紅茶とよく合うね。
いつかお店にも行きたいものだ。

そんな事を考えながらケーキを食べていると、ふと窓の外が気になった。
そちらに視線を向けると、人が落ちて行った。

吹き出さなかった僕を誰か褒めて…これ2回目だな！

いやだって人が落ちて行くなんて、しかもあれって同じクラスの野球部のエースの山本武？

窓に駆け寄りたいけど、その窓は委員長の後ろ。
委員長が怖いのでなんとか堪える、と今度はパンツ一枚の男が落ちていった。

「ツナ！？」

一瞬しか見えなったけど、間違いなく半裸の男は幼馴染の友達でした。

本当にありがとうございました。

さすがにこれには堪えきれずに窓へと走り寄る。

委員長が眉を顰めたが構っていられない。

窓から身を乗り出すようにして下を見ると、パンツ一枚のツナと山本武が笑っていた。

訳がわからん。

「あれ、君の友達？」

「ええと、幼馴染です」

「ふうん」

ツナが興味をもたれたんだろうか。

まぁ、屋上からダイブしたのかな？しても死なない幼馴染なら大丈夫だよきっと。

それにしても夢でも現実でも飛び降りって流行ってるの？

まさか、ね。

## 7．僕と転校生

「雛は転生って信じるか？」
「転生？死んだら終わりじゃないの？」
僕がそういうと、彼女は雛らしいと笑った。
「最近読んだ話にさ、漫画の世界へ転生とかいうのがあって。ありえないことだけどそういう奇跡みたいな事があったら楽しいだろうなって思ってさー」
「『　　』はそういうの好きだよね。そうだな、子供が出来て孫に囲まれて、天寿を全うしたら『　　』とそっちに行くのも楽しいかもね」
「だろ？勿論行くのは『　　』の世界でさ。可愛い『　　』と付き合いたいな」
「うん…？」
一応僕も『　　』を借りて呼んでたから、主要人物くらいは覚えてるけど…。
『　　』って女キャラだったような
「来世は男になるからいいんだよ。そんで、雛は女の子で決定」
「僕が女になるのか…まぁ、それも面白いかもね」
「女の子の雛、可愛いんだろうなぁ」
生まれ変わるならどうせ記憶なんて消えるだろうし、それもいいかもしれない。って僕は思った。

彼女も男の方が生き易いだろうし…今は大分窮屈みたいだ。
まぁ転生なんてそんなこと、出来るはずもないんだろうけど。

「別に漫画の世界じゃなくてもさ」
「んー？」
「逆の性別で転生したとしても、雛と一緒の時代に生まれて親友になれたら良いと思うよ」
「そうだね。生まれ変わっても僕も『　』と親友になりたいな」
間を置かずにそういうと、彼女は一瞬目を見開きすぐに照れたように笑った。

憂鬱な雨が降り続く季節。
今日は大事な話があると言う事で、僕も朝から出席している。
転校生が来るらしい。
この前獄寺隼人って人が来たばかりなのにまたか、って思ったよ。

梅雨の季節ってまた変な時期だよね。
それに2人目も1－Aに来るっていうのも変な話だね。作為的な物を感じるよ。

「この前転校生が来たばかりだが、もう一人増えるぞ」
「小日向昶です。好きなものは可愛い女の子！よろしくねー」

にっこりと笑顔を浮かべながら手を振っている辺り、さすが女好き！って感じだ。
茶髪は…地毛かな？それとも染めてるのかな。
ああ、でもさらさらと風に乗ってるから痛んでないっぽい。地毛か？
身長は獄寺君よりちょっと高いね。
うーんイケメンだ。タラシっぽい。

じっくり観察していると、彼と目があった。
一瞬驚いたように目を見開いていたが、すぐに笑顔になる。

うん？なんだろう。
こひなた…小日向？
なんか聞き覚えがあるような…

「小日向君の席はそこの…小日向君！？」

小日向君が先生の言葉が終わる前に勝手に歩きだした。
って、僕の方に向かってきてない？席通り過ぎたよ？
なんだろう、見てたのが勘に触ったのかな。

周りの人が慌ててとめようとしてる。
そうだよね、僕一応風紀委員だもんね。

でも小日向君は止まらない。
そしてとうとう僕の机の前へ…

「雛！会いたかった！」
「へ？」

ぎゅうっと彼が僕を抱きしめる。
間抜けな声が出たのは仕方ないと思うんだ。
いやだって、僕は彼とは初対面…あれ？
初対面だっけ？

「雛、俺の事覚えてないの？」
「ええと…」

誰？わからない、名前は聞いた事がある気がしたけど…

『雛はさ、転生って…』

「痛…」
「雛？大丈夫？」

ずきずきと頭が痛む。
小日向君が心配そうに僕を見てるけど、構ってられない。
頭が割れそうに痛いんだ。

『雛と一緒の時代に生まれて親友になれたら良いと思うよ』

これは、誰が言ったものだった？
僕は何かを忘れているのか？

ああ、頭が痛い。
痛すぎて吐きそうだ。

『そうだね。生まれ変わっても僕も『　』と親友になりたいな』

「雛！！」
「あき、ら…？」

僕が名前を呼ぶと、“彼女”は一瞬目を見開いて照れたように…

「雛！ひ…」

ごめん。もうダメだ。
収まる気配のない頭痛に、僕は意識を手放した。

## 7．僕と転校生（後書き）

「昶はそういうの好きだよね」

## 8．僕と真実

気付いた時には、僕は見渡す限り真っ白な空間にいた。
ここはどこだろう。

周りには何もない。
いや、目の前に眩く光る玉が浮かんでいる。
不思議に思いそれに手を翳すと、頭の中に言葉が浮かんできた。

『君にはこれから選択してもらう』

選択…？

『君は　　を望むか？』

「僕は…？」
「雛！」
「あー…転校生のー」

誰だっけ？
頭がぼーっとしてる。僕、寝起きは良い方なんだけど。
あれ？そういえばなんで僕は寝てるの？

「よかった、頭は痛くない？もう大丈夫？」
「んー？」
「良かった。保健室に運んだんだけど、汗は酷いわ意識は戻らないわでどうしようかと思った」
「…保健室？」

首を巡らせて周りを確認する、が真っ白なカーテンしか見えない。
保健室のベッドにお世話になった事が無いからそれだけじゃ判断できなかったけど、この独特の匂いはまさしく保健室にある消毒液の匂い。

「僕は教室にいた気がするんだけど」
「うん。でも頭痛を訴えて気を失ったから」

気を？ううん、よくわからない。
教室でこの転校生が自己紹介して、何故か僕の方に歩いてきて僕を抱きしめて…。
ええと、名前は確か小日向…

「痛っ…」
「雛！？」
「ああっ…！」

彼の名前を考えたら、ズキズキと頭に鈍い痛みが走った。
それはすぐには収まらず、次第に強くなっていく。

一体なんだっていうんだ。

『君は転生を望むか？』

どういう事？いきなり言われてもわからないんだけど。
転生って人間死んだら生まれ変わるって言われてるけど、それって

いちいち個人に確認取る物なの？
いや覚えてる人なんていないから実際はどうか知らないけど。
っていうか僕死んだのか。
なんだか実感沸かないなぁ。だって僕はここに居る訳だし。

『君の友が嘆き強く願った。内容は君と君の友の漫画の世界への転生』

昶が？
そっか、うん。わかった。

『転生を望むということか？』

うん。昶の願いを聞いてきたんだよね？
その通りにしてよ。

『容姿や性別、能力等全てを希望通りにすることもできるが』

多分僕より昶の方が詳しいからね。
彼女に聞いてよ。
あれ？そうなると僕は女になるのかな…まぁいいか。

『了解した。ではよい生を』

その言葉を最後に光の玉は弾けて消えた。
同時に僕という存在も少しずつ薄れていき…僕は……

「思い出した」

がばっと勢い良く起き上がる僕。
濡れたタオルが落ちた。誰かが頭に乗せてくれたのかな？
ってそんな事はどうでもいいんだ。僕は慌ててベッドの脇に座っている彼を見た。
性別が変わっているけど、彼は間違いなく“彼女”だ。
僕の大事な親友。

「昶、おはよう」

みるみる彼の目が潤んで行く。
イケメンは泣いてもイケメンだな、とか場違いだけどちょっと思った。

「雛ぁあ！」

涙を目一杯溜めて、ぎゅうっと僕を抱きしめてくる昶。
うう、加減してないな？物凄く痛い、けど仕方ない。我慢しよう。
彼の背中に手を回し、なだめるように上下に撫でてあげる。

「雛！雛…っ！」
「よしよし、僕はここにいるよ」

さっきの夢が本当なら、僕は昶より先に死んだってことだよね。
あの光の玉は友達が嘆き強く願ったって言った。
そのおかげで僕はこうして昶に会えたんだね。

「昶、ありがとう」
「ごめん、ごめんね」
「謝る事なんてないはずだよ」

死んだのは昶のせいじゃないだろうし、こうして転生したのはそれはそれで面白い体験だ。
それに、12年こっちで生きてきたせいかな？
あっちの家族の事とか、もううろ覚えなんだ。

昶が落ち着いたら、色々と話を聞いてみようかな。
あの光る玉の事とかさ。

暫くして落ち着いたのか、昶の腕から力が抜けた。
まだ鼻をすする音が聞こえるけど、大丈夫かな？

「雛」
「何ー？」
「結構胸あるね」
「さっきまでのシリアスな空気はどこへ行ったのかな」

全く、昶らしいよ。

## 8．僕と真実（後書き）

色々いっぱいいっぱい

## 9．僕と同居人

あれから…授業を受ける空気でもなかったのでそそくさと早退してきました。
勿論昶も一緒です。
というか昶も一緒にこの家に住むそうです。
親戚？なんだって。
僕の親戚何人いるの？父さんだけじゃなかったの。

まぁそういう訳なので、今僕は昶と一緒に自分の部屋にいます。
よーし、膝を突き合わせて真面目な話をしようじゃないか。

「単刀直入に言うと、俺と雛は死にました」
「うん」
「そして漫画のＲＥＢＯＲＮ！の世界へと転生しましたとさ。おしまい」
「なん…だと…」

はしょりすぎじゃないかな？
仕方ないので僕が質問して答えてもらう形式を取ろう。
それが一番良いと思う。

「僕達を転生させてくれた光の玉の正体は！」
「ああ、雛も会ったんだね。自称神様、かな」

神様？
なんていうか…奇跡としか言いようがないね。
「僕はなんで前世の記憶が無かったの？」
「俺と会った時記憶が戻るように頼んだから。子供の内から前世の記憶とか持っててても良い事なんてないしさ」
うん、一理あるね！
しかも性別まで変わってるし、下手に男の記憶を持ってたら心と体のバランスが取れなかったかもしれない。
「じゃあ、なんで昶は僕の事を覚えてたの？」
「俺は雛みたいに小さい頃からこっちの世界に居た訳じゃないからね」
「？どういう事？」
「ちょっと事情があって、俺は2年前こっちの世界に来たんだ。こっちで昶として生きてきた記録も戸籍も記憶もあるけど。うーん、説明しにくいな」
んん？記憶の改竄とか？
それとも元々居た昶少年に憑依したとか…？
「それって何か問題はないの？」
「無いと思うよ」
「そっか、ならいいのかな」
問題ないならいいよね。
だってよくわからないし。
「昔から勉強の必要がなかったんだけど、これってなんでだろう。

前世の事は覚えてない状態だったんだよね？」
「うーん？前世で勉強してた事を覚えてたって事？」
「そうそう。教科書見ても知ってる問題ばかりでさ」
「それはちょっとわからないなぁ」

わからないのか。
勉強しなくてラッキーくらいに思っておけばいいのかな？

「そうそう、僕ＲＥＢＯＲＮ！を読んだはずなのに全く内容覚えてないんだけどなんで？前世の記憶が戻ってきたなら、それも思い出していいはずなんだけど」
「んーそれは俺が頼んだからだな。俺はメインストーリーに絡んでいきたいから覚えてるけど雛がどうしたいかわからなかったから」
「そっかー」
「思い出したいならそうする事もできるよ？」

僕はその言葉にちょっとだけ考えて、首を横に振った。
元々そんなに熱心に読んでた訳でもないし、知らない方が楽しいかもしれない。多分。

「よし、じゃあ最後の質問するね」
「うん？」
「僕は何が原因で死んだの」

昶の顔が歪む。
ちょっとした興味だったんだけど、まずかっただろうか。
というか神様を惹き付ける泣いてくれたんだったよね？
それは聞いちゃいかんだろ。何やってんだ僕。
やっぱり取り消そうかな？と思っていたら、昶がぽつりぽつりと喋

り始めた。
どうやら教えてくれるらしい。
苦しそうに言葉を紡ぐ昶…こんな顔させるなら聞かない方がよかったな。

ふむ…
僕はなんと卒業式のあの日、盲腸で死んだらしい！
びっくりだね…僕盲腸で死ぬ事なんてないと思ってたよ。
そういえば腹が熱い、痛いっていう夢を見た気がする。
盲腸だったのか。

「ごめんね雛」

一人うんうん。と納得していると、昶がぽつりと謝罪してきた。
一体何がごめんなんだろう。

「俺がもう少し早く雛を発見してたら、雛は死ななかったかもしれないのに」
「死んだかもしれないよ？」
「そんなこと…！」

無い、って言いきれない事は昶もわかってるんだね。
僕はあっさりとこっちに来ちゃったからわからないけど、昶はずっと後悔してたのか。
こういう時はなんて声を掛けたらいいんだろう。

気にしないで？…いや気にするだろ。
大丈夫だよ！…何が？

昶は悪くないよ！…あっさり逝っちゃった奴が言ってもなぁ。
うーん。

「ねぇ昶。僕は昶になんて声を掛けたらいいのかわからないんだけど」
「うん」
「折角の第二の人生なんだから、一緒に楽しもうよ」

折角生きてるんだし、しかも漫画の世界に転生とかどこのテンプレ？っていうような奇跡まで貰っちゃったんだし。楽しまないと損だと思うんだ。
僕はそう割り切ってるけど…昶もそう思って楽しんでくれるといいな。
後悔とかそういう負の感情だけに囚われないでさ。

「…そうだね。折角ＲＥＢＯＲＮ！の世界に来たんだしね」
「うん。いっぱい遊んで、バカな事やって楽しもう？」

すぐには切り替えられないかもしれないけどさ。
そうやって第二の生を楽しもうよ。

そうそう転生するにあたって、今度は病気とかで死なないように頑丈な体にしてもらったんだそうです。
身体能力や、格闘センスなんかも上げてもらったらしいので、鍛えれば鍛える程強くなれるんだとか。
うーん…特訓しても委員長を倒せる日が来るとは思えないなぁ。

## 9．僕と同居人（後書き）

説明回のはずがなんの説明にもなってない残念な回

## ※私と奇跡（前書き）

雛がいなくなった後の現世での昶の話

## ※私と奇跡

今日は通っている進学校の卒業式があった。
私と雛は初めて会った屋上で、卒業生や父兄が帰っていく様を見ている。
笑ってる人や泣いてる人、色んな人がいるね。

「来年は僕たちの番だね」
「…そうだね」

卒業か…高校を卒業した後の事なんて何も考えてない。
何よりも先に家を出ようと思ってはいるけど。

「僕、ちょっとトイレ行ってくる」
「了解。待ってるよ」

雛が立ちあがり私はそれを見送った。
苦しそうな顔をしていたけど、下痢なのかな。と結論付けて。
なんでこの時付いて行かなかったんだろう。と今でも後悔している。

「雛遅いなぁ」
３０分は経ったと思う。
なのに雛が帰ってくる気配はなかった。

卒業生に掴まってるとか？
浅く広くな付き合いの彼に、そんな相手がいただろうか。と思ったが、もう少し待ってみる事にした。

さらに３０分が過ぎた。
一向に戻ってくる気配はない。

これはおかしい。
私はようやく腰を上げた。

階段を下りて、近くのトイレへと向かう。
その途中の廊下、隅っこに人が倒れて…

「！？…雛！！」
「…っ…ら…？」
「雛！大丈夫！？」

倒れていたのは雛だった。苦しそうに顔を歪め、腹を押さえている。
慌てて近寄るが、意識が朦朧としているようだ。
私の名を呼んだようだが、目はどこか虚ろ。
玉のような汗をびっしりと浮かべ、顔色は悪い。
私はポケットから携帯電話を取り出し、１１９番を押した。

それからの事ははっきりとは覚えていない。
気づいたときには雛の葬式だった。

あんなに青い顔をして苦しんでいたのに、棺に横になっている彼はただ眠っているだけのようだった。
女顔の彼は、そうしていると本当に女の子のようだ。
そういわれるのが嫌で、よく口を尖らせていたのを思い出した。

涙が溢れて止まらない。

周りには家族やクラスメイト、参列者が多数いたのに私はその場で棺に縋りつくように泣き崩れた。

救急車が到着して近くの病院へ搬送、即手術。

発見が遅れたせいか、術後間も無く死亡。
病名は、虫垂炎だったそうだ。

４９日も済んだ頃、雛のお父さんが私の携帯にわざわざ電話をかけて教えてくれた。
虫垂炎。盲腸。
つまり私がもっと早く気づいていたら、雛は死ななかったという事か。

なんで、なんであの時雛を一人にしたんだろう。
なんで雛が…！

力いっぱい壁を叩く。
音が居間に届いたのか、うるせぇぞ！静かにしろ！と親父が怒鳴って来た。
うるさい、静かに泣かせろ。

私の唯一の親友は死んでしまったんだから。

雛の葬式後、私は高校に行かなくなった。
親友が居たからこそ通っていた学校も、居なくなっては行く価値を見出せない。
ご飯もいつからか作っていない、作る気力もない。
たまに父親がパチンコに負けたとかで家具に八つ当たりしていたようだが、そんな事はどうでもよかった。

何もする気力がなく寝てるか起きてるかもわからないほど意識が朦朧としてきた頃、それは私の元を訪れた。
眩しいくらいの光の塊。

『…お前は面白いな。たかが人一人死んだだけで自分の命を絶つのか』

なんと、この光の塊は喋るようだ。
ついに私も壊れたんだろうか。

『壊れてはいない。まぁ、現実味はないだろうがな』

そういってよくわからない光の玉は笑った。
顔が有る訳でも無いのに笑った。というのもおかしい話だ。

『ただの散歩のつもりだったが、お前の強い思念に惹かれてここへ来た。これも何かの縁だろう、願い事をかなえてやろうか』

願いを叶える？これは夢か？
いや夢でもいい、私の願いは決まっている。

「雛を、私の親友を生き返らせろ」
『無理だ』
即答…そうだな。そんなに都合のいい事が起きるはずもない。
『雛という人間の体は既に死んでいる。一度死んだ人間を生き返らせるのは規則に反するんだ』
規則？そんな事はどうでもいい。出来ないなら消えてくれ。
『そうだな、生き返らせる事はできないが…魂を特定の場所へ転生させることは可能だ』
「転生？」
『そうだ。お前は彼の者と昔漫画の世界へ転生等と言う話をしていたようだな』
「できるのか？」
『漫画に似た世界、異世界という事になるがな』
異世界。いやそれでもいい、もう一度彼に会えるのなら
「その世界に、雛の魂と私を転生させてくれ」
『雛とやらはわかるがお前もか？まだ生きているようだが』
「ふん。わかっているんだろ。私は既にこの世に未練なんかないんだ」
『そうか。寿命が残っている分、雛という者より遅くあちらに行く事になるがいいか？』
「成長した状態で転生するのは可能なのか？」
『可能だ』
「なら、いい」

『ではそのように手配しておいてやろう』
「頼む」

頼む。と言ったと同時に光の塊は音も無く消えた。
何が変わった訳でもない、いつも通りの自分の部屋。

やっぱり夢、いや都合のいい幻だったんだろうか。

久しぶりの会話は凄く疲れた。
今何時かわからないが、このまま寝てしまうとしよう。

私は瞼を伏せ、意識を手放した。

△月某日

○○町にあるアパートの一室から、女性の死体が見つかった。
女性はやせ細り、衰弱死と判断。
同居している父親に詳しく話を……

## ※私と奇跡（後書き）

昶の雛への思いはただの依存。
家族に恵まれなかった昶の、唯一大事な人。

## １０．俺と家庭教師

こっちの世界で雛の従兄弟って事になってる俺は、雛と一緒に暮らすことになりました。
いやそういう風にあの光の塊、自称神様（笑）に頼んだんだけどね。
でも主人公の沢田綱吉のお隣さんってのには驚いたな。
まさかの隣！
雛がよく爆発とか起きてうるさいって言ってたけど…十中八九あの家庭教師のせいだね。

「今日は学校休みだし、ツナのお母さんに挨拶に行こっか」
「了解ー何か持っていくの？」
「下手に持っていくと奈々さんに気を使わせちゃうかも。だから持っていかないよ」

どうやら雛と奈々さんは仲が良いらしい。
雛はずっと家事を自分でやってたっていうし、主婦友みたいなものなのかな？

そんなこんなで徒歩１分、お隣の綱吉君の家の前に着い…

ドゴォン！！

部屋が爆発した。

雛を見ると、いつもの事。とでも言うように気にせずチャイムを押している。
それでいいのか？

ドガーン！！

また爆発した！
ああ、今度は牛柄の服の子が落ちて…ん？これってもしかして。
ランボ登場回か。

「はいはい、あら雛ちゃん。どうしたの？」

奈々さんのお出まし。
貴方も爆発は無視ですか？

「…が・ま・ん！」

我慢できてないよ、涙零れてるよ。
頑張ってるけどリボーンには相手にされてないんだよなぁ。
物凄く哀れだ。
哀れすぎて貰い泣きしそう。

「今日はご挨拶に参りました」
「挨拶？」
「はい、これから一緒に暮らす事になった従兄弟の」

「小日向昶です。宜しくお願いします」
視界の隅でランボがもぞもぞしてるけど、今は挨拶優先かな？
それにしても奈々さん美人。

「あらあら、こちらこそ宜しくね」
「彼もツナとはクラスメイトなんですよ」
「そうなの？大人っぽいからうちのツナより年上かと思ったわ」
ああ、なんかこの二人の会話、和む。
二人ともちょっと天然系？っぽいし…ずっと見ていたい。

「昶？どうしたのぼーっとして」
「昶君？」
「あ、ごめん」

二人を眺めてて話聞いてなかった。
ごまかすように俺はランボを指さす。

「あの子ってこの家の子ですか？」
「あらあら、リボーン君のお友達かしら」

お友達っていうかおもちゃです。
そんな事を口に出せる訳もないので、俺は笑顔を浮かべながら奈々さんがランボを抱き上げるのを見ていた。

「傷だらけね。喧嘩しちゃったのかしら」
「元気な証拠じゃないでしょうか」
「…そういう問題じゃないと思うけど」

さすが天然二人…喧嘩で爆発やら窓から落ちたりやらしないと思うんだが。
ランボが飛ばされた窓を見る。
するとそこにはスーツ姿の小さな赤ん坊が腰かけていた。

あれがリボーンか…。
何気に俺達がここについてから見てたよね。
視線が痛かったです。

「この子をリボーン君の所に連れていくから、またね雛ちゃん。昶君も」
「はい、失礼します」
「また遊びにきまーす」

帰り際にリボーンへ向けて殺気を放つ。
すると、あっちからも同じくらいの殺気が放たれた。

少しは俺に興味を持ってもらえたかな？
これからメインに関わって行くなら、リボーンに認められなきゃいけない。

俺は雛よりも大幅に身体能力ｅｔｃを上げてもらってるから、今のボンゴレファミリーには負けないと思うけど。

「昶？どうしたの、にやにやして」
「ん？楽しいなぁって思って」

ああ、本当に…
これからの学校生活が楽しみだ。

## １０．俺と家庭教師（後書き）

雛は風紀、昶はボンゴレで進行予定。
守護者の属性は増やさないと思います、多分。

## ※副委員長と彼女（前書き）

3の草壁視点

## ※副委員長と彼女

俺の名前は草壁哲也。
風紀委員会の副委員長を務めている。

風紀委員長である雲雀の命令を忠実にこなし、並盛の風紀を守るのが仕事だ。

今日の仕事は、来月新しく入学してくる生徒達の情報収集。
住所・電話番号は勿論のこと、誕生日、性格など。
プライバシーの侵害と言われそうだが、並盛では風紀委員会が規則。何の問題もない。

新一年になる生徒が通っていた小学校の教師に個人情報を書き出させ、それを風紀委員がチェックし委員長へと提出する。
毎年行っている入学式の準備だが、個人情報は渡せない。と出し渋る教師がいるのには困ったものだ。
その場合は校長、理事長経由で“お願い”して提出してもらうが。

「これで最後です、委員長」
「ふぅん、遅かったね」

書類を受け取る委員長の言葉に、俺はひやっとした。
彼は気に食わないと同じ風紀委員でも咬み殺す。

それが副委員長の俺でも例外ではない。
一瞬身構えてしまったが、委員長はそれ以上何も言っては来なかった。

「…」

委員長の目は報告書に釘付けになっている。
何も言わないが瞳が不穏な輝きを放っていた。
委員長に興味を持たれるなんて、可哀想に。

「お疲れ様でした委員長」

返事がないということは、今日はもう仕事がないということだろう。

入学式当日、早速問題を起こしたバカがいた。
勿論近くの風紀委員が現場に急行して、今日の所はお帰り頂いたが。
いつまでも小学生気分では困るというのに…それにしてもこんな時に真っ先にトンファーを振るいに行く委員長が居ない。
珍しい事もあるものだ、今日は朝から校門に立っているらしい。
例の報告書の学生を見に行ったんだろうか。

「草壁さん！１－Ｂ前廊下で喧嘩です！」

「近くの風紀委員に向かわせろ！」

今日は始業式と普段と違う行事の日だからか、浮かれる者が多すぎる。
おかげで風紀委員は全員出動、人出が足りない状況だ。
始めは委員長の代わりに書類整理をしていたが、俺の仕事は元々補佐。
書類処理能力が委員長に及ぶはずもなく、緩やかにだが仕事は溜まっていく。

邪魔をするつもりは無いが、そろそろ帰って来てもらわなくては。
気乗りしないが、俺は委員長に電話をかけた。

『何の用？僕の邪魔をするなんて良い度胸だね草壁』
「…委員長、仕事が溜まっています」
『逃げたら咬み殺すよ。ああ、こっちの話』

例の新入生と一緒にいるんだろうか？
お楽しみ中だったのかもしれないが、こちらも帰って来てもらわなくては困る。

「風紀委員は全員出払っていて、手が足りない状況です」
『……人手が、足りないか』
「ですので、そろそろ帰ってきて頂きたいのですが」
『今から一人連れて行くよ』

短い返事の後、電話を切られた。
一人連れて来るというのは、例の新入生をだろうか。
仕事をやらせる程気に入ったとは…本当に珍しい事もあるものだ。

委員長が初対面の新入生を気に行った事にも驚いたが、その後襟を掴まれ引きずられてきた少女を見て、もう一度俺は驚いた。
容姿は整っているが、どこにでもいそうな少女。
一体彼女のどこを気に入ったのだろうか？

「それ片付けて」
「なんで風紀委員が町の財政計算してるんですか」
「ワオ、その書類の意味がわかるの？」
「なんとなくなら…」

ここには、並中の経営から並盛町の財政関係等幅広い書類が集まっている。
それを中学生、先月まで小学生だった彼女が理解できるだなんて。

「凄いですね。中学に入ったばかりなのに」
「読めば誰だってわかります。ええと…」
「草壁と呼んでください」
「草壁、さん」

彼女がにっこりと笑いながら俺の名前を読んだ。
その瞬間部屋の気温が2℃ぐらい下がった気がしたが…多分気のせいだろう。
委員長から殺気を感じた気がするのも、気のせいだろう。

「ねぇ君、これ混ぜておいて」
「これ、ですか？」

渡されたのは風紀委員会加入の誓約書。
混ぜる、というのは彼女の前に置かれている書類の山にだろうか。
つまり彼女を風紀委員に入れると。そこまで気に入ったのか。

「わかりました」

委員長から誓約書を受け取り、そっと山の中に忍ばせる。
彼女は集中しているのか、こちらには気付かなかったようだ。

風紀委員になれば、今まで粛清されてきた不良に狙われる事にもなるのだが。
彼女はそうなっても、対処できる人間なんだろうか？

俺が見ている前で彼女は誓約書に気付いた様子もなく、署名欄に名前を書き込んでいく。
これで正式に彼女も風紀委員になった訳だ。
委員長も彼女が名前を書いていたのを見ていたのか、珍しく口端を上げて笑っていた。

委員長が楽しいのなら、それで良しとしておこう。
これからの彼女の普通とはかけ離れた生活を思い、俺は溜め息を一つ吐いた。

## ※副委員長と彼女（後書き）

草壁さんの一人称…雲雀さんの前では私だけど普段は俺なイメージが。
間違っていたら申し訳ありません。
ところで、風紀委員って実際忙しいのかな？

## 11．俺とファミリー

キーンコーンカーンコーン

ふぅ、今日の授業はこれでお終いかー。
なんていうか、一回習った内容をもう一回教わるのって苦痛だな。
雛がよく授業サボってるって言ってたのも、納得できる話だ。

うん、明日からサボろう。
テストだけ受ける、それでいいと思う。

「雛帰るよー」
「昶ごめん！先に帰っててくれる？」
「何か用事？」
「委員長に呼び出された」

そう言う雛の手には携帯電話が握られていた。
俺が今後の授業について考えてる間に、電話がかかってきていたらしい。
委員長に呼び出されたって、雲雀恭弥が電話をかける姿が想像できないんだけど。
草壁さんとかが代わりに連絡してそうなイメージ。

「多分これから見回りなんだと思う…だから遅くなるかも」
「ん、わかった。今日は俺が夕飯作るよ」
「よろしくねー」

雛が慌しく荷物を纏めて教室を出て行く。
さて、俺も帰るかな。
商店街で買い物して…うーん、金足りるかな。

ドォオオン！！

「！？…なんだ？」

昇降口へ向かって歩いていると、爆発音が聞こえてきた。
爆発、っていうとボンゴレ関係しか思い浮かばないんだが…。

ドン！ドォン！！

「っ…また！」

今度は先ほどよりも小さいが連続で爆発音が聞こえてきた。
恐らく校庭の方向。

1度や2度どころじゃない爆発音が校庭から。
もしかして、山本のファミリー加入試験か？

「今から行っても終わってそうだけど」

原作を知っていても正確な日時がわからないから困る。

ただでさえ発生源がお隣さんだというのに…

「早くファミリー入りして情報もらえる立場にならないと」

雛を守れないかもしれない。

そう考えながら、俺は校庭へと走ったのだった。

ドガァアアン！！

俺が現地に着いたと同時に、一際大きな爆発が起こった。

これは…今終わったって所か。

「ふーあぶねーあぶねー」

「山本が引っ張ってくれたおかげで、た…助かったー」

へろへろの沢田綱吉に肩を貸しながら、煙の中から山本武が現れた。

実際に見てみると凄い迫力だな…これを遊びで片付ける山本って実は大物なのか？

「試験合格だ。お前も正式にファミリーだぞ」

スーツを着た赤ん坊が山本に声を掛けてる。

本当に赤ん坊なんだなー。

「よくやった」
「！」
「１０代目を守ったんだ。ファミリーと認めない訳にはいかねぇ」
獄寺が山本を褒める珍しいシーンに立ち会えるとは。
でも確か、この後どっちが沢田の右腕かでもめるんだっけ。
ああ、始まった…当の本人は横でオロオロしてるってのに。

「お前、この前ママンと話してた奴だな」
「！…ああ、小日向昶だ。最近こっちに越してきた」
ぼーっと口喧嘩し始めた二人を眺めていたら、声をかけられた。
下を見ると、スーツを着た赤ん坊がこちらに銃口を向けている。
全く気づかなかった。これが最強のヒットマン、リボーン。
俺はどういう態度をとるべきか。
この赤ん坊が普通の赤ん坊ではなく、殺し屋で現家庭教師をやっている事を知っている。
でもそれを口にすると、疑われてファミリーに入る所じゃなくなりそうだ。
さて、どうするか。

「君は、この前窓に座っていた子？」
「そうだぞ」
「まだ赤ん坊なのにあんなところに座ってたら危ないんじゃないかな」
「…」
とりあえず殺気のことは知らん振りしてみたけど…物凄い睨まれた。

心なしか殺気が混じってるような。
リボーンのそれを感じとったのか、獄寺と山本は喧嘩をやめてこっちを見ている。
うーん…正直に話しても惚けても結果は同じだったのかなー。
だからって事情を説明する訳にはいかないし。
困ったな、全く考えてなかった。

「……一つ答えろ。お前は敵か？」
「…俺の大事なものを傷つけない限りは敵対しない」
「大事なものとは？」
「俺の従姉妹。山雀雛と言えばわかるか？」
「そうか」

リボーンが銃口を下ろす。
何時の間にか獄寺がダイナマイト構えてるし。
好戦的過ぎない？君たち。

「お前ボンゴレファミリーに入らないか」
「…ボンゴレファミリーって？」
「マフィアだ。ツナがボスの、な」

怪しいってわかってるのに誘うとか…リボーンさんは使えるものは使う派らしいですね。
こっちとしては好都合だけどさ。

「いいよ。でも条件がある」
「言ってみろ」
「俺はボスよりも、雛を優先する。何よりも一番に」
「わかった。これでお前も今日からファミリーの一員だ」
「待ってください、リボーンさん！」

あっさり話が終わったなーと思ったら、獄寺から待ったがかかった。この人１０代目第一だしね。

「俺は反対です！ボスを第一に考えない奴がファミリーに入るなんて！」

「俺も反対だよ。雛の従姉妹を巻き込むなんて」

獄寺は予想通りだったけど、沢田も反対してくるとは思わなかったな。

幼馴染の従姉妹だからかな？ああ、でも山本が入るのも反対してたっけ。

もしかしたら扱い易い獄寺よりも、沢田の方が落とすの大変かもしれない。

嘘をつくより正直に話した方がいいかな？

「最近、沢田の周りでよく爆発が起きてたりするよな？」

「う、うん」

「今はなんともないけど、雛は沢田の幼馴染で隣に住んでる。マフィアが絡んでるとしたらいつかとばっちりを食うかもしれない」

「…」

沢田が眉を顰めた。俺のせいじゃない、って言いたいってところかな？

「沢田の周辺がきな臭いのなら、ファミリーに加入させてもらって事前に何が起きるのか知ってる方が守りやすいだろ？」

「…知らない方がいいこともあるかもしれないよ」

「知らずに守れないよりいいと思うけどな」

これから黒曜やリング争奪戦の事を考えると、正確な情報は確保しておきたい。
雛は風紀委員に所属しているから、間接的に関わることになるかもしれないし。

沢田が口を閉じた。
まだ言いたい事はあるけど思いつかない。って感じだな…さて、後はもう一人…。

「つまりてめぇは山雀の為に１０代目を利用するって事か」
「結果的にはそういう事になるのかな」
「！リボーンさん！やっぱりこいつを入れるのやめましょう！いつ裏切られるかわかったもんじゃない」
「さっき言ったと思うけど、俺は沢田達が雛に危害を加えない限りは敵対しないし、裏切らない。優先順位は変えないけど」
「てめぇ！」

獄寺が俺の胸倉を掴んでくる。
熱くなりやすいのは、直した方がいいんじゃないかな。周りの人の為にも。

「沢田が大事で、守る為には自分をも犠牲にする。って考えてる獄寺にはわかってもらえると思ってたけど」

これは本当。
自分より大事な人がいて、その人を守るためにはなんでもする。っていう獄寺の事は結構好きだ。
原作を読んでいた頃、一番好きだったキャラが彼だったくらい。
睨みつけてくる獄寺の目から逸らさずに、俺は俺の気持ちを伝える事にした。

「獄寺にとっての沢田が、俺にとっての雛ってだけだ」
「俺にとっての１０代目が…」
「お前だって沢田を守る為ならなんだって、誰だって利用するだろ」
「当たり前だ！…そうか、そういうことか」

ちっ、と舌打ちしながら獄寺が俺から手を離す。
理解はしたけど納得できないって感じかなー。
ちょっと、君達全員感情が顔に出やすすぎやしないかい？

「つまり、皆仲間って事でいいんだよな！」
「や、山本？」
「この野球バカ！話聞いてたのかよ」

山本の一言で獄寺が山本にくってかかる。
それをオロオロしながら止めようとする沢田…たった一言でいつも通りとか。
やっぱり大物なんじゃないの山本。

リボーンを見ると、にやり。と不敵に笑っていた。
その笑いは、ファミリー入りしたって事でいいんですかね？

「ま、そんな訳でよろしくな。沢田…いや、ツナって呼んでいいか？」
「う、うん。よろしく」
「山本と、獄寺もな。よろしく」
「おう！よろしくな」
「…俺は認めねー」

獄寺君獄寺君、子供のように顔を背けるのをやめたまえよ。

今後の為にもアドレス交換しておきたいんだけど、今のままじゃ無理だろうなぁ。
仕方ない。

「獄寺」
「んだよ」
「俺が役に立たなくても、ボスには右腕の獄寺がいるだろ？何も心配することないんじゃないか」
「お前…分かってるじゃねーか！」

単　純　！
一瞬で機嫌が直るとかなんて単純！
横にいるツナと山本が驚いてるよ。
さっきまで険悪な空気を醸し出しつつ睨み合ってたのにねー。

そんなこんなで獄寺とツナと山本のケー番とメルアドを取得、俺は無事ボンゴレファミリーに入ることができましたとさ。

余談だけど、雛は日が落ちてからバイクに乗って帰ってきました。
風紀委員長の愛車で。
後ろに乗って風紀委員長の腰に手をまわして抱きつきながら。

ねぇ、君達どういう関係なの？

## １１．俺とファミリー（後書き）

獄寺君はとても扱いやすいと思います。

## 12．僕とおにぎり

「雛、そろそろ行くよー」
「ちょっと待って。今日はおにぎり実習だから材料持っていかないと」
「ああ…獄寺のお姉さんが来る日かー」
「獄寺君？」

獄寺君がどうしたんだろう。
そんなことより、今日のお昼ご飯は実習で作るおにぎりだからね。
多めに作らせてもらう為にも、材料を沢山持っていかないと。

「そっか。まだ言ってなかったっけ」
「何をー？」

あれ？たらこ切らしてたかな？仕方ない。
あ！番茶入れた魔法瓶も持って行かないと。

「今日は獄寺隼人のお姉さんがイタリアから来るんだよ」
「へぇ…それがおにぎり実習と何か関係あるの？」
「んー。まぁ色々あって、教室におにぎりを持っていくとツナが全部食べちゃいます」
「へ？」

全部って、何個有ると思ってるんだ。
育ち盛りでも無理じゃないのかな。

「全部？」
「全部」

昶が真面目な顔で頷いた。
僕は覚えてないけど、原作を知ってる昶の言う事だからきっとそうなるんだろう。
それにしても色々ってなんだろう。

「じゃあどうしようかな。今日のお昼ご飯も兼ねてるから食べられると困るんだけど」
「家庭科室まで俺が行くよ。雛は皆と時間ずらして出てくればいいさ」
「そうしよっか」
「余裕があったら獄寺と山本の分も頼むよ」
「全部食べられちゃうんじゃ食べるものないもんね。わかった」
もうちょっと持ってく材料追加しよう。うん、それがいい。

「山雀さん沢山作るね～」
「ほんとだ。1人3個でいいって先生言ってたのに何人分作るの？」
「えと、4人分…くらい？」

話しかけてきたのは同じ班の笹川京子さんと黒川花さん。
今まで同じクラスなのに話した事無かったから（風紀委員効果で）
ちょっと驚いた。

「京子でいいよ～雛ちゃんって呼んでいい？」
「私も花でいいわよ」
「う、うん」

クラスで男子に人気の京子さんと、大人っぽい花さんとお話とか…
初の女友達ゲットなるか！？
うーん、どきどきしすぎて変な事口走りそう。

「雛ちゃんと前から話したかったんだけど、なんだか近寄りがたくて」
「そうそう。滅多に授業に出て来ないしね」

そういえば、教室にいないんじゃ話し様がないよね。
自分で友達作るチャンスを潰してたんじゃないか…

これからよろしく。って小さく呟くと、二人もよろしく。って言いながら笑ってくれた。
良い人達だ。

「ところで、４人分って多くない？」
「今日お弁当作ってこなかったから、僕と昶と…あと人にあげる分」
「ああ、そういう事」

喋りながらも手は止めない。
自分用に海苔も持ってきたからね！
大好きな天むす用の海老天の準備も万端さ！

「雛ちゃんは風紀委員長さんにあげるの？」
「え？なんで？？」

風紀委員長の分は考えてないけど、なんでだろう。
あ、風紀委員だからか。
そうだね、委員長には貢ぐものって考えられてるのかもね。

「あげないよ～」
「そうなの？雛ちゃん、よく風紀委員長さんと一緒に歩いてるから良い感じなのかな？って思ったんだけど」

強制連行された校内見回りの事かなぁ。
書類捌くだけかと思ったら、見回りにも連行されましたよ。
そのせいで僕が一番弱そうって思われたらしく、風紀委員に恨みがある人が攻撃してきたりして…ふぅ。あれは面倒だった。弱かったけど人数ばかり揃えていて疲れた。

「多分見回りの事かな？それならお仕事だよ」
「そうだったんだ～残念だなぁ」

何が残念？
恋バナできなくて、なのかな。
うーん…女の子は謎だ。

「よし、完成！」
「うわ、本当沢山作ったね～。教室までもてる？」
「ラップ持ってきたから包んで袋に入れていくよ。先行ってて」
「うん、後でね雛ちゃん」
「先行ってるわね」

またあとで。と声をかけてくれる二人に小さく手を振り、おにぎりをラップで一個一個包んでいく。
全部で１２個…うん、作り過ぎた。
まぁ後で昶が取りに来てくれる事になってるしね。
でも全部食べられるかな？残ったら夕飯もおにぎりかな。

「雛ーおにぎり貰いに来たー」
「あ、昶ーこっちも準備出来たよ」

ラップで包んだおにぎりをコンビニの袋に詰めて昶に渡す。
色気がない？手頃な袋が無かったんだから仕方ない。

「１０個作ったけど、多い？」
「いや大丈夫、余ったら他のやつにやるし」
「具は昶が食べられない奴は入れてないから」
「わかった、ありがと雛。ああ、あと今は教室に近寄らない方がいいな」
「ツナが全部食べるとかいうあれ？」
「そうそう。その所為でおにぎり全滅して、食べられなかった男共が雛のおにぎりに群がるかも」

マジか、どこまで飢えてるんだ１－Ａ男子。育ち盛りって怖い。
でもそうなると困ったな、どこで食べよう…。

「俺は屋上で食べてくるよ。雛も行く？」
「うーん…遠慮しておくよ。山本君と獄寺君も一緒なんだよね？あ

んまり話したことないし」
特に獄寺君。遠くから見ただけだけど煙草吸ってたりアクセサリじゃらじゃらな如何にもな不良だった。怖い。
いや風紀委員長に比べれば可愛いかもしれないけど。

「教室以外なら安全だろうし、適当な所で食べるよ」
「わかった。おにぎりありがとうな」
昶が袋を持って家庭科室を出ていく。
携帯を取りだしてたから、二人を呼び出すのかな？
さて、僕の分も袋に詰めて…どこで食べようか。

「で、なんで僕はここにいるのかな」
僕の現在地：応接室の前。
足の向くままふらふら歩いてたらここに着いてたよ。なんという。
委員長の前でおにぎり食べててもいいんだろうか。
書類押しつけられそうで怖いんだけど。

「何してるの」
「ひゃ！？」

心臓が口から飛び出るかと思った。
中にいると思ってた人物がまさか背後から声を掛けてくるとは…。
落ち着けー僕の心臓ー。
胸に手を当てて、軽く深呼吸してから振り返る。
予想通り後ろには、学ランを羽織っている委員長が立っていた。

「入らないの？」
「入っていいんですか」
「？何おかしなこと言ってるの」

ですよね、散々ここでサボ…いえいえ、仕事したり出入りしてますもんね。
ごめんなさい、睨まないで下さい。
最近委員長が妖怪・サトリなんじゃないかと思い始めました。
ちょっと、無言でトンファー構えるのやめて！

そのままその場で軽く運動、と言う名の委員長のトンファー乱舞を避けて避けて避けまくる委員長だけが楽しい運動。を終えてから応接室に入った。
最近僕の回避力が上がった気がします。
委員長のせい、いえおかげで。

「で、何？今日は呼び出しも何もしてないけど」
「ええと、ここでおにぎり食べていいですか？」
「なんで？」
「教室で食べると、クラスメイトに取られると聞いたので…」
「取られる？」

委員長が怪訝な顔をした。
そんな顔されたって僕には説明できませんよ！

よくわかってないんですから。

「ああ、おにぎり実習か」

「知ってるんですか？」

え、そういう事に興味無さそうなのに…何で知ってるんだろう。
もしかして昔女子に食べてーって追い回されたとか？
追い回したら最後ボコボコにされそう…これはないね、うん。

「並盛の伝統らしいからね」

納　得　し　た

誰よりも並盛が好きな委員長が、伝統を知らないはずがないもんね。
それにしても誰が作ったんだろうこの伝統。
クッキーとかお菓子の方がよくない？
さすが並盛…予想の遙か斜め上を行く謎がいっぱいの町だ。

「それ君が作ったの」

「そうですけど…」

「ふぅん」

「食べますか？」

委員長がおにぎりを見てたから、半分冗談で言ってみたけど…無言で手を出してきたよ委員長！
食べるのか。食べちゃうのか。
なんだか違和感があるなぁ。
自分から言ったんだからちゃんと渡しますけどね。

委員長におにぎりを一つ渡して今度はお茶の準備。
魔法瓶って便利だよね。朝煎れた熱い番茶が昼でもあったかいし。

「委員長お茶飲みます？」
「いる」
「ちょっと待っててくださいねー」

湯飲み茶碗って給湯室にあったっけ？
あんまり立ち入った事ないからわからないんだよなぁ。
そこは草壁さんのテリトリーみたいな。
というか応接室に給湯室って普通あるものなのかな。

戸棚から一つ借りて、番茶を注ぐ。
お盆に乗せて応接室に戻ると、委員長はすでに食べ終わったのか書類を眺めていた。
食べるの早いなぁ。
横顔を盗み見しながら置いたせいか、こと、と音を立ててしまったが零れなかったので大丈夫だろう。
僕は委員長がお茶を飲むのを見届けてから、おにぎりを食べた。

相変わらず会話なんてないけど、こんな日も有りかもしれない。

## １２．僕とおにぎり（後書き）

変な行事＝伝統なのかと

## １３．俺とおにぎり

女子はおにぎり実習、男子は教室で自習…なんだろうこの差。
並盛１年の伝統だかなんだか知らないけど、俺も雛と作りたかったなー。って思う。

教師は実習に付き合う為に家庭科室へ。
今現在見張りの居ない１－Ａの教室は、無駄に騒ぐ奴、友達と話す奴、携帯を弄る奴…無法地帯と化していた。

この中で真面目に勉強するとかバカらしいよなぁ。

「…じゃあお前は山雀さんのおにぎりを狙ってるのか？」
「ああ！」
「彼女は風紀委員だぜ？やめといた方がいいって」
「じゃあお前らは欲しくないのかよ」
「そういわれると…欲しいけどさ」
「なぁ」
「ああ」

えーと、あそこで雛の話してる奴らの名前は…忘れた。
クラスメイトＡ～Ｃとしよう。
うちの雛を選んだ事は評価する。が、お前らにはやらん。

風紀委員の肩書きを乗り越えられる程意志が強いとも思えないけど、あいつら要注意だな。
そっと自分の心のブラックリストに名前…は覚えてないので顔だけ

記録して俺はツナ、獄寺、山本へ近付いた。

「ツナは誰に貰うか決めてるのか？」

「小日向君。それは、えーと」

「昶でいいよ。ツナは笹川さん一筋だもんな、聞くだけ無駄だったか」

「こここ小日向君！？」

「昶で良いって言ってるのに」

落ち着いてください１０代目！とかいいつつツナを落ち着かせようとする獄寺。お前本当凄いよ、流石１０代目の右腕だよ。

俺はツナの物凄い動揺っぷりにちょっと引いたからね。

「小日向は山雀狙いなのか？」

山本が爽やかな笑顔で言う。

よし、こいつは下心とかなさそうだ。純粋に聞いてるだけだな。

「欲しいと思うのは雛のだけだね。くれるっていうなら誰のでも貰うけど」

「さすが女好きだなー」

雛のを食べ終わった後に余裕があったら、って付くけどね。

どっちにしろツナが一つ残らず食べるけど。

ん？廊下が騒がしいな。

それに複数の足音…

「女子が帰ってくるみたいだなー」

「え！ほ、本当に！？」

「１０代目！落ち着いてください！」
「そうそう、深呼吸して待ってればいいんじゃないかなー」
ツナは放っておいて、そろそろ家庭科室に行くかな。
女子が帰ってくるって事は雛も終わってるだろうし。
「ちょっと雛の所に行ってくるわ」
一言三人に告げて、教室を出る。
女子が数人こっちを見てたけど、雛を待たせる訳にも行かないし。
「食べたら死ぬんだぞーっ！！！！」
ツナの絶叫が響く中、俺は足早に家庭科室へと向かった。

「雛ーおにぎり貰いに来たー」
「あ、昶ーこっちも準備出来たよ」
家庭科室には雛しかいない。という事はやっぱり全員教室に戻ったのか…好きな男子に食べてもらいたかった人もいただろうに。
ご愁傷様。
そんな事を考えている間に、雛は作ったおにぎりを袋に入れ終わっ

たようだ。

「１０個作ったけど、多い？」

「いや大丈夫、余ったら他のやつにやるし」

育ち盛りの男子３人居ればすぐになくなりそうな気もするけど。

特に野球男児の山本はよく食いそう。

「具は昶が食べられない奴は入れてないから」

「わかった、ありがと雛。ああ、あと今は教室に近寄らない方がいいな」

「ツナが全部食べるとかいうあれ？」

「そうそう。その所為でおにぎり全滅して、食べられなかった男共が雛のおにぎりに群がるかも」

クラスメイトＡ～Ｃの顔を思い浮かべつつ、雛に念を押しておく。

ここまで言っておけば教室には近寄らないだろう。

問題はどこで食べるかだけど…

「俺は屋上で食べてくるよ。雛も行く？」

「うーん…遠慮しておくよ。山本君と獄寺君も一緒なんだよね？あんまり話したことないし」

そういえば雛がツナと話してるのはたまに見るけど、獄寺達と話してる所は見た事無いな。

授業をサボって接点がないのも理由だろうけど、ツナ至上主義の獄寺は単に幼馴染の女ってのが気に入らないのかもしれない。

うん、そのまま雛に興味を持たないでいてくれたら俺は嬉しいよ。

「教室以外なら安全だろうし、適当な所で食べるよ」

「わかった。おにぎりありがとうな」
どこで食べるのか気になる所だけど、俺より雛の方が詳しいだろうし。
とりあえず獄寺達に電話だな。昼飯買いに行ってないといいけど。
電話帳電話帳。えーと、獄寺っと。
コール音1回目、2回目、3回目…
『なんだよ』
「よぉ獄寺。昼飯はもう食べたか？」
『食ってねぇ。これから買いに行く所だ』
「あー、買いに行かなくていいからそのまま屋上へ行ってくれ。山本も誘ってな」
『？なんでだよ』
「いいからいいから。よろしくなー」
『おいっ』
獄寺が最後何か言いかけたみたいだけど、問題ないだろう。
このまま教室に行くと俺にも群がってきそうだし、このまま屋上へと向かいますか。
「お茶買ってくればよかったなー」

雛は自分用に魔法瓶に入れてたけど、俺は持つのが面倒だったから用意してない。
来る途中の自販機で買ってくればよかったと後悔した。

「一体何の用だよ呼びつけやがって」
「俺も一緒にってどうしたんだ？小日向」

獄寺に山本、ツナも一緒か。
獄寺がツナを置いて来るはずないしな、まぁ予想通りかな。

「とりあえず座れよ」

何だって言うんだ一体。とかぶつぶつ良いながら座ったのは獄寺。
山本は…相変わらず良い笑顔だな。
ツナはなんだか申し訳なさそうにしてる。ああ、おにぎりを全部食ったからか。
俺は三人の前にコンビニ袋を広げて、中身が見えやすいようにした。

「好きに食ってくれ」
「これどうしたんだ？」
「雛に作ってもらった」
「こんなに沢山？」
「そーそー。誰にももらえなくてひもじい思いをしないようになー」

一つ残らずツナが食べると思ったから。なんて言えないし。

「そういう訳だから、食べてくれよ。残すのは勿体ない」

言葉だけじゃ誰も手を付けないだろうから、俺は率先しておにぎりを一つ手に取った。

ラップを剥いで、かぶりつく。
それにつられるように3人が袋に手を伸ばした。

っておい、ツナ。
お前まだ食うのか…もしかして死ぬ気弾中に食った物はもう消化されたのか？
それを不思議に思わない獄寺と山本も大概というかなんというか…

考えてもわからないし、ボンゴレファミリーだからって事にしておこう。

うん、美味い。

作ってくれた雛に感謝しつつ、俺は考える事を放棄したのだった。

## １４．僕と数学

一週間くらい前から並盛中は夏休みに突入しました。
つまり今は夏休み中です。
大事な事だから2回言います。
今は夏休み中です。

「なのに、なんで僕は制服を着て応接室にいるのでしょうか」
「風紀委員だから」
「草壁さんはいないじゃないですかー」
「何。文句があるの？」
「ありますけどありませんよ！」

僕は今、応接室のソファに座っている。
目の前には見慣れた書類の山。
朝早くから呼び出されて片付けさせられた。

昼前に終わったし、午後が潰れなかっただけマシかなぁ。

「書類終わったので帰っていいですか？」
「まだ終わってない様だけど」
「え？」

慌てて書類に目をやる。
うん、この山は僕が作ったものだ。ちゃんと1枚1枚に目を通して。

じゃあなんで終わってないなんて…ん？
机の下に何かある。
なんだろうこれ、数学の問題用紙？
終わってないってこれの事？
でも、これは風紀委員とは関係ないと思うんだけど。
数学の問題用紙と風紀委員との関係がわからず、僕は首を傾げた。
なんか委員長の方から溜め息が聞こえた気がするけど、気のせいだよね。

「君、この前の数学のテストで赤点とったらしいね」
「へ！？」

赤点！？そんなバカな！
あれ？でもテスト戻ってきてから点数見てないかも。
だって知ってる内容だし、簡単な計算ミスくらいはしてるかもしれないけど点数低くはないだろうと思ってたし。

「解答欄が１つずれて０点。君見直しって言葉知ってるの？」
「えええええ！？」

見直し…確かにしなかったかも。
確かその日は眠くて眠くて、解いた後すぐに机に突っ伏して寝ちゃったんだっけ。
０点って…あれ？そしたら補習受けなくちゃいけないんじゃないの。
確かツナが、数学の点数が悪かったから補習を受けなきゃ行けなくなったって言ってたし。
補習って今日だったっけ？
午前中で終わりって言う話だったし…もう終わってるよね。

どうしよー！

「とりあえず先生に言って、後日受け直させてもらうしかない。かな？」

「受けなくていいよ」

「え？」

「受けなくていい。そのかわりそのプリントを解いて教師に提出」

委員長が何でもない事のように言う。

うん、プリント自体は問題ないかもしれないけど…え、これ貰って来たんですか。委員長が。

委員長が補習対象な訳ないっていうか年齢不詳だし、教師が渡しておいてくれなんて頼むはずもないし。

わざわざ貰いに行ってくれたんですか…？

自分の考えに驚いて委員長を見るが、普段通りのすました顔でよくわからない。

「これ、委員長が…」

「全部解けないと落第らしいから」

「先に言ってくださいよ！」

「風紀委員が落第する訳ないよね？」

「風紀委員じゃなくても落第したくないです！」

あれ？

話しを変えられた気がするんだけど。

いや、そんな事よりも今は一刻も早く問題を解いて提出しないと！

昶に赤点補習の事と、帰るのが遅くなる事を書いたメールを送って…さぁやるぞ。

……わからない。
大体は解けた。見直してみたけど、合ってると思う。
問7以外は。

高校の勉強知識もある僕だけど、問7はさっぱりわからなかった。
僕がわからない。というか見た事もないって言うと高校より上、大学レベルの問題って事になっちゃうんだけど。
いや、もしかしたら僕が覚えてないだけで習ってるのかもしれないし…。

これから図書館に行って調べる？
何の公式を使えばいいのかもわからないのに調べようがないかも。

書かないで提出する？
全部解けないと落第だって言うし、その時点で落第決定しちゃうかも？

うーん、どうしよう。

「君、まだ解けないの？」
「っ！？」

考え込んでたせいで委員長が近くに来てるのに気付かなかった。
声がなんだか不機嫌そう…え、風紀委員はこんなのすぐに解けて当たり前って事ですか？
いつトンファーが来るのかとびくびくしていると、委員長が数学のプリントを手にとって…。

「君、もう帰っていいよ」
「ええ！？それは落第ってことですか！」
「…何言ってるの？」
「え、だって全部解けないと落第なんですよね？まだ1問解けてませんけど」

解ける気もしませんけど。

「問7はいいよ」
「え？何でですか」
「僕が良いって言ってるんだよ。何か問題でも？」
「いいえ！ないです！」

風紀委員長が良いって言ってるんだからいいのかな？
このまま残っても解ける気がしないし、それに委員長を怒らせそうだし。
先生に提出して帰ろうかな。

「ええと、じゃあ帰ります」
「じゃあね」
「はい、お疲れ様でした」

委員長が挨拶してくれた事に若干違和感を感じたけども。
した事に違和感を感じたってどんだけ委員長は俺様だったんだって感じだけど。

少しは認めてもらえたってことかなー。なんて考えながら僕は応接室を出て教務室へと向かった。

本当どうしよう。
委員長はああ言ってたけど、全部解けてないし。
素直に言って何とかなるかなぁ？

どうしよう。と思いながら廊下を歩いていると、ポケットの中の携帯電話が震え出してメールが届いた事を教えてくれた。
送信者は昶。

―――――――――――――

Ｔｏ　　山雀雛
Ｆｒｏｍ　　小日向昶
題名：Ｒｅ：今日
本分：了解。

そうそう、問7の答えは4だよ
問題レベルは超大学レベル
過程は知らないけど、公式は「ネコジャラシの公式」とかいうのを使うらしいよ

――――――――――――――

ネコジャラシの公式って何それ。
誰が作ったの。
というか超大学レベルって何！

教務室に着いたけど…どうしよう。

「あら山雀さん？どうしたのかしら」
「えっ？あ、先生…」

教務室に入る前に、目的の先生に声掛けられるとか…！
とりあえずさっき聞いた事を伝えてみようか？

「先生、数学の補習のプリントを持ってきたんですけど」
「そうなの？それで、全部解けたのかしら」
「ええと、問7がわかりませんでした」
「そう…困ったわね。全部解けないと落第にしなければならないんだけど」

やっぱりそうなんですか！
いや、でも中学生に大学レベルって無理じゃないですか？

「それなんですけど、風紀委員長が問7は良いって言ってたんですけど」
「え！？風紀委員長が…！」
「それと、大学レベルを中学生に解けって無理じゃないですか？」
これは昶に教えてもらった情報だけど。
昶が嘘を言うはずないし、言っても大丈夫だよね。

「大学レベル？ちょっと見せてもらえるかしら」
「はい」
「……これは解けなくても仕方ないわね。わかりました、問7以外が埋めてあれば良しとします」

やった！落第は免れた！
これで安心して夏休みが送れるなぁ。

こんな問題入れたかしら、おかしいわね。って呟く先生に挨拶をして、僕は帰路に着いた。

後から聞いた話、あのプリントは草壁さんが数学の先生に渡すように頼まれたんだって。
確かに草壁さんなら頼みやすそうだもんね。
細かい所に気が付く良い人だし。
後日お礼に行かないと。

## １４．僕と数学（後書き）

中１の夏休みまでに落第が決まりそうになるってどんだけ頭悪いんだろう、山本とツナ

## １５．僕と変な人

「暑い…買い物行きたくない」

本日は晴天なり。

日差しが強く、まだ午前中だというのに気温は３０度を越えていた。
ただでさえ上から太陽が照り付けているのに、アスファルトが太陽光を反射して上も下も暑い。
日焼け止め塗ってきたけど、汗で流れ落ちるんじゃないかなこれ。

こんな暑い日に何故外に出ているかというと…冷蔵庫が空っぽになったからだ。
猛暑が続いて外に出ずにいたら、何時の間にか。と言った感じ。
夕方の少しは涼しい時間帯に出れば良い話だけど、今日の昼ご飯の材料からして無い。
だからこうして午前中に買い物に出ているというわけだ。

「暑いよー」

スーパーまではまだまだ距離があると言うのに、大丈夫なんだろうか僕。
熱中症で倒れたりしないかな？
いつもより明らかに歩く速度も遅い。

だって暑いんだもの。暑いとだるくなるんだもの。
僕はどっちかっていうと冬の方が好き。
夏は脱ぐにも限界があるけど、冬は着込めば対処できるから。

途中で何か買って水分補給しなきゃ本当ヤバイかも。

ぼーっとしながら歩いていると、前方に誰かが座り込んでいるのを見つけた。
旅館に備え付けられてるような浴衣を着た男性と、スーツを着た子供？
浴衣？この辺に旅館なんてないはずだけど…自前とか？
それにしてもなんで座り込んでるんだろう。
具合でも悪いのかな？

「ビアンキにはきかねーな」

ビアンキ？どこかで聞いたような…どこだっけ。
そんな事より、座ってる人の体調確認しないと。

「あの、大丈夫ですか？」
「貴女は…雛さん？」
「お前、雛を知ってるのか？」

なんで二人とも僕の名前を知ってるんだろう。
僕は二人が誰かわからないんだけど…どこかで会ったっけ？
あ、具合が悪いなら浴衣の人、立たなくてもいいのに。
今度はきょろきょろと周りを確認し始めたよ。
え、熱中症とかじゃなくて違う病気？

「ええと、どこかでお会いしましたっけ？」

「俺はツナの家庭教師のリボーンだ。よろしくな」
「小さいのに家庭教師なの？よろしくね」
家庭教師？
そういえばツナに家庭教師が付いたって聞いてたけど、この子供が？
あれ？リボーンって原作のタイトル…もしかして主要キャラなのかな？
うーん…となるとこの一緒にいる人も主要キャラの可能性があるんだけど…。
心なしか顔色が悪いよ…首の振りすぎなんじゃないかな？
「具合悪いんですか？」
「え？いえ…あの、雛さん。今日は雲雀さんは一緒じゃないんですか？」
「雲雀さんって、委員長？一緒じゃないですけど…というか学校以外で一緒に居る事ってないですけど」
「そうですか」
そう言いながら浴衣の人はふーっと息を吐き、安心したようにまた座り込んだ。
今日はって事は、彼の中では僕と委員長ってセットなの？
応接室か見回りの時しか一緒にいないんだけど。
「このアホ牛はランボだ。覚えなくてもいいぞ」
「リボーン！」
ランボさん？っていうのか。
この人の事も一緒に昶に聞いてみよう。
「知ってるみたいだけど、山雀雛って言います。よろしくお願いし

ます」
「オレはランボといいます。よろしく」
僕が自己紹介すると、ランボさんはまた立ち上がって自分の名前を言った。
ん？具合は大丈夫なのかな。
大丈夫ならいいんだけど…ところで、
「なんで僕が委員長と一緒にいると思ったんですか？」
「思ったというか、貴女はいつも雲雀さんと一緒にいらっしゃいますし…だから今日も一緒なのかと」
「？？」
「雛、こいつの話は無視していいぞ」
リボーン君がそう行って来た。
年齢はどう見てもランボさんの方が上なのに、立場はリボーン君の方が上なのかな？
なんだかおかしな二人だ。
「…いなくてよかった。オレが雛さんと話してると雲雀さんにいつも睨まれるし咬み殺されるし」
「え？僕、貴方と話すのは初めてですよね？」
「ああ、いえ、こっちの話です」
つまりランボさんは委員長の被害者って事なのかな？
でもそれだけだと、僕と委員長が一緒にいる。って事にはならないような。
よくわからないなぁ。
「雛、何か用事があったんじゃないか？」

「あ、これから買い物に」
「なら早く行った方がいいぞ。これからもっと暑くなる」
そういえばそうだった！
早く行かないと、帰る頃には最高気温に達しちゃう。
「ランボさんは具合が悪い訳じゃないんですよね？」
「そーだぞ」
「わかりました。じゃあ僕はこれで失礼します」
まだランボさんが何かぶつぶつ言ってたみたいだけど、僕にも用事があるんだし具合が悪いんじゃなければ大丈夫だよね？
僕は二人に軽く会釈をして、その場を離れた。

買い物から帰ったら出かけていた昶が帰ってきてたので、今日の出来事を話してみた。
浴衣のランボさんは、１０年後の未来から来たんだって。
今の姿は前にツナの家の前で見た牛の子なんだとか。
大人だと思ったら１５歳！
二十歳くらいかと思ってた！
フェロモンっていうの？
そういうのが出てた気がする。

それで、リボーン君は本当に家庭教師なんだって。
例のネコジャラシの公式を発見したのもあの子だとか。
あれ？発見したんだっけ？

発見してなくてもその公式を知っていて、例の問7を解ける頭脳の持ち主なんだから凄いよね。
ツナの家庭教師って色々と凄いなぁ。

そういえば10年後のランボさんが、僕と委員長がいつも一緒にいるって言ってたけど未来ではそうなの？
もしかして中学校卒業後も風紀委員は不滅なの？
未来の僕、ちゃんと就職出来てるんだろうか。

将来が不安になった夏休みのある日の出来事でした。

## 15．僕と変な人（後書き）

正一君が悲惨な目に会う回
リボーンに苗字と名前どっちで呼ばせるか迷った…山本とか獄寺とか今考えると苗字呼びだよねぇ

## 16．僕と医者

「雛、あそこにいるのツナじゃないか？」
「ほんとだー。リボーン君も一緒にいるね」

今日は特に用事もなかったので、昶と一緒に学校への通学路を歩いていた。
言われて気付いたけど、前方にツナとリボーン君が何かを言い争ってるみたい。

「まさか不治の病とはな…残念だ」
「終えるなー！！！」

不治の病？
もしかしてツナが？どういう事だろう…。

「ああ、ドクロ病の回か」
「ドクロ病？」

病ってくらいだから、病気？
そんな病気初めて聞いたんだけど。

「それってどんな病気なの？」
「んー…見た方が早いかな？ツナに話しかけてみようよ」
「うん」

説明しにくい病気なのかな？

とりあえず、ツナに話しかけてみよう。

「はー…帰る」

「思ったより冷静だな」

「あたり前だ、不治の病なんて信じるかよ。こんなの洗えば取れるよ」

「何が取れるの？」

「ひ、雛！」

「おはよーツナ、リボーン」

「あ、昶君も」

「ちゃおっス」

リボーン君にばかり目が行ってたのか、ツナは両腕を上にあげて大袈裟な程に驚いていた。

ん？右の掌に真っ黒な髑髏…髑髏？

「ツナ、それってボディペインティング？」

「違うと思うけど、気付いたら掌にあってさ。多分リボーンの仕業だと思うんだけど」

「リボーン君の？」

でも昶はドクロ病って言ってたし、リボーン君は不治の病って言ってたみたいだし。

これがその聞いた事無い病気の特徴なのかな？

「洗えば取れると思うから、これから帰って洗おうと思うんだ」

「だからさっき帰るって言ってたんだね」

「ドクロ病は取れないと思うけどな」

「昶、お前この病気知ってるのか？」

昶とリボーン君が心なしかにやにやしてるような…もしかして楽しんでる？
ん？髑髏の横に何か浮き出して…
『１００点とったことない』
髑　髏　が　喋　っ　た　！
ツナはまだ気付いてないみたいだけど…今のってリボーン君が何かやった訳じゃないよね？
やっぱりこれがドクロ病の特徴なのかな。

「ねぇツナ、右手が凄い事になってるんだけど」
「んだこりゃー！！！ドクロしゃべってるー！！！」
「ドクロ病は死に至るまでに人に言えない秘密や恥が、文字になって全身にうかんでくる奇病だぞ」
「別名“死に恥をさらす病”だろ？」
「お前本当に知ってるんだな。珍しい病気だがどこで知った？」
「企業秘密かな」

本当楽しそうだね二人とも。
対してツナは必死で髑髏を消そうと擦っている。
ん？あれ…？

『注射の日は学校を休む…』

「ツナ、右の手の甲にも髑髏が」
「また増えてるーっ！」
「ツナしか知らないはずの恥ずかしい秘密だろ」
「これ、マジで病気なのー！！」

「あ、ツナ！」

ツナが耐えられずに通学路を逆走し始めた。
家に帰るのかな？
そうだよね。隠せない部分に髑髏と恥ずかしい秘密が浮き出たまま授業を受けるなんて出来ないもんね。

「ねぇ昶、大丈夫なの？ツナ」
「んー…ドクロ病は発病してから1時間で死に至る病って聞いたけど、大丈夫じゃないかな」
「え？1時間ってもうあと何分もないんじゃ…」
「リボーンが手を打ってるから大丈夫だよ。だろ？」
「そーだな。助かる方法が一つだけ残ってはいる、そいつが来る頃だからオレも帰るぞ」
「じゃーな」
「ツナを助けてあげてね」

僕の言葉には答えず、ニッと笑ってリボーン君はその場から消えた。
ツナ、大丈夫かなぁ？

「ツナがどうなるか気になる？」
「うん…大丈夫なのかな？」
「うーん…一悶着あるけどちゃんと助かるはずだよ。見に行く？」
「行きたい」
「じゃあ帰ろうか。そうそう、ツナの家に着いたら俺の後ろに居てね。前に出ちゃダメだよ」

ん？どういう事だろう…。
前に出ちゃダメって何か危険な事でもあるのかな？

「手の早い女好きが居るからね」
僕が不思議そうな顔をしていた事に気付いたのか、昶が一言教えてくれた。
けど、謎は深まった気がする。

「おまえの背中の秘密を読んだら不憫に思えてきてなぁ…」
「え？」
「おまえ京子ちゃん話すまで、女子と会話したことなかったんだってな。悲惨すぎる」
「ほっといてください！！」

ツナの家の前に到着。
開いたままの窓から、そんな会話が聞こえてきた。
一つはツナの声だけど、もう一つは知らないなぁ。

「女子と会話したことがないって…一応僕も女子なんだけど」
「一応じゃなくて雛はちゃんと可愛い女の子だよ」
「ええと、ありがとう？」
「本当なんだけどな」

「はいはい」

昶の言葉は、従兄弟で親友の欲目だってわかってるからね。
本気にしないようにしないと！

それにしてもさっきの会話を聞いた限りでは、ツナの病気は治ったのかな？
不治の病を治すってどんなに凄い医者なんだろう。

「あがらせてもらう？」
「ううん、治ったならもういいかな」
「うん、それがいいよ。あの医者に会わないに越したことはないし」

ツナを治した医者の事？
さっき言ってた手の早い女好きってその医者の事なのかな？

そんな事を考えていると、ふいに玄関が開いた。
出てきたのは白いスーツに黒いシャツ、柄物のネクタイを緩く結んだくたびれた感じのおじさん。
…誰？
じっと見ていたら、おじさんと目が合った。

「！君かわいーねー。おじさんとチューしようか」
「させるか！」

おじさんが僕に向かって突撃…してきた所に昶の回し蹴りが決まった。
ゴロゴロ転がって玄関の扉に頭を打ちつけてたけど、大丈夫かな？

「行こう雛、このおっさんと一緒にいると妊娠するよ」

「ええ！？」
「雛ちゃんって言うの？名前もかわいーなー」
「寝てろ！」

昶が横たわっているおじさんの腹に足を振りおろした。
あれは痛い…。

この人が例の医者？なのかな。
そうは見えないんだけど…

凄い人みたいだけど、あまりお近づきにはなりたくないかもしれない。

## ※僕と女の子

「靴が、無い？」

ある日、僕が遅れて学校へ行くと…下駄箱にあるはずの僕の内履きがなくなっていた。
代わりにあったのは一枚の紙。

『死ねブス』

過激すぎる…これは女の子の字かな？
少し丸まってて可愛い字。

僕は学校でそれ程知り合いが居る訳でもないし、ましてや恨まれるような事なんてしてないとおもうんだけど。
ということは、昶のファンからかな？

風紀委員には手出し無用っていう暗黙のルールがある中で、こんな行動に出るなんてよっぽど昶のことが好きなんだな。
その積極性を違う方向に持っていけばいいのにと思うけど。

呼び出しさえなければ、帰るいい理由になるんだけど。

仕方ないので、僕は教務室へ来客用のスリッパを借りに歩き出した。

「雛さん、靴はどうされたんですか？」
「行方不明です」
「ふざけてるの？」
「いえ、本気ですけど」

僕が在り処を知らないんだから、行方不明であってるよね？
それにしても、僕がふざけてそんな事を言う人間だと思ってるんだろうか。
だとしたら心外だ。

「靴が無いので暫く学校くるのやめようかなーとも思ったんですけど」
「認めないよ」
「ですよねー」

ソファに腰掛けて、僕はポケットから折りたたんだ紙を取り出した。
靴の代わりに入れられていたそれを広げて眺めてみる。

うん、何回見ても可愛い字だ。
悪辣な単語なのに字が可愛いせいで、言葉の威力が半減してる気がする。
こういう時は筆と墨で書くといいと思うんだ。

「これは？」
「犯人からのメッセージ？だと思います」

紙を見て、草壁さんが眉根を寄せた。
リーゼントだったり強面だったりするけど、意外と優しいよね草壁

さん。

「それは風紀委員への攻撃とみなしていいのかな」

「え！？いや、これは個人的なものじゃないでしょうか」

委員長のお言葉に吹き出しそうになった。

慌ててそちらを見れば、委員長はトンファーを取り出して今にも犯人を殴りに行きそうだ。

悪戯した女の子？もまさか風紀委員長が直々に出てくるとは思っていないに違いない。

被害にあったのは僕だけど、なんだか加害者の女の子に同情しかできないよ。

「今まで何もなかったのが不思議なくらいですし、その内相手も飽きると思いますけど」

「雛さんは心当たりがあるんですか？」

「同居人の小日向昶、従兄弟なんですけど…密かに彼のファンクラブなんてものができてるみたいで。昶が好きだから一緒に住んでる女が憎い！とかそんなところじゃないでしょうか」

「大変ですね」

「ですねぇ」

昶が誰彼構わず愛想を振りまくのをやめればいいんじゃないかなと思うけど。

女の子大好きだし、男を満喫してるみたいだし止めにくいというか。

うん、でも僕に被害が無いようにして欲しいよ。

早く靴が出てくるといいなぁ。なんて楽観的なことを考えつつ、僕は目の前の書類に取り掛かった。

「それ、調べといて」
「はい」
委員長と草壁さんが何か話していたけど、きっと僕には関係ないことだろう。

「終わったー！」
「次、見回り行くよ」
仕事が終わった！と喜んだのも束の間、委員長のお言葉に僕はがっくりと肩を落とした。
うん、ねぇ。少しは休憩ください。

「校内ですか、校外ですか」
「外」
一文字って簡潔すぎます。
委員長だから仕方ないけど、こう言葉のキャッチボールをしたいなぁとか…いや、相手を気遣うような饒舌な委員長ってなんだか怖い。
「君…」

「！靴履き替えて来ます！」

睨まれてしまったので僕は慌てて応接室を飛び出した。
口に出してなかったよね？

そういえばあの紙持ってくるの忘れちゃった。
ん？応接室に入って広げて、それからどうしたっけ…。
机の上には無かったような気がするけど。
気付かないうちに捨てちゃったかな？

そんな事を考えている間に昇降口に到着。
あ、スリッパ返してない…でも暫く使うだろうし借りてようかな。

早く行かないとトンファーが飛んでくるかもしれないし。
僕は急いで下駄箱からローファーを取りだして…？内履きが戻ってきてる。
返って来るの早くないかな。

「山雀さん」

スリッパを返しに行くかどうしようか迷っていると、ふいに声を掛けられた。
女の子特有の高い声。
振り返ると、そこにはふわふわな髪の女の子が居た。
たまに昶と一緒にいる子だなぁ…あ、もしかして。

「あの、ご、ごめんなさい」

彼女が涙声で僕に謝ってくる。

あのメッセージを書いたのも、靴を隠したのも彼女って事なのかな。

「気にしてないよ。でも、もうしないでね」

そう声を掛けた瞬間、びく！っと大袈裟な程彼女の方が震えた。

え？これって僕が怖がられてるの？？

何もしてないよね。

困惑する僕を置いて、用事は済んだとばかりに彼女は走り去る。

一体、どういう事なの。

訳がわからないけど、これ以上委員長を待たすと僕の命が危険だ。

慌ててローファーに履き替え、僕は昇降口を後にした。

スリッパは翌日返しに行きました。

## ※僕と女の子（後書き）

草壁さんが突き止めてくれたんだと思います。
風紀委員怖い

## 17．僕と応接室

「雛さん、おはようございます」
「おはようございます草壁さん」

応接室に行くと、草壁さんが一人で書類とにらめっこしていた。
あれ？委員長はいないのかな。まぁいいか。
今日は草壁さんに用事があるんだし。

「草壁さん、これよかったら貰ってください」
「これは…？」
「僕が作ったもので申し訳ないんですが、夏休みは補習の件で助かりましたし。そのお礼です」

そういいながら僕は鞄からクッキーの袋を一つ取り出して、草壁さんの前に置いた。
草壁さんがそれを難しい顔をして見ている。
クッキー苦手だったかな？一応甘さは抑えてみたんだけど…。

「これは委員長にではなく私に、ですか？」
「そこでなんで委員長が出てくるのかがわからないんですが、それとは別に応接室で食べる物は用意してあります」
「そうですか。では、ありがたく戴きます」

僕がもう一つの袋を鞄から出して机の上に置くと、草壁さんは納得したように最初に渡した方を手にとった。
うん？苦手ではないのかな？

委員長の分がないのに副委員長の俺が受け取れるはずがない！って考えたんだろうか…。
補佐の鏡みたいな人だね本当に。
草壁さんは手が離せなさそうだし、今日は僕が紅茶を入れようかなー。

「草壁さん休憩にしませんか？」
「いえ、今日は委員長が見回りに出ていますから私が片付けてしまわないと」

給湯室で僕の分と草壁さんの分を入れて、応接室に戻る。
まだまだ終わりそうにない書類の山に、草壁さんにそう声を掛けてみたんだけど。
真面目だなぁ。
いや、不真面目だったら即咬み殺されちゃうね。

「ここ置いておきますね」
「ありがとうございます」

クッキーの横にカップを置く。
僕はどうしようかな、手伝ってって言われたわけでもないし…でも仕事中の人の前で寛ぐとか人としてどうなの？
うう、ちょっと手伝ってキリがいいところで休憩しよう。

「雛さん、そろそろいいですよ。私一人でも大丈夫です」
「そうですか？じゃあお言葉に甘えて」

草壁さんがそう言ってくれたので、僕は持ってきたクッキーの袋を広げて遅めのティータイムに入った。

9月になったばかりで外はまだ暑いが、室内は窓を開けておけば風が入ってきてなかなか過ごしやすい。

僕と草壁さんの間に会話はないけど、応接室では何故か沈黙が苦にならない。

カチカチと時計が時を刻む音が室内に響く。

…なんだか眠くなってきた。

お昼までまだ時間があるし、ちょっと目を閉じてもいいかなぁ？

本格的に寝るんじゃなくて、ちょっとだけ！

なんだか寒い、気がする。

そういえば窓開いてたなぁ。

パサッ

誰かが何かかけてくれた？

あったかい…

ドザッ！！

んー？何の音なのかな、うるさいよ。

何かが倒れる音や、大声での会話に僕は目を覚ました。
目を開けて真っ先に目に入って来たのは、僕の部屋の物ではない天井。
あれ？ここどこだっけ…。

僕が寝てるのは真っ黒な革張りの…ソファ？
ん？僕一体いつの間に横になったんだろう。
座ったまま目を閉じたはずなんだけど。
不思議に思いながらも体を起こすと、何か黒い物が落ちた。

黒い物…学ラン？
草壁さんがかけてくれたのかな？

…！
そっと学ランを退けて僕は驚いた。

ス　カ　ー　ト　捲　れ　て　る

見苦し過ぎる格好を隠す為にかけてくれたのかな。

「タワケが！！！」

パカァン！

何か後ろで良い音がした！
そういえば物音や人の声がしたから起きたんだった！

僕は体を捻ってソファの背もたれ越しに応接室入り口を見た。
そこに居たのはスリッパを持ったパンツ一枚のツナ？と、フラフラしている委員長。

ツナ、もしかしてさっきの良い音ってスリッパで委員長を叩いた音？？

「ねぇ…殺していい？」

委員長が本気になってる。
そりゃスリッパで叩かれれば誰でも怒るよ！
ツナ、何しちゃってるの。

「そこまでだ」

あれは、リボーン君？
え？なんでリボーン君が中学校にいるの。

「やっぱつえーな、おまえ」
「君が何者かは知らないけど、僕今イラついてるんだ。横になって

まっててくれる」

委員長がトンファーを構え直してリボーン君に殴り掛かる。
危ない…！
咄嗟に殴られるリボーン君を想像して、僕は目を逸らしてしまった。

キィンッ！

殴られた音とはかけ離れた、金属と金属がぶつかるような音が聞こえた。
驚いてそちらを見れば、委員長のトンファーをリボーン君のが十手で受け止めている。
委員長のトンファーを止めるって…色々と規格外だねリボーン君。

「ワオ、すばらしいね君」

委員長も素直にリボーン君を認めている。
うん、本当凄い。

「おひらきだぞ」
「！！」

リボーン君がいつの間にかサングラスをかけ、何かを取りだした。
あれって…爆弾！？

え？えっ？どうしよう。
今からじゃ逃げられないかも…。
導火線が順調に燃えていく…動けずに眺めていると、一瞬委員長と目が合った気がした。

「爆発なんてさせないよ」
いつからいたのか、昶が二人の間に割り込んでいた。
その手に握られているのは鋏。
鋏…？

爆弾がてんてん、という音を立てながら床に転がった。
爆発、しない？
転がった爆弾を見ると、燃えていたはずの導火線が無くなっている。

あの鋏で切ったのか昶！
えっ？でもそんな事ってできるものなの？？

「どういうつもりだ昶」
「リボーン。ツナが大事で撤退の為っていうのはわかるけど、さっきのは雛も危険だった。それを俺は許せない」
「…そうだったな」

リボーン君と昶が何かを話してる。
二人はいつの間に仲良くなったんだろう？
いや、ちょっと険悪かな？

「ねぇ君達」
「ひ、雲雀さん！」

あ、ツナが元に戻ってる。
さっきは鬼気迫る表情って感じだったもんね。
あれ？雲雀さんがトンファーを仕舞ってる…爆弾騒動でやる気が削

がれたのかな。

「さっさと倒れてる彼らを連れて出て行ってよ。邪魔だよ」
「わかってる。ツナ、昶、山本と獄寺を担げ」
「はいはい、雛また後でねー」
「やってみるけど、無理かも」

昶が僕に向かって手を振りながら、山本君を担いで出て行った。
ツナもよろよろと獄寺君を引きずるようにして出ていく。
リボーン君は最後まで委員長と睨み合っていたけど、ツナと昶が出ていくのを見届けてから姿を消した。

一体なんだったんだろう。

誰かに説明をして欲しい気分だったけど、残念ながらここには委員長と僕しかいない。
そういえば委員長、今日は学ラン羽織ってないんですね。
あれ？そういえばこの学ランって…

「もしかして、これ委員長のですか？」
「返してくれる？」
「あ、はい」

やっぱり委員長のだったんだ。
急いで定位置に座った委員長に近付き、彼の肩に学ランをかける。
うん、やっぱり学ラン羽織ってないと委員長って気がしないなぁ。
ん？委員長の前に置いてある袋って…

「僕が作ったクッキー？」

寝る前に少し食べてたけど、その時よりかなり少なくなってる。
委員長が食べたってことかな？
そう思いながら袋と委員長を見比べている僕の前で、委員長はクッキーを一つ口に放り込んだ。

「委員長って、甘いの大丈夫なんですか？」
「嫌いではないよ」

その答えって好きでもない。とも取れるんだけど…嫌々食べてる訳、ではないよね委員長だし。
嫌な事なんて絶対しなさそうだし。

「じゃあ、また作ってきますね」

それに委員長の返事は無く、彼は無言でまた一つクッキーを口に放り込んだ。
いらない。とは言われなかったし、気分が向いたらまた作ってくる事にしよう。

「君、あの赤ん坊と知り合い？」

唐突に委員長に話題を振られた…赤ん坊？リボーン君の事かな？
一回しか会った事がないんだけど、知り合いって言えるのかなぁ。

「知り合いというか…幼馴染みのツナ、沢田綱吉の家庭教師らしいです」
「ふぅん。あの赤ん坊、また会いたいな」

なんだか委員長が楽しそう。
血が騒いでるのかな？暫くリボーン君には近寄らない方がよさそう

だね。

家に帰ってから昶に今日の説明を受けた所、全てはリボーン君の策略だったらしいです。

あっちも委員長に興味を持っていたのかな？

なんだかもうひと騒動ありそうな予感。

## １７．僕と応接室（後書き）

原作の雲雀さんの学ランの行方が気になった

## 18．俺と秘密基地

「あれ？それって昨日作ってたクッキー？」
「うん。数学の補習の件で草壁さんにお世話になったし、お礼に渡そうと思って」

まさか雛が0点とは思わなかったしな。
何も知らないまま落第にならなくて本当よかった。そこのところは草壁さんに感謝したい。
ん？でもラッピングされたクッキーが3袋あるけど、誰の分？

「草壁さん一人分にしては多くない？」
「草壁さんの分と、ツナ達の分と、応接室で食べる分で3袋だよ」
「応接室で？」
「今日はテストも無いし、応接室に居ようと思って。お茶請けにどうかなーって」

最近仕事が無くても応接室に行くようになったよね。
あの雲雀恭弥がそれを許すってのも驚いたけど。
まぁあそこが並盛で一番安全な場所だろうし、異論は無いけど。
あ、安全な場所でもあり危険な場所でもあるのか。
最強最悪の風紀委員長の部屋だし。

「それってもしかして雲雀さんも食べるの？」
「ん？どうかなー。お菓子とか食べてる所見た事無いし、食べないんじゃないのかな？」
「ふーん」

応接室でお菓子を食べる雲雀恭弥。
あれ？なんだか笑えて来るな。

「そろそろ行こう？いつもよりゆっくりしすぎたし、遅刻しちゃうよ」
「そうだなー。これ１つ預っといていいの？」
「うん、お願いしようと思ってた」

そう言って雛は一番大きな袋を俺に手渡してきた。
これを皆で食べてくれ。って事なんだろうな。
そういえば聞いた事無いけど、あいつらは甘い物大丈夫なのか？

「ファミリーのアジトを作るぞ」
「はぁ！？」

俺は口に運ぼうとしていたクッキーを取り落としそうになった。
応接室襲撃って今日だったのか！

「へー面白そうだな、秘密基地か」
「子供かおめーは！アジトいーじゃないスか！」
「ちょっ」
「ファミリーにアジトは絶対必要っスよ！」
「まっ」
「決まりだな」

「冗談じゃないよーっ！マフィアっぽくアジトなんて！」
山本に反論したものの、獄寺も秘密基地作成には乗り気のようだ。
ツナは嫌みたいだけど…驚いている俺を置き去りにして、ツナを除いた３人が秘密基地について盛り上がっている。
男ってこういうの本当好きだよなぁ。
あ、今は俺も男か…。

「どこに作るんだ？裏山か？」
「なわけねーだろ！！」
「学校の応接室だ」
「！？」
「応接室はほとんど使われてねーんだ」
「一応聞くけど、本気？」
「当たりめーだ」

リボーンに一応聞いてみたけど、秘密基地作成をやめる気はないらしい。
確か風紀委員長にボコボコにされて、リボーンが爆弾を投げてその隙にとんずらだったか？
まずいなー。今日は雛が応接室にいるはず…原作ではガラスが割れる程の爆発が起きてたよな。
雲雀さんは怪我一つしてなかったけど、あれは漫画でのことだし。
生身の人間が至近距離の爆発に耐えられるとも思えないんだが。
…爆弾ってどうすれば爆発せずに済むのかね。

「家具も見晴らしもいいし、立地条件は最高だぞ」
「まずは机の配置替えからだな」
「俺１０代目から見て右手の席な」

「俺は一度教室に寄ってから行くよ。先行っててくれ」

さて、どうしようか。

とりあえず、一旦教室に戻って鋏を借りて来た。
導火線の長さにもよるけど、火薬に燃え移る前に鋏で切っちゃえばいいんじゃないかと…無理かな、やっぱり。
爆発する前に爆弾自体を外に投げ出すってのも考えたけど、俺が最強の殺し屋に敵うとも思えないし…片手が塞がってるはずだからいけるかもしれないけど。
無事投げ飛ばせたとしても外からの爆風でガラスが割れそう。
破片が室内に降り注ぐとか危なすぎる。

リボーンに爆弾を出させないのが一番なんだろうけど、それは出来なさそうな気がするんだよなぁ。

「うおぉおぉっ死ぬ気でおまえを倒す！！！！」
「何それ？ギャグ？」

応接室では、ちょうどツナが死ぬ気タイム中でした。

やっぱり雲雀さん強いなー。死ぬ気のツナを軽くあしらってる。
あれ？いつも学ランを羽織ってるのに今日はないのか。
汗一つかかなそうな風紀委員長様でも暑いのかね…ソファーに置いてある。
いや、学ランをソファーに横になってる人にかけてるのか？
そんな優しさが雲雀さんにも…って、

「雛！？」

雲雀さんの行為にも驚いたけど、この状態で寝てられる雛にも驚きだよ。
ドカッとかバキッとかドサッとか…こんなに大きな音がしてるのに起きないって、結構神経太いよね雛。

「タワケが！！！」

パカァン！

死ぬ気のツナがスリッパで、雲雀さんの頭を叩く。
物凄い良い音がした。

「ねぇ…殺していい？」

一撃入れられただけでも雲雀さんには気に入らない事なのに、その上スリッパで叩かれるなんて。
本気になるに決まってる。
ってことはそろそろか。

「そこまでだ。やっぱつえーな、おまえ」

「君が何物かは知らないけど、僕今イラついてるんだ。横になってまっててくれる」

雲雀さんがトンファーをリボーンに向けて振りおろす。

カキンッ！

それをリボーンが十手で受け止めて…

「ワオ、すばらしいね君」

「おひらきだぞ」

「！！」

ここだ！ここでリボーンは爆弾を取り出して…よし、あれならいける。

導火線はそれなりの長さがあった。

俺はポケットから鋏を取り出して、雲雀とリボーンの間に身体を滑り込ませる。

そして導火線の根元から勢いよく切断した。

「爆発なんてさせないよ」

導火線とさよならした火薬部分は大きな爆発音ではなく、てんてん、という間抜けな音を出して床に転がった。

爆発しなかった事に安堵してソファーに目を向けると、いつ起きたのかわからないが雛が目を見開いていた。

そうだよね。クラスメイトが倒れてるわ爆弾投げられるわ、訳がわからないよね。

後でちゃんと説明する事にしよう。

「どういうつもりだ昶」
「リボーン。ツナが大事で撤退の為っていうのはわかるけど、さっきのは雛も危険だった。それを俺は許せない」
「…そうだったな」
そうだよリボーン。それが大前提だ、結果ツナが危険な目にあっても俺は雛を取る。
「ねぇ君達」
「ひ、雲雀さん！」
あれ、ツナ死ぬ気タイム終わったんだ？
雲雀さんは…トンファーを仕舞ってるな。もう戦う気は失せたのか
「さっさと倒れてる彼らを連れて出て行ってよ。邪魔だよ」
「わかってる。ツナ、昶、山本と獄寺を担げ」
「はいはい、雛また後でねー」
「やってみるけど、無理かも」
俺は山本に肩を貸しながら、雛に手を振って応接室を後にした。
意識のない人間は物凄く重い…半分引き摺ってたのは仕方のない事だと思うんだ。
それにしても…爆弾を見た雲雀さんが一瞬、ソファーに視線を投げた気がしたけど。
雲雀さんにとって雛はどういう存在なんだろう。
その後は意識の戻った山本と獄寺も含めて屋上でリボーンからの説明。
ツナ達を鍛えるのはいいけど、雛を危険な目に合わせるのはやめて

よね。

## １８．俺と秘密基地（後書き）

応接室襲撃昶視点。

## ※僕の朝の日課

朝５：００起床。
僕は朝はすっきり起きられる方なので、素早く着替えて町内のジョギングへ。

新聞配達のおじさんに挨拶したり、犬の散歩ついでにウォーキングしているおばさんに挨拶したり。
もう何年も走り続けてるから、ここら辺の人とは大体顔馴染だ。

「お前が山雀雛か？」
「小せぇな。本当にこいつが風紀委員なのか？」
「…何か用ですか？」

足を止めるとペースが狂ってしまうので、その場で足踏みをしながら声を掛けてきた二人組みを見る。
うん、知らない人だ。
僕は知らないけど、きっと風紀委員会にぼこぼこにされた人なんだろうな。

風紀委員会に入ってからと言うもの、校内でも校外でも柄の悪い人達に話しかけられることが増えた。
その人達は口裏を合わせたかのように同じ事しかいわない。

「お前に恨みはないが、風紀委員に恨みがあるんでな。俺達の憂さ晴らしに付き合ってくれよ」
「大人しくしてれば優しくしてやるよ？」

まぁ、そういうことだ。
委員長や草壁さん、他の委員会の人に敵わないから弱そうな僕を狙うって事なんだろう。
確かに僕は１５０ｃｍと背は低いし、何より女だから弱そうに見えるんだろう。
僕の行動、ジョギングコースなんかは調べてくるくせに、今まで僕にちょっかいかけてきた奴らがどうなったかは調べないのかな？

一応僕だって身体を鍛えてはいるんだ。
一重に委員長に咬み殺されないように。だけども。

「はぁ…なんだか残念だなぁ」
「！？お前俺たちをバカにしてんのか！」
「女だからって許さないからな！」
「いやバカにはしてないけど」
「うるせぇ！」

最初に話しかけてきた奴が僕に向かって突進してきた。
え、体当たりとかそんな単純な…
わざと食らう気もないので、僕は軽くステップを踏んで横に避けることにする。
彼はぶつかる対象が居なくなったためそのまま地面をスライディングしていきました。痛そう。

「あ、兄貴！よくも兄貴を…！」

「いや、僕何もやってないけど」
「許さねぇ！」
僕避けただけだよ、謙遜とかじゃなくて何もやってないんだ。
だけど聞く耳を持たないもう一人は、怒りのまま僕に突進…って兄貴さんの何を見てたんだ君は！
さっきと同じようにひょいっと避ける。と子分さんもスライディングしていった。
顔面スライディング…痛そうだなぁ。僕が避けないとでも思っていたんだろうか。
痛すぎて起き上がれないのか、二人仲良く地面に横たわる様はとても…
「残念です」
普段ならここで委員会の誰かに電話をして、二人を引き取ってもらうところなんだけど…
僕ジョギング中は電話持ち歩かないんだ。
前は持ち歩いてたけど、委員長からの呼び出しとか呼び出しとか呼び出しとかがかかってきて怖くなったっていうね。
だって僕番号教えてないんだよ。なのになんでかかってくるの。
ああ、話が逸れた。
まぁそういう訳で電話が手許にないから二人は放置する事に決めた。
車に轢かれない内に起きて家に帰ってね。

そんな感じで３０分～1時間走ってから帰宅。
絡まれる回数が多いと1時間はかかっちゃうんだよね。
今日の二人組みは今までで一番残念だったけど、強い人になるとやっぱり時間かかっちゃうし。
強いといっても多分草壁さんより弱いんじゃないかな？

帰宅後はシャワーで軽く汗を流すことにしてる。
汗臭いまま学校に行くとか嫌だしね。
だから家に帰ったらまずは自室へ着替えを取りに戻る。

当然の事ながら僕は一人部屋。
昶の部屋は隣で、それなりに防音効果が高いのか軽い物音くらいなら隣の部屋には聞こえない作りになっている。
それはいいんだけど…

「なんで、いるんですか」
「君が電話に出ないから」

部屋のドアと開けると、委員長が僕のベッドに腰掛けて読書をしていらっしゃった。
いや読書とはいえないかもしれない。だって読んでたの生徒手帳だったんだもの。
何やってんの？この人

思わず時計を確認…うん、まだ6時前だ。朝の。

「電話する時間には早いんじゃないですか？」
「そんなの知らないよ。携帯を持ち歩かない君が悪い」

「…なんという俺様」
「何か言った？」

睨まれた！悪い事言ってないのに睨まれた！
だって６時前って寝てる生徒もいるよ？
もし僕が寝てたせいで電話に出なかったらどうしてたの。
その時も部屋に侵入するの？

あれ？そういえばどこから入ったんだろう…玄関からなら昶が入れないと思うんだけど。
でも昶は寝起き悪いからなぁ。
チャイム音に気付かない可能性も…そもそも委員長が鳴らすとも思えないけど。

「どこから入ったんですか」
「窓から」

それを不法侵入と言うんです！というか２Ｆですよここ！
開いてたよ。としれっと言う委員長に僕は脱力した。
もういいや、話を聞いて早く帰ってもらおう。

「それで、何か用ですか」
「君に赤ん坊の事を聞きに来た」

学校でもいいですよねそれ！
電話かけるのもいいですよ。でも出ないからって家にまで押しかける程の内容でもないですよね！？

「赤ん坊ってリボーン君の事ですよね。僕１回しか会った事無いし、殆ど会話らしい会話したことないんですけど。だからわかりません」

「そう、ならもういいよ」
「はぁ」

もういいなら、帰っていただきたいんですが…そういえば窓から入って来たって言ってたけど靴はどうしたんだろう。
履いたままでも困るけど、どこにも見当たらないし。
もしかして、と思って窓の外を見てみると、屋根の上に綺麗に揃えて置いてあった。
変なところで几帳面？

首を傾げていると、ぐぅ。と小さく僕のお腹が空腹を訴えた。
ああ、早くシャワーを浴びてご飯作らないと。
うん、もういいや。

「委員長」
「何」
「ご飯、食べていきます？」

すぐに帰らないのなら、それもいいかなぁって。

## ※僕の朝の日課（後書き）

食べていったのか、シャワー浴びてるうちに帰ったのか。

雲雀さんが何食わぬ顔で朝食食べてたら、起きてきた昶が驚いて二度寝しに部屋に戻りそう。

まだ夢を見てるんだとか言って。

## １９．僕と体育祭

「え、借り物競争？」
「そー。午前中国語が自習になってさ。その時に体育祭役員から聞かされたんだけど、今年の１年は借り物競争をやるって」
並盛中学校の体育祭で行われる学年別競技は、それぞれの学年の体育祭役員が集まって決めるという方法をとっている。
競技の内容なんかも全て体育祭役員任せ。
その年の役員がクラス全員で３０人３１脚のタイムを競う。と言い出せば通ってしまうのだ。
それを考えると…

「無難な競技だねー」
「だな。平均台を渡って、その後地面の上に置かれた網を潜る。その先の跳び箱を飛んだ後、紙が置いてあるからそれを見て、対象が人なら連れてきてそこから二人三脚をしてゴール。物ならそのまま持ってゴールだってさ」
「ふぅん。対象が物だったら有利だね」
「かもねー」

「と、思ってたのに」

数日前の昶との会話を思い出しながら、僕は手の中にある紙をもう一度見た。

『風紀委員長の学ラン』

何度見てもそこにはそう書いてある。
対象が人の場合は二人三脚、物の場合はそのまま持ってゴール。
明らかに物の方が有利なんだから、難しい物にするのは当然の事。
なんでそこまで考えなかったんだ僕！

折角一番に紙を引いたのに、なんでこれが当たっちゃうのかな。

「『獄寺隼人のダイナマイト』！？何それそんなの本当に持ってるの！」

現実逃避してる間に、後続が追いついたようだ。
ダイナマイト…それも大変そう。

「『小日向昶』！？やった！小日向くーん！」

そのまま人物指定なんてのもあるのかぁ。
僕も昶がよかったな…昶ならいる場所知ってるし。

これ途中棄権もありかな？
委員長の学ランだもん。無理だって言えば通りそうな気がするけど。

「ダメ元で一応聞いてみようかな」

僕はポケットから携帯電話を取り出して、着信番号の一番上をリダイヤルした。

数回のコール音。
きっと今頃応接室で校歌が流れてるんだろうなぁ。

～大なく小なく並がいい

ん？今微かにだけど校歌が聞こえたような…気のせいかな？

『何？』
「お疲れ様です委員長」
『用件は』

なんだか機嫌が悪いような…言ってもいいのかな？
早く言わないとかなり追い越されちゃったし、借りれたとしても最下位になっちゃうよね。

「学ラン貸してください」
『…』
「…」

む、無言！？
怒っていらっしゃるんですか、ですよね。
学校大好きな委員長の旧制服を貸してくれとか咬み殺されても文句は言えませんよね。

「あの、やっぱりい」
『それが君の指定物なの？』
「え？はい」
『なら取りにきなよ。君の真後ろの方向にいるから』

「応接室じゃなくてですか！」

慌てて振り返れば、応援に来た父兄よりも後ろの何も無いところで木に背中を預けて電話している委員長が居た。

何してたんだろう。

まぁいいか、折角許可が出たんだし早く借りてこよう。

「今行きます」

電話を切って委員長の元へと駆け出す。

僕が走ってきたことに観客席の見知らぬ家族が驚いていたけど、仕方ない。

「学ラン、貸してください」

念の為、指定物が書いてある紙も見せる。

それを確認した委員長が、羽織っていた学ランを僕に投げるように渡してくれた。

「ありがとうございます！」

返事は無かったけど、このままゴールまで走ってこよう。

借りたのにビリとか逆に怖い。何言われるか、いや、されるかわからないし。

そんなこんなで観客席からコースに戻ってゴールまで一直線。
３位でした。
７人中３位…結構電話で時間潰したにも関わらずこれはいい成績なんじゃないでしょうか。
１位は昶を引いてた女の子だった。
物を引いた方が簡単だと思ったけど、人の方が簡単なのかも…。
だって４～７位の人は借りられずに棄権してたもの。
どんだけ難しいもの入れられてたんだろう。

さて、学ランを返しに行かないと…委員長は、さっきの場所から移動してないみたいだ。
電話していた時と同じように木に寄りかかって立っている委員長。
探さずに済んでよかった。と思いながら僕は委員長に向かって駆け出した。
それにしても、観客席で何をしていたんだろう？
誰かを探していたのかな。
その答えは棒倒しが始まった時に知ることになるが、この時の僕がわかるはずも、聞く訳にも行かず首をかしげることとなった。
ちなみに棒倒しは…カオスでした。
Ａ対Ｂ・Ｃ連合ってそれなんてリンチ？

## １９．僕と体育祭（後書き）

雲雀さんはリボーンを探してたんだと思うよ

## ２０．俺から見た二人

ジリリリリリリリリ

バンッ

うう、煩い。
目覚まし時計のけたたましい音をこれ以上聞きたくなくて、叩くようにして止めてしまった。
壊れてないかな？

「ふぁ…」

欠伸が止まらない。けど目覚ましがなった以上起きないと雛に怒られる。
一緒に住むようになって初めての朝、目覚まし時計を止めてから二度寝してしまった俺は文字通り雛に叩き起こされた。
あれは痛かった。
物凄く痛かった。
おまけに朝食抜きにされた。
育ち盛りの中１男子には辛いお仕置きだ…。
休日でも平日通り起きないと朝食は抜きにされてしまう。

「はぁ、起きるか」

手早く制服に着替え、ダイニングへと移動する。
あれ？何かいつもと違うような…。
いつもならダイニング手前の廊下まで朝ごはんの匂いが漂ってくるはずなのに。
今日は何の匂いもしなかった。
「ジョギングから帰ってきてないのか？」
キッチンを覗くが、料理を作った形跡はない。
ついでに風呂場も覗いてみたが、タイルは乾いていた。
つまり雛はジョギングから帰ってきていない。
「何かあったかな」
首を傾げつつ玄関へと向かう。
無いとは思うが、腹痛などで途中で動けなくなっているかもしれないし。
俺は雛を迎えに行く為に靴を履き、玄関の戸を開けた。
「う、わっ！」
「…雛？」
「あ、あき…っ…委員長そろそろやめません、かっ！」
「避けてばかりいないで反撃するか、僕に咬み殺されるならやめるよ」
なんと家の前で雛と風紀委員長の雲雀さんが戦っているではないか。
戦っているというか雲雀さんが一方的にトンファーで攻撃、雛はひたすら避けているだけのようだが。

「反撃、って、僕素手なんです、よっ！」
「じゃあ大人しく咬み殺されなよ」
「痛いから嫌、です！」

雲雀さんは汗一つ書いてないのに対して、雛は息が上がっている。
それだけ雲雀さんが強いってことなのか。
雲雀さんの攻撃の嵐を雛が避けて避けて避けて…あれ？

二人の攻防を見ながら、俺は何か違和感を感じた。
雛も小さい頃から身体を鍛えていただけあって強いけど、雲雀さん程じゃない。
なのに攻撃が当たらないどころか掠りもしない？

「もしかして、手加減してる？」

あの超俺様で気に入らない奴はトンファーで滅多打ち、草食動物群れを作る奴も滅多打ち。
弱い奴なんて死ねばいい。な雲雀恭弥が…
っていっても、俺の知ってる雲雀恭弥は漫画に出てくる彼だけなんだけど。

そういえば時々優しいところとかも見せてたような？
本当に時々だけど。

「昶！見てないで、助けてよっ」
「えー、仲の良い二人を邪魔するなんて俺には無理ー」
「どこをどうみたらそうなるの、わわっ！」
「まだお喋りする余裕があるみたいだね」

おっと、雲雀さんのスピードが上がったぞ。

そろそろ止めた方がいいかな。
腹も空いたし。
最初は怪我するから止めた方がいいのか？とか思ったけど、なんだかじゃれてるだけに見えるんだよね。雛は必死だろうけど。
多分だけど。俺の勘だけど。
今までの事を考えてみると、雲雀さんは雛の事を結構気に入ってるんじゃないかな。
俺は玄関へと戻り、手頃なものがないか物色する。
うーん。この箒でいいかな。
「雛！お腹すいた！」
「！りょーかいっ」
俺の今の気持ちも一緒に叫びつつ箒を投げる。
早く終わらせてって事が伝わったのか、雛がにっこりと笑った。
一旦雲雀さんから距離を取って箒を受け取り…雛の攻撃が始まる。
「そろそろ終わりにしましょう？昶もそういってますし」
「それで？まぁ、できるならやってみなよ」
「そうさせていただきます」
今まで避けていただけだったトンファーを、箒の柄の部分を使って受け流す。
受け止めると折れちゃうしね。攻撃を受け流すには動体視力が良くないと出来ないって聞いた覚えがあるような…雛も中々一般人離れしてるよね。

雲雀さんの攻撃を上手く受け流しながら、雛が懐へもぐりこんだ。

「はっ！」

「ワオ」

掛け声と共に、箒が雲雀さんに向けて勢い良く突き出される。

しかしそれが雲雀さんの身体に届く事はなく…クロスしたトンファーに受け止められた。

「まだ、やります？」

「そうだね、そろそろ飽きたかな」

「雛！」

「っ…」

雲雀さんが箒を振り払い、雛へとトンファーを振り抜いた。

今までとは段違いの速さに、雛は辛うじてしか反応できなかったようだ。

受け流せずに、攻撃を受け止めた箒の柄は折れてしまった。

箒…また買ってこないと。

「お疲れー」

「うう…朝から疲れたよー」

「俺も驚いたせいで目冷めたよ。今日は俺がご飯作るから、雛はそのまま風呂に入ってきな」

「うん、お願いー」

ふらふらと歩きながら雛が家へ入る。

俺はバイクに跨り今にも走り出そうとしていた雲雀さんに近寄った。

「で？うちの雛に何してくれてんですか」

「転校生の小日向昶か」

「この前応接室でお会いしましたよね」

俺の名前を知っていた事には驚いたけど、並盛大好きな風紀委員長だしなぁ。で納得出来てしまうのも変な話だ。

「君も強そうだ」

「いっときますけど、俺は貴方みたいに戦闘狂じゃないんで」

「そんな事は関係ないよ」

俺様すぎる！

昔はこの俺様キャラが好きだったから笑えるよなぁ。

「あんまりうちの雛を苛めないでくれますか」

「風紀委員の山雀雛をどうしようと僕の勝手だろう？」

それだけ言って雲雀さんはバイクを発進させた。

さりげなくうちの、を風紀委員の、に言い直したな。

なんとなくそのまま雲雀さんの背中を眺めていると、彼は隣の家の前で止まって塀から屋根へ飛び移り２Ｆの窓から侵入していた。

ドロボウか！

暫くしてやっぱり窓から出てきた雲雀さん。

バイクを発進させて…おお！？窓からダイナマイトが！

ああ、これってあれか。
ツナが人殺しちゃったから風紀委員に処理を頼もうって話か。
ついでにジョギング中の雛を見かけたから攻撃しましたって？
いまいち雲雀さんがわからん。
彼のことはおいておいて、そろそろ朝ごはんの準備をしますか。

後で雛に聞いた話、朝のような事はよくあるんだそうだ。
叔父さんが居なくなってから出来なかった実践、組み手の練習？相手トンファーだけど。
が出来て、体が鈍らなくて丁度いい。けど怖い。と言っていた。
今日みたいに防戦一方らしいけど。

まぁ、大きな怪我もないし、雲雀さんも手加減してくれてるみたいだし？
雛が楽しいんだったらいいんじゃないかな。

## ２０．俺から見た二人（後書き）

雛がついでなのか死体処理がついでなのか

## 21．僕と保育係

昶に用事があったんだけど…どこにもいないなぁ。
電話してみたけど繋がらないし。

僕は今、昶を探して校内を彷徨っていた。
というのも、昶が提出課題を出していない。とクラスの学級委員長がぼやいてたからなのだが。
集めてまとめて出すのは学級委員長の仕事。
だからこそ、一人分でも足りないと注意を受けるのが学級委員長なのだ。

従兄弟という事もあり、委員長に申し訳なくて僕が探してくると約束してしまった。

そういえば僕も結構提出物忘れるけど、何かを言われたことないなぁ。
風紀委員だからかな？

「何やってるんですかーーー！！！」

昶を探して校内を彷徨っていると、中庭から女の子の大きな声が聞

こえてきた。
釣られて窓から外を見ると、そこにはツナを中心としたいつものメンバーがいる。
ツナに山本君に、獄寺君。あ、昶もいた…リボーン君と、ランボ君？あの女の子は誰だろう。
なんだかもめてるみたいだけど…忙しい様だったら要件だけ伝えて帰ろうかな？
早く行かないといなくなるかもしれない。僕はそう思って廊下を駆け出した。

「たとえツナさんでも、　ランボちゃんをいじめたら、ハルが許しません！！！」
「あいつが一番保育係に向いてるな…」
「言えてる…」
「じゃあ、奴が右腕…？」
保育係？確かにランボ君はまだ幼いし、必要かもしれないけど…
あの女の子も学生だよね？
ここの制服じゃないみたいだけど。
まぁいいや、用件だけ伝えよう。
「昶！」

「あれ？雛、どうしたの」
「学級委員長が課題を早く提出してくれーって言ってたから、伝えにきたよ」
「そういえば！あれって今日までだっけ…あとで謝っておくよ。ありがとう雛」
「どういたしまして」

よし！これで用事は終わったし、家に帰ろうかな？

「うわあああああ！」
「はひ？」

その時、ランボ君が一際大きく泣き出した。
その手には何か銃器のようなものが握られている。
…おもちゃ？

「げっ！　十年バズーカ！！」
「しかも逆に持ってやがるこのバカ牛！」

十年バズーカ？なんだろうそれ。
それよりも、銃口がこっちを向いてますが…。

「雛！」

焦ったように僕の名前を呼ぶ昶。
それと同時にランボ君が引き金を引いて…弾が僕に向かって…
目の前で光が弾けた。

あれ？痛くない…？

そーっと目を開けて自分の体を見てみるが、どこも変わった様子はない。
どこかが吹き飛んでいたりとか、血が出ていたりはしていない。
あれは一体？

昶に説明してもらおうと周りを見渡すと、学校の中庭に居たはずなのに僕はどこかのキッチンに立っていた。

「え…？」

何事！？
目の前のまな板には、刻み途中の野菜と包丁が。
火にかけられたままの鍋はぐつぐつと煮え立っていた。
味噌の香りがするので、これは恐らく味噌汁だろう…危ないのでコンロの火を止める。

「ここ、どこだろう」

自宅のとは違う、見覚えの無いキッチン。
見覚えのない間取りに机、椅子、棚。
僕はどこに迷い込んでしまったんだろうか。

「…雛？」
「！？」

ふいに後ろから声を掛けられ、僕は驚いて仰け反ってしまった。
同時に足がもつれ、体が後ろへと傾く。

倒れる…！

衝撃を覚悟して目を瞑るが、いつまで経っても痛みは来なかった。
誰かに受け止められた？
背中に感じる体温が、誰かが僕を助けてくれたことを教えてくれた。
さっき、僕を呼んだ人だろうか？

恐る恐る上を見ると、漆黒の着物を着た彼は呆れたように溜息を吐いていた。

僕の記憶にある顔よりも幾分か大人びているけど…

「…委員長？」
「その呼び方、懐かしいね」
「懐かしいんですか」

じゃあ一体今は何て呼んでるんだろう。
さっき僕の下の名前を呼んだよね…

じっ、と逆さまの委員長の顔を見つめていたら、驚いた事に彼は柔らかく微笑んだ。
応接室でたまに見る、口端を上げた邪悪な笑みではなく。

初めて見るそれに、僕の心臓の鼓動が速くなった気がした。

「雛？」
「…委員長と僕って」
どういう関係なんですか？と聞こうとした瞬間、再び光が弾けた。

「雛、お帰り」
声を掛けてくれたのは昶。
その隣にはほうけたように突っ立っているツナに獄寺君、山本君。
あの女の子は帰ったんだろうか？いなくなっていた。
周りを見回すと、見慣れた並盛中の校舎が見えた。
という事は、ここは中庭？帰って来たの？
「えと、ただいま？」
何がなんだかわからないけど。
「雛はランボの１０年バズーカに当たって、１０年後に行ってたんだよ」
「１０年後？」
「そう、１０年後の自分と５分だけ入れ替われる不思議な弾を撃ち

出すんだ」

という事は、あれは１０年後の世界だったのか。
ん？じゃあ僕を助けてくれたのは１０年後の委員長？
１０年後の僕と委員長ってどんな関係なんだろう。

そういえば、僕の代わりに１０年後の僕がここにいたんだよね。
どういう風に成長してたのかなぁ。

「１０年後の僕ってどんなだった？」
「着物が似合う和風美人だったよ」
「着物…？」

今の所全くと言っていいほど着物に興味が無いんだけど。
未来ではご飯の支度してたみたいだし、何か特別に着てたって訳じゃないよね？
たった１０年で日常的に着る様になるものなのかな。

「ところでツナ達はどうしたの？魂が抜けたみたいになってるけど」
「あー…」
「１０年後の雛が綺麗過ぎて、こいつらには刺激が強すぎたみてーだな」
「え？？」
「ついでに泣き叫ぶランボもあやしていったぞ。さすがだな」

苦笑する昶の代わりに、リボーン君が答えてくれた。
綺麗過ぎて？
うーん…想像がつかない。
というかきっとそれ僕じゃないよ、別人だよ。

「ランボさん雛に飴玉貰ったんだもんねー！」
「ランボの保育係を雛に決定してーところだが、お前はファミリーじゃねーからな。まだ」

リボーン君が残念そうに呟いてたけど、ランボ君の保育係は大変そうだし遠慮したいかも…。
それにしても、僕はどんな大人になるんだろう。

「未来の僕？は何か言ってた？」
「現れた時、『恭弥のご飯を作っていたのに…』って言ってたけど…雛、あっちで誰かに会った？」
「恭弥…？」

『その呼び方、懐かしいね』

つまり未来の僕は委員長と名前で呼び合う仲って事？
それってかなり親密な…
瞬間、顔に熱が集まるのを感じた。

「雛、大丈夫？顔が真っ赤だけど」
「あ、えと…」

大丈夫じゃない！
ランボさんが足に纏わり付くように走り回っていたけど、僕の頭はそれどころじゃなかった。

僕、次に委員長と会うときどんな顔をすればいいんだろう。

## 21．僕と保育係（後書き）

１０年後の世界が書きたかっただけの話

## ※遅い春？

最近、雛の様子が変だ。
一見してすぐにわかるっていう程大袈裟なものでもないけど。

ふとした瞬間物思いに耽ったり、何かを思い出したように赤面したり。

特におかしいのは携帯が鳴った時。
携帯を手に取りじ、っとディスプレイを見つめ、通話ボタンを押そうとするが結局出ない。
雛の携帯にかけてくるって言ったら、俺様風紀委員長くらいしか思いつかないんだけど。

「出なくていいの？」
「ん？うん…」
「どうせ雲雀さんだろ？出ないと後が怖いんじゃないか？」
「そうなんだけど、今はちょっと、ね」
「？」

雲雀さんと何かあったんだろうか？
あの雲雀さんに今まで付き合えてた雛が、ちょっとやそっとで態度を変えるとも思えないけど。

そういえば雛がおかしくなったのって、ランボの保育係を決めようとした日からだっけ。

１０年後から帰って来た雛は、何を思い出したのか顔を真っ赤にして…

１０　年　後　で　一　体　何　が　あ　っ　た

入れ替わりで現れた１０年後の雛の事を思い出してみよう。

『恭弥のご飯を作っていたのに…』

恭弥…恭弥…雲雀恭弥？
あの雲雀さんの名前を呼び捨て？
しかもご飯作ってたとか言わなかったか。

もしかして、未来の二人は一緒に暮らしてる？
そうなると雛が１０年後の雲雀さんに会ってきた可能性も…

だから電話が来た時が一番おかしいんだろうか。
いや、未来の雲雀さんに会ったくらいでそんなに動揺するはずもないような？

まさか…雛に遅い春が来たんだろうか。

記憶は封印してもらってたけど、男だった頃の性格そのままだし。
そのせいで普通の女の子よりも恋愛事に興味なかったっぽいし。

うーん…俺は雛の成長を喜べばいいんだろうか、相手が悪いと嘆け

ばいいんだろうか。

数日後何があったのか、挙動不審な雛はいなくなり普段通りになっていた。

本当、何があったんだ。

## ※遅い春？（後書き）

何もなかったんじゃないかな

## 22．俺と彼女

ことわざに使われる程秋の空は変わりやすいって言われるけど…

「これはないだろ」

本屋を出た俺を出迎えたのは、バケツをひっくり返したようなどしゃぶり。
仕方ないので俺は今、軒先を借りて雨宿りしている。

出てきた時は良い天気だったのになぁ。
天気予報…午後の天気は見てなかったな。失敗した。

家まで後少し、とは言え前も見えないような豪雨の中をわざわざ走ろうとは思えない。
それに買ったばかりの本のこともある。
これ、待ってれば少しは弱まるかな…？

にゃー

空を眺めていた俺の耳に、弱々しい猫の鳴き声が届いた。
近くに猫がいるんだろうか？

周りを見回してみるが、猫は見つからない。
代わりに膝を抱えて蹲る女の子を発見した。

発見したというか…俺の隣にいた。気付かなかったー。

にゃー

うん？女の子から鳴き声が聞こえるような…尻尾？
女の子の二の腕の辺りから灰色の可愛い尻尾が見える。
ああ！猫を抱き抱えてるのか…え、潰れないの？それ。
もしかして猫は苦しくて鳴いてるんじゃないか！？

「ねぇ君」
「…」

返事が無い？
もしかして、聞こえてないのかな。

「ねぇ」
「は、はい！？」

肩を叩きながら声を掛けて、ようやく女の子が顔を上げてくれた。
紫がかった黒色の長い髪に、同じ色の瞳。
あれ？この子…もしかして…いや、それよりも。

「猫が鳴いてるようだけど、潰してない？」
「え？あ…大丈夫、みたい」

女の子が慌てて抱いていた猫を確認し、安堵の息を吐いた。
まだ子猫なのかな？毛並みが汚れてて元の色が何かわからないんけど…ああ、女の子の白いワンピースが汚れちゃってる。

「その猫、君の？」

「ううん…」

違うんだろうなぁ。と思いながら聞いてみると、案の定女の子は首を振った。

右腕を持ち上げ前方を指差す。

それに釣られるように視線をそちらに向けると、雨で見にくいが道路脇に小さな段ボールが置いてあるのが見えた。

しかも、文字の書かれた紙が貼ってあるようだ。

「えーと、『拾ってください』？」

「うん」

つまり捨て猫って事か。

珍しい事でもないけど…そんな猫を抱いてるって事は、飼うつもりなのか？

「その猫飼うの？」

「…雨で、寒そうだったから」

飼えないけど見つけてしまったから一緒に雨宿りしてる、って所か？

一回抱きしめてしまえば情が移るだろうに。

っと、さっきよりも雨が弱まってきたな。今のうちに帰るか。

「俺はそろそろ帰ろうと思うけど君は？」

「私は…もう少し…」

猫と離れがたいってとこかな？

連れて帰れないなら別れが遅いか早いかの違いだと思うけど…うちで飼えないかな？

一軒家だし、犬を飼ってる訳でもないし…。

何はともあれ、現家主にお伺いを立てなければなるまい。
俺はポケットから携帯を取り出し、同居人へと電話をかけた。

『どうしたの？昶』
「雛？ちょっと聞きたいんだけど、猫飼っても良い？」
『うん？』
「捨てられてるのを見つけちゃって」
『猫…？』

今、考えてるんだろうなぁ。
唐突に猫飼ってもいいか？なんて言われたら仕方ないか。

『うーん…父さんに聞いてみないとわからないかも。聞いてみるけど返事くるまで時間掛かると思うし、一回連れて帰ってきたら？』
「うん、わかった。あ、風呂沸かしといてくれる？」
『雨凄いもんね。了解ー』

少し間が空いてから、雛が連れ帰る許可をくれた。
本当の家主が今は一緒に住んでないとは言え、許可無く動物を飼うわけにもいかないしね。
一晩だけでも連れて帰れることになったのは良かった。
後はこの女の子だけど…

俺の声を聞いていたのか、女の子の目が期待に染まっている。
まだ確定した訳じゃないから、そんなにきらきらした目で見られても困るんだけどねー。

「まだ決まった訳じゃないけど、その猫連れて帰ろうと思うんだ」
「…ん」

「雨はまだやみそうにないし、そのままの格好だと風邪をひくかも。だから君もうちに来ない？猫と一緒に」

色々理由を付けてみたけど、これじゃ下手なナンパだな。
彼女も知らない男の家に訪れる事に抵抗があるのか、視線を宙に彷徨わせながらどうするか考えているようだった。
ここで即答するようなら説教をしなければいけない。
誘った俺が言うのもなんだけど。

「…行く」

暫くの間迷った挙句、着いて来る事に決めた女の子。
猫が心配な気持ちが勝ったって所かな？

「じゃあ近くのペットショップに寄ってから帰ろう。家に帰っても餌なんて、ましてや子猫が食べられそうな物なんて無いだろうし」
「うん」

その後俺たちは近くのペットショップで猫ミルクと哺乳瓶を購入。
ついでに子猫の飼い方もレクチャーしてもらったが…話なげーよ！
日も傾き始めたし、何より濡れた身体が冷えて寒くなったよ！

「ただいまー」

「遅かったねーお帰り。あれ？」
「…お邪魔、します」
玄関まで出迎えてくれた雛が、俺の横の女の子を見て目を丸くしていた。
そういえば、猫は連れて帰るって言ったけどこの子のことは言ってなかったな。
「こっちは捨てられてた猫を見つけた…えーと」
「…凪って言います」
よろしく。と小さく頭を下げる凪を見ながら、俺はやっぱりか。と思っていた。
髪の色や顔立ちからそうじゃないかとは思ってたけど…まさか“クローム髑髏”じゃなく“凪”に会うとは思ってもみなかった。
「僕は山雀雛だよ、雛でいい。よろしくね」
「俺は小日向昶。昶でいいよ」
「…昶、まだ名乗ってなかったの」
「忘れてた」
凪は俺たちの顔を見ながら、雛、昶と名前を呟いていた。
なんだか物凄く微笑ましい。
もうちょっとこの気分に浸ってたいけど…
「自己紹介も終わった事だし、先に風呂入ってきなよ凪」
「え、でも」
「そうだね。雨に濡れて体も冷えたでしょう？服なら僕のを貸すから」
「あ、あの」

雛が凪を風呂場まで連れて行く。腕を絡めて多少強引にだが…。
そうでもしないと彼女は遠慮しそうだし。

「みー」
「ああ、ごめんごめん」

風呂場へ直行する二人を突っ立って見ていたら、抱いていた子猫が鳴いた。
確か店員が風呂には入れない方がいいって言ってたから…濡れタオルで拭きますか。

「まだ子猫なんだね」

ぬるま湯で絞ったタオルで子猫の汚れを拭っていると、後ろから雛が声をかけてきた。
凪を無事浴槽に突っ込んできたのかな。

「動物を飼った事はないけど父さんは特別動物嫌いって訳じゃないし、多分大丈夫だよ」
「ん、ありがとう雛」
「どういたしましてー。何もしてないけどね」

それだけ言ってから、雛は自室へと向かった。
凪に貸す服を探してくるのかな…身長差があるようだから雛の服だときつそうな気もするけど。

「お風呂、ありがとう」
「気にしないで。服のサイズは大丈夫？」
「大きい…」
「昶のだからね。僕のだと小さいし…服が乾くまで我慢して」
「ん…」

その会話に凪へと目を向ければ、上下揃いの紺色のスウェットを身に着けた彼女がそこに居た。
サイズが大きいせいで余っている袖と裾を折り返している。
…それってこの前俺が寝巻き用に買ってきた奴だよね。まだ着てないけど。

「雛？そのスウェット」
「昶の部屋探したら置いてあったから新品だしちょうどいいかなーって」
「ああ、うん。まぁいいんだけど」
「ごめんなさい」
「気にしなくていいよ」

凪が申し訳なさそうな声で謝ってきたので、俺は反射的に答えていた。
実際気にしてないし。

「服は今洗濯中。まだ時間かかりそうだけど、門限大丈夫？」
「…ん、今日もお父さんもお母さんもいないから」
「そっか」

凪の言葉に何かを感じた取ったのか、雛は困ったような笑顔を浮かべていた。
今日もって言ったもんな。今日は、じゃなく。
原作によると確か凪の母親は女優で有名人。だけど凪に対する愛情なんて持ってない人だったか？父親も無関心とか書いてあった気がするな。
両親ともに金持ちらしいから家は広そうだけど、そんな所に一人で居るのか…。

「泊まっていけば？」
「え？でも…迷惑」

凪の家の事を考えていたら、ついそんな言葉を口にしていた。
雛も名案だと思ったのか、にっこりと微笑んでいる。

「僕は構わないよ。ちょっと狭くなるかもしれないけど、ベッドも二人で一緒に寝られるとも思うし」
「雛もこう言ってるんだし、あれ？明日って平日だっけ？」
「明日は日曜日だよ。学校サボりすぎて曜日感覚もおかしくなったの昶」

今日は土曜だったらしい。
よくサボったり無断欠勤しているせいか、平日と休日がごっちゃになってると言うか…。

「日曜なら好都合だな。学校が無いなら遅刻を気にする必要もないし」
「で、でも…」
「ＯＫが出たらペット用品を買いに行かなきゃ行けないし…誰か付き合ってくれると助かるんだけど？」

「…私で、いいなら」

少し考えた後、凪が首を縦に振った。
優しい子なんだよな。
今後の凪に起こることを知ってる俺は、少し遣る瀬無い気持ちになった。
雛がそんな俺を訝しんでいたが、その内話せたら話すことにしよう。

その後は夕食を三人で食べ、他愛無い話をしながら交替で子猫の世話をした。
凪と打ち解けるにはまだまだ時間がかかりそうだが、彼女の事情を考えたらそれは仕方の無い事かもしれない。
なんとかなるといいなぁ。と思いつつ俺はベッドに横になった。

## 22．俺と彼女（後書き）

猫の名前は…

## 23．僕と子猫

「父さんからＯＫ出たよ」

朝食を食べた後に携帯を開いていたら、父さんからメールが来た。
内容は昨日聞いた猫を飼っていいかどうかについて。
大丈夫だとは思っていたけど、これでようやく正式に飼える訳だ。

昶も、ちょっとわかりにくいけど凪も嬉しそう。
新しい家族が増えた事だし、必要な物を買いに行かないとね。

「という訳で、昶と凪は買い物に行って来てね」
「雛は行かないのか？」
「僕は猫と留守番してるよ。こんなに小さいのに何度も連れまわすのって危ないだろうし」

日曜だから店周辺は混んでるだろうしね。
３人で行くのも楽しそうだけど、人ごみに押されて落としたら大変だ。

「それもそうだなー」
「後は、凪にこの家の位置を覚えてもらわないと」
「え？」
「覚えておけば、またこの子に会いに来られるよ？」

僕は抱いていた子猫を凪に見えるように両手に乗せた。
灰色の毛玉みたいに丸まって眠る子猫は、とても癒される。可愛い。

「後で番号とアドレス教えてね」
「…うん」
はにかむように凪が笑う。
…同じ女の子なのになんだろう、可愛いこの子。
まだちょっと壁があるような気がするけど、もっと仲良くなれたらいいなぁ。

「飼えることになったのはいいけど、平日はどうする？」
「僕も昶も学校があるしね…連れて行っちゃダメかな」
「学校に？雲雀さんが怒ると思うけど」
「だよねぇ…」

いっそ1ヶ月くらい休学しようかな。
テストは後で補習を受けることにして…。
休学にしろ、連れて行くにしろ委員長に聞かなきゃいけないけど。

「後で委員長に電話してみるよ」
「わかった。じゃあ俺と凪は買い物行ってくるから」
「行って来ます」

二人を送り出してから、僕は携帯を開いて電話帳からある番号を呼び出した。
ディスプレイに表示された名前は“雲雀恭弥”
後はボタン一つ押すだけで、相手に繋がる…けど。

「やっぱりまだ緊張するなぁ」

はぁ。と溜息を一つ吐く。
それと言うのもランボさんの１０年バズーカのせいだ。
あれのせいで未来へ行く事になり、僕はそこで未来の委員長と会ってしまった。

あの後、暫く挙動不審だった自覚はある。
草壁さんにちょっと心配されたし…委員長に呆れた目で見られたし。
そのおかげで逆に落ち着いたけど。

それくらい、あの未来の委員長の微笑みは衝撃的だったんだ。
無表情がデフォルトで、笑ったとしてもニヤリって効果音が付くような笑みしかしない委員長が！
無駄に整った顔をしてるから破壊力は凄まじかった。

最近は、無表情の委員長を見てたおかげで落ち着いてきたけど。
電話みたいに声だけだと、そこから連想して思い出しちゃうからかけるのも緊張する。

「よし、かけよう…！？」

覚悟を決めて通話ボタンを押す…前に携帯が電子音を奏で始めた。
表示された名前は“雲雀恭弥”
慌てすぎて通話終了ボタンを押しちゃった。

……不可抗力です。

もう一度電子音が流れる。
相手は同じ、今度はしっかりと通話ボタンを押して携帯電話を耳に

当てた。

『切るなんていい度胸だね』

「ごめんなさい」

『…仕事の話だけど』

怒ってはいないみたい？

業務連絡だったようだ。うん、それ以外の用事でかかってきた事無いけど。

『以上だよ』

「あ、ちょっと待ってください！」

『何？』

危ない危ない。

用件が終わったら即切る人だから、もう少し遅れてたらまた掛けなおさなきゃいけなかったかも。

「学校に猫連れて行ってもいいですか」

『ペットの持ち込みは禁止だよ』

「ですよね。じゃあ1ヶ月くらい休学していいですか」

『…何故？』

「子猫を拾ったんですが、親猫が居ないので世話をしなきゃいけないんです。学校がある時は僕も昶も家に居られないから一匹になっちゃうし」

『…』

即断じゃなくて理由を聞いてきたからいけるかな？って思ったけど…。

委員長から返事がない。やっぱり無理かなー。

無理だったら昶と交替で休むか、奈々さんに頼むかしか思いつかないんだけど。

『いいよ』
「休学がですか？」
『学校に連れて来ても』

そっち！？
風紀委員長が校則を曲げるなんて…いや、そもそもペットの持ち込み云々については書かれてなかったかも。
てことは委員長の気分次第って事なのかな？

『応接室から出さないならいいよ』
「それは勿論」
『用件はそれだけ？じゃあね……君、今すぐ』
「切れちゃった」

最後に誰かに話しかけてたようだけど、なんだったんだろう。
あっちから切ったって事は、僕に対してじゃないよね。

それにしても連れて行く許可が出るなんて思わなかったなぁ。
休むよりはそっちの方がいいけど。
なんだかんだ言って、風紀委員の仕事って楽しいんだよね。
普通の学生じゃ見られないような書類とか、それを理解する為にやる勉強とか。

うん、明日からは子猫と一緒に頑張ろう。

ふと子猫を見ると、真剣な様子で携帯を見ていた。

正確には携帯のストラップを。

昶に貰ったもので、何のキャラクターだったかな？

ゆらゆらと揺れるストラップ。

子猫はそれを真剣に目で追っていた。

「猫じゃらしも買ってきてくれるといいなぁ」

ストラップに猫パンチを繰り出す子猫を見ながら、僕はそんな事を考えていたのだった。

## 23．僕と子猫（後書き）

子猫可愛いよ子猫

## ※ペットショップ店長の日記

○月×日（土）

今日は午後から天気が崩れ、前も見えないほどの雨が降った。
そのせいで土曜だと言うのに客が少ない。

先程訪れた男女は初めて子猫を育てるらしく、私に必要なものや飼い方を聞いてきた。
客が少なかったせいもあり、暇だった私は軽くで言いといわれたにも関わらずつい熱弁を奮ってしまった。

次から気をつけることにしよう。

子猫を見せてもらったところ、離乳を始める時期のようだ。
捨てられていたらしく、健康状態は良くない。

飼えるかわからないという事なので、猫ミルクと猫用の哺乳瓶を売った。
ＯＫが出たら明日改めて必要な物を買いに来る。という事だったので、一応リストアップしておこう。
普段ならやらないが、なんせ今日は客が来なくて暇だから。
ついでに飼い方も纏めておこうか。
いい暇潰しになる。

○月△日（日）

昨日店に来た男女が、朝から買い物に来ていた。
どうやら飼える事になったらしい。
私が昨日作っておいたリストが役に立った。
飼い方について纏めた用紙も一緒に渡したら、とても感謝された。
こんなに熱心な飼い主に拾われたあの子猫は、幸運だったと思う。

そうそう、男女が帰った後珍しい客が来た。
リーゼント頭に草を咥えた学ランの男。
腕には風紀委員の腕章…どうやら彼は、並盛最強の集団『風紀委員会』に属している者のようだ。
その彼が何の用なのか？
こう言ってはなんだが、動物を飼いそうなタイプには見えなかったのだ。

結論だけ書くと、彼は猫用品を買って帰った。

何を買うべきなのかわかっていなかったので、店長として助言をさせてもらったが。
子猫なのか成猫なのかもわかっていないようだった。
とりあえず猫のトイレ、トイレ用の砂など確実に必要なものだけ選んだ。

それらを置く部屋は応接室らしい。
応接室？学校のだろうか。
よくわからない。
爪を研がれると困るものもあるらしいので、爪とぎ器も紹介しておいた。

○月○日（月）

今日は平日…暇だ。
平日は仕事や学校で訪れる人が雨の日よりも少なくなる。
自然店は暇になる。いつも店員に任せているが、店にいる子犬たちと遊んでいようかとさえ思った。
そんな時子猫を抱いた少女が店を訪れた。
腰まである黒髪に学生服、並中の生徒だろう。
彼女はどうやら私にお礼を言いに来たようだ。
子猫の飼い方メモの話をされた。土日に来た男女の知り合いだろうか？
その後は子猫の話を軽くして別れた。
何か売れたという訳ではないが、こういう日も悪くはない。

## ※ペットショップ店長の日記（後書き）

草壁さんは委員長のパシリだと思ってる

## ２４．僕とツナの誕生日

「凪、足元でうろうろしてると踏んじゃうよ」
「みー」

キッチンに立つ僕の足元を、子猫の凪が纏わりつくようにうろうろとしている。
可愛いんだけど、蹴りそうで怖い。

なんで凪って名前になったかというと…昶が子猫の世話をする度に呟いてたんだよね。
凪、また遊びに来ないかな。とかなんとか。
他にも僕がいない時も話しかけてるようで、気付いた頃には“凪”に反応するようになってた。

慌てて凪にメールをした所、『私の名前なんかでいいの？』と返って来た。
これは良いって事なのかな？
凪がいいなら、良いと思うんだけど。
だって良い名前だし。
そう送ったら今度は『ありがとう』と返って来た。
お礼を言うのは僕の方なんじゃないかな？

昶にこの事を伝えたら、苦笑していた。
どうやら複雑な事情があるらしい…昶は知ってるみたいだけど、いつか本人から聞けたらいいな。

そんな訳で、灰色の子猫の名前は凪に決定しました。

それで今僕が何をしているかというと、誕生日ケーキを作っています。
僕のでも昶のでもないよ。
僕は3月3日生まれだし、昶は1月17日生まれだからね。
明日は10月14日…幼馴染のツナの誕生日なんだ。

沢田家でも当然お祝いするだろうから、お茶請けの感じでシフォンケーキを作成中。
10月といえばカボチャの季節だから、カボチャのシフォンケーキ。

ぶっちゃけてしまうと、僕が食べたいだけなんだけどね。

「後は焼くだけだよ」
「みー」

凪が楽しそうに尻尾を揺らしてる。
本当可愛いなぁ。
僕は生地を型に流して、暖めておいたオーブンに入れた。
凪を抱き上げて、近くの椅子に座りながらぼーっとオーブンを見つめる。

レシピによると、40分だったかな？

「雛ーなんだか良い匂いがするんだけど」
「今ケーキ焼いてるんだよ」
「ケーキ？今日ってなんかあったっけ」
「明日はツナの誕生日だからね」
「ああ、そういえば」

昶から可哀想に。って聞こえた気がするけど、何のことだろう？

「あっちでもお祝いはするだろうから、このケーキはいらないかも知れないけどね」
「いやー多分泣いて喜ぶと思うよ」
「なんで？」
「まぁ色々あって」

その言葉の意味はよくわからなかったけど…。

出来上がったケーキは包装して、翌日ツナに届けに行きました。
泣きはしなかったけど物凄く喜ばれたよ。
よくわからないけど、喜んでもらえたならよかった。

## ２４．僕とツナの誕生日（後書き）

どんな形であれ“凪”って名前が残ればいいなぁと

## 25．僕と黒猫

今日もついてきてる…。

ちらりと斜め下を見れば、僕に合わせて歩く黒猫がいた。
この猫は、最近僕についてまわるようになった子だ。
最初は腕に抱いている凪に興味を持っているのかと警戒していたんだけど、僕が一人でジョギングしている時にも現れたりする。
何が目当てなのかさっぱりわからないよ。

しかもこの黒猫、どうやらここら一帯のボスみたい。
行く先々の野良猫が道を譲るように、いや、逃げるように走り去るんだ。

野良猫に威嚇されたりして凪が怯えなくて済むのには、助かってるけどね。

そんな奇妙な猫との散歩は、家に到着したことで終了した。
玄関を開けると、黒猫はどこかへと去ってしまう。

たまに餌を要求するように、庭に面するサッシ戸をかりかりと引っかいていくこともあるけど。
今日は違うところで食べるのかな？

「ただいまー」
「おかえり。回覧板が回ってきてたよ」
「何か変わった事あった？」
「最近スリやサギが流行ってるって。うちも気を付けないとね」

僕は昶に凪を預けて、一通り内容に目を通した。
手口なんかは書いてないけど、結構な被害が出ているって書いてある。
僕も気をつけないといけないなぁ。

「じゃあこれをお隣さんに回してから、ちょっと買い物に行ってくるね」
「気をつけて」
「うん」

昶と凪に手を振ってから、お隣さんへ。
今日の夕飯は何にしようかな。

歩き辛い…。

今日も並盛商店街は賑わっていた。
活気があるのはいいことだけど、荷物が邪魔で歩きにくいのは困るかな。

買い過ぎて腕は痛いし…ちょっと隅で休憩しよう。
僕は人の流れから外れて、荷物を地面に置いて壁に背中を預けた。
荷物持ちに、昶を連れてくればよかったかなぁ？
ああ、でもそうすると凪を見る人がいなくなるし…こんな所に連れて来たら怪我しちゃうかもしれないし。
…後は帰るだけなんだし、頑張ろう。

「いてーっ！！」

悲鳴！？

僕の後ろから、男の悲鳴があがった。
何事かと振り向くと、くっきりと頬に爪痕が刻まれた男が居た。
血が滲んでるって事は、ひっかかれたばかりなのかな？

あれ？あの人が持ってるのって…

彼の手には、見覚えのある柄の財布が握られていた。
あれは僕の鞄に入れていたはず…無い。

もしかしてスリ！？

僕と目が合った男が、身を翻して逃げようとする。
そうはさせないよ。

僕は荷物を一旦地面に置いて、逃げる男の背に飛び蹴りをお見舞いした。
その勢いのまま男が顔面から地面を滑っていったけど、自業自得だ

よね。
投げ出された僕の財布は、周りで見物していた方が拾ってきてくれました。
沢山の拍手を受けてようやく気付いたけど、僕とのびている男を取り囲むように人の輪が出来てたよ。
遠くから走ってきてる黒い人達は、騒ぎに気付いた風紀委員かな？
丁度いいからこのスリを連れて行ってもらおう。

「そういえば…荷物！」

気付いたのが風紀委員に事情を説明してからっていうのが間抜けすぎる。
盗まれてても文句は言えないよね。

「あれ…？」

急いで荷物の元へ戻ると、そこには置いた時そのままの荷物と黒猫が毛繕いをしていた。
寛いでるようで油断無く回りを見渡す猫は、まるで荷物番をしているような…猫？
そういえばスリの爪痕って猫の引っかき傷みたいだったような。

「君が助けてくれたの？」

黒猫の前にしゃがんで声を掛けてみる。
返事が無い事はわかってるけどね。なんとなく聞きたくなったんだ。

じっ、と猫を見つめると、猫も視線に気付いたようで毛繕いをやめてこちらを見返してきた。
短めの毛はさらさらしてそうだなぁ。
凪はふわふわな毛だから、それとは違った感触かも。

つい撫でようと手を伸ばしてしまったが、黒猫は僕の手から逃れるようにひらりと身を躱す。
…残念。

偶然かも知れないけど、この子が守っててくれたんだよね？
何かお礼をしたいんだけど…。

「魚買ってくけど、食べる？」

なんて、猫に言ってもわからないかな？
とりあえず次に来た時用に魚を買って…あれ？

その場から立ち去ろうと足を進めると、ぴったりと黒猫もついてきた。
理解できたんだろうか？
その後魚屋に寄って、家に帰るまで猫は僕についてきたのだった。

「ただいまー。聞いてよ昶」
「おかえり。どうしたの？」
「人ごみでスリにあっちゃってさ」
「え！？それでどうしたの」
「黒猫が助けてくれた」

「黒猫？」

自分が呼ばれたのがわかったのか、黒猫がするりと玄関の扉の隙間から入ってくる。
結構賢いよね、この子。

「この猫？」
「そう。後で詳しく話すよ」

とりあえず荷物を片付けてからね。
僕は冷蔵庫に入れるべく、キッチンへと向かった。
黒猫が後ろから着いてきたせいで、足跡が！と昶が嘆いていた気がするけど聞かなかったことにしよう。

「ふぅん。スリを捕まえるなんて凄いねこの猫」
「だよね。おかげで助かっちゃった」

大人しく焼き魚を食べる黒猫を見ながら、僕は今日あったことを昶に話した。
やっぱり凄いよね。
凪は知らない猫がいるからか、昶の腕の中で丸まっている。
ぱっと見ふわふわの毛玉で癒される…。

「それにしてもこの猫、目が細くてスマートだね。なんとなく雲雀さんに似てる気がする」
「雲雀さん？って、委員長？」
「にゃー」

確かに似てるかも？って黒猫が鳴いた。
え？どこに反応したんだろ…。
僕は昶と顔を見合わせた後、恐る恐る単語を口にした。
「委員長？」
猫は鳴かない。
さっきのは偶然だったのかな。
でも、この子が鳴いてるところってあんまり見たことないんだよね。
「もしかして、雲雀さん？」
「にゃー」
昶が思いついたように委員長の名前を呼ぶと、それに応える様に猫が鳴いた。
「…雲雀さん？」
「にゃ」
気のせいかもしれないけど、黒猫に睨まれた気がした。
まるで、何回も呼ぶなって言ってるような？
とりあえず、黒猫の呼び名が決まりました。
飼う訳じゃないんだけどね。

## 25．僕と黒猫（後書き）

飼いたくても黒猫は一箇所には留まらないと思う。

## ※ある日の応接室にて

今日は天気がいいせいか、委員長は朝から出かけていた。
いつも何も言わずにふらりといなくなり、本人が満足したら帰ってくる。
今日も同じだろう。
幸い急ぎの仕事は溜まっていない。

「ふぁ…」
「お疲れですか？」
「昨日はこの子が夜鳴きしちゃって」

書類を片付け終わった雛さんが小さく欠伸をした。
量がいつもより多かったので、そのせいかと思ったがどうやら違うらしい。

「猫も夜泣きするんですか？」
「寝る前に遊んであげられないと、寂しくて泣いたりするらしいです」

勉強をしてて。と雛さんは困ったように笑った。
区切りは着いた事だし、疲れているなら帰らせるのが一番なのだが…。
その判断をする委員長が留守の為勝手な事もできない。
応接室で休むくらいは大丈夫だろうか？
俺はこの書類をしかるべき所に運ぶ為、これから1～2時間席を外

さなければならない。
誰もいないなら少しは休めるだろう。

「私は用事で席を外します。委員長もまだ帰って来られないでしょうし、誰もいないので寛いでいて大丈夫ですよ」
「はい、ありがとうございます」

さて、出かけるとしよう。

俺が用事を済ませて応接室に戻ると、委員長が戻ってきていた。
定位置ではなく、ソファの端に座っている…そこには雛さんが居たはずだが帰ったのだろうか。

「委員長」

俺が呼びかけると、委員長は口元に人差し指をあててこちらを睨んできた。
黙れ。という事なのだろう。

静かに委員長へと近付くと、同じソファで横になっている雛さんの姿が見えた。
恐らく委員長の学ランだろう、それが身体にかけてある。

委員長はというと、雛さんが連れてきていた子猫の顎を撫でていた。
猫は気持ち良さそうに喉をごろごろ鳴らしている。
委員長と猫…物凄く意外だ。

普段ならあり得ないその光景に目を奪われて、俺は委員長が差し出してきた手に気付くのが遅れた。
慌ててその手に書類を握らせる。

委員長は猫から手を離し、書類に目を通し始めた。
押印次第郵送するものもあるので、俺は手持無沙汰ながらも委員長の横に立つ。

「ん…」

小さな声が聞こえたので雛さんを見ると、猫が雛さんの頬を小さな舌で舐めている所だった。
猫の舌はざらざらしていると言うし、起きるんじゃないだろうか。

案の定彼女は瞼を開けた。
そして目の前にいる猫の頭を撫でて、ふわりと花が開くように微笑んだ。

…すぐに瞼が伏せられたと言う事は、寝ぼけていたのだろうか。

ふと委員長を見ると、珍しい事に彼は笑っていた。
自分の位置からは横顔しか見えないが、それでもいつもの獲物を前にした時のニヤリ、という笑みではないことがわかる。

何かを慈しむような、柔らかな微笑み。

すぐにいつもの無表情になり、書類へと視線を戻したが見間違いではないだろう。

こんな委員長は見たことがない。

恐らく今まで誰も見たことがないのではないだろうか？

俺は見てはいけないものを見てしまったような、複雑な気持ちになった。

## ※ある日の応接室にて（後書き）

委員長って微笑むの？想像できない

## 26．俺と銭湯

ぴんぽーん

「はーい。昶、ちょっと出て」

「はいはい」

雛は今手が離せないらしく、代わりに俺は来客を出迎えに玄関へと向かった。

「あれ？ツナ、どうした？」

「こんばんはー昶君」

玄関を開けると、そこにはツナと知らない男が立っていた。

足元には何が楽しいのかぐるぐると回るランボとイーピン。

リボーンもいるな。

もしかしてツナの隣に居るやつって、跳ね馬のディーノか？

「今日は大人数でどうしたんだ？」

「ちょっとお風呂が壊れちゃって…貸してもらえないかなって頼みに来たんだ」

「ディーノが壊したんだぞ」

「いや俺じゃなくてエンツィオが…目離したのは俺だけどさ」

「お風呂！お風呂！」

一度に喋られるとなかなかうるさいな…特にランボ。

でもどうしようか。

さすがにこの人数を一度にってのは無理だし。

「昶？誰だったの？」
「雛、ツナ達だよ」
「ちゃおっス」
「こんばんはー」
「？何かあったの？」

ツナが俺に言った事を、もう一度雛に言った。
それを聞いて考え込む雛。だよね、こんなに一度に来られても一気に入れる程うちの風呂はでかくないしね。

「そういえば、近くに銭湯があったよね？」
「あったっけ？」
「多分…チラシが入ってきてたような？ちょっと待っててね」

雛がリビングへと向かう。
それにしても銭湯なんてあったっけ？
あってもおかしくはないけど…。

「ほら、これ」

程なくして戻ってきた雛の手には、一枚のチラシ。

『並盛の湯』

さすが並盛町の銭湯…名前がそのまま並盛だ。

「少し歩くみたいだけど、皆一緒に入れるし。ここに行った方がいいんじゃないかな？」

「銭湯か…一回入ってみたかったんだよな」
「静かに入りたいが仕方ねーな」
「ガハハ！ランボさん大きいお風呂で泳ぐー！」
「ちょっとランボ、銭湯では泳いじゃダメだよ」

だから一度に喋るなと…早く近所迷惑になるし移動してもらった方がいいかな？
どうしようか。と雛を見ると、鞄を持って靴を履き替えている所だった。
どうやら鞄には着替えと、入浴セットが入っているらしい。
行く気なのか、銭湯に。

「僕らも行こうか。行ってみたいし」
「雛がそう言うなら」

そういう訳で、今日は銭湯へ行ってきます。

「なぁ昶って言ったか？あの子とはどういう関係なんだ」

銭湯に身を沈めて目を閉じていたら、ディーノがそんな事を聞いてきた。
ツナが聞いて来るならわかるけど、初対面の人が聞いてくるって…

「あんた、雛に惚れたのか？」
「そういうわけじゃねーけど、一つ屋根の下で二人で暮らしてるんだろ？」
「まぁそうだけど」

内心意外だったというかなんというか。
ボスとしての顔と、部下がいない時のへなちょこなディーノしか知らないし。
ああ、でも男同士ならこれくらい普通なのかな？
周りが恋愛に興味ない人ばかりで恋バナをしないだけで。

「従姉妹で親友かな」
「え、付き合ってる訳じゃないの？」
「違うよ」

話を聞いてたらしいツナが驚いたように言う。
周りから見たらそう見えるのか？恋愛感情はないんだけど。

中途半端な俺を認めてくれた彼、今は彼女か。
彼女と出会えて、俺は救われたと思う。
あっちはそんなつもり無かっただろうけど。

「自分よりも大事な存在、かな」
「…」
「そう、なんだ」

ファミリー加入試験の時の事を知っているリボーンとツナは、なんとも言えない表情をしていた。
ディーノも空気を読んだのか、無言を貫いている。

他に客が居ないとは言え、こういう空気は疲れを癒す空間には合わないよなぁ。

「そういうツナはどうなんだよ。笹川京子と」
「え！？どうも、なってないよ」
「ツナの好きな子ってどんな子なんだ？」
「えーと…」
「うわああ！言っちゃだめだよ昶君！！」

俺の口を塞ごうと、慌ててこっちへ来るツナ。
やっぱりこういう空気が一番だよな。

その後も他愛無い話をし、時には湯船で泳ぐランボを叱りながら、俺たちはのぼせるまで長湯してしまった。

「長湯しちゃったね」
「あの人なんてのぼせてぶっ倒れたしな」

俺は長椅子で横になっているディーノを見た。
いくら楽しかったからって倒れるまで入って無くても…出口まで自力で歩こうとして何も無いところで滑って転んだのも倒れた原因かもしれない。

本当へなちょこすぎる。

「イーピンだっけ？あの子と雛はもう上がってるかもしれないし、俺は先に待合室に行くな」

「うん。俺はディーノさんを見てるよ」

風呂では煩かったランボは…リボーンに床に沈められてたのか。道理で静かだと思った。

待合室へ繋がるドアを開けると、隅の椅子に雛と雲雀さんが並んで座っていた。

雛と一緒に女湯に行ったイーピンは、雛の膝の上で雲雀さんを見ながら目をハートにしている。

え？雛はわかるけど、なんで雲雀さん？

銭湯に入りに来た…なら貸切にするだろうし。

「あ、昶」

こっちに気付いたらしい雛が手を振って来た。

それと同時に雲雀さんが立ち上がる。

「それじゃ、僕は帰るよ」

「ありがとうございました」

雛とイーピンが雲雀さんを見送る。

やっぱり銭湯に用事があった訳じゃないんだな。

「雛、なんで雲雀さんが？」

「早めに上がったからここに座って待ってたんだけど…外で大きな声がしてね？何かなって思って出てみたら酔っ払いに絡まれちゃっ

て。ちょうど見回り中だった委員長が助けてくれたっていうか」
「雲雀さんが？」
「うん。風紀を乱す酔っ払いを咬み殺しただけなんだろうけどねー」
そうだね。人助けっていうよりそっちの方がしっくりくるよ。
でもそれなら銭湯にまで入ってくる必要ないよね。

「一緒に居たのは？」
「イーピンちゃんが委員長の袖を離さなくて。皆が来るまでいいから一緒に居てくれって頼んでみたらその通りにしてくれたんだよ」
「雲雀さんは無理矢理振りほどかなかったの？」
「うん。会話なんてないし、ただ座ってるだけだったけどね」

それでも物凄く珍しい事に変わりはないよ。
明日は槍が降るんじゃないかな。

家に帰ってから聞いた事だけど、待合室での俺はどこか遠くを見るような目で突っ立っていたらしい。
それくらい衝撃的だったんだ、と察してくれれば幸いだ。

## 26．俺と銭湯（後書き）

雲雀さんは所々雛に甘い

## 27．僕とお見舞い

「え？委員長が入院、ですか？」

驚いた。

草壁さんから初めて電話がかかってきたことにも驚いたけど、その内容にはさらに驚いた。

『はい。風邪をこじらせて並盛中央病院で入院中です』

「お見舞い、行った方がいいですよね」

『出来ればお願いします。私は手が離せないので』

それだけ言って草壁さんは通話を打ち切った。

委員長がいないとなると、副委員長が仕事しなきゃいけないもんね。

あの量を草壁さんが一人で…予定がなければお見舞いにも行くし、手伝いにだって行くんだけど。

「雛、何か問題が起きた？」

「問題っていう程でもないんだけど…」

そういって遠慮がちに声をかけてきたのは、遊びに来ていた凪だった。

凪の腕の中で凪（猫）が丸まってる。

やっぱり一番最初に助けてくれた人間って事で、安心するのかな。

「草壁さんなんだって？」

「委員長が風邪で入院してるって…」

「あの雲雀さんが？」
「委員長？雲雀さん？」
昶が驚いてる。うん、わかるわかる。
あの人風邪ひきそうにないし…ああ、でも冬でもいつものYシャツに学ラン羽織っただけの格好だから、納得って言えば納得かも。
誰のことかわからない様子の凪には軽く説明してあげた。
並盛中学校最強の風紀委員長、雲雀恭弥。
それを聞いて凪の表情が曇った。
僕が風紀委員に入ってることを知ってるから、心配になったのかな？
確かにさっきの説明だけだと、とんでもない人間だよね。
うん、実際とんでもないと思うよ。
「委員長が入院か…あ、もしかしたら」
「ん？」
「ツナも入院してるかも」
ツナも…？
爆発とか起きても大丈夫なツナが入院ってどんだけ酷い怪我なんだろうね。
とりあえず、奈々さんに聞いてみようかな？
「…はい、はい。わかりました、ありがとうございます」
「奈々さん、なんだって？」

「昶の言うとおりツナも入院してるらしいよ。右足骨折したんだって」
「…痛そう」
凪は本当優しいなぁ。
これから凪と昶と出かける予定だったけど、ちょっと予定変更しなきゃいけないかも？
でも病院内に猫は連れて行けないだろうし…。
「どうしよう」
「…留守番してようか？」
「それはダメ」
即答したら、凪が目に見えて落ち込んだ。
違うんだよ？任せられないとかじゃなくて、折角来てくれたんだから一緒に遊びたいってだけで！
「これから病院に行って、その後3人で町に出ることにする？」
「それしかないかなぁ。あ、でも猫」
「そこは申し訳ないけど、凪に病院前で待っててもらうとか」
「…うん。私、なっちゃんと待ってるよ」
ねー。と凪（猫）と会話する凪。
なっちゃんって呼ぶことに決めたんだね…確かに自分の名前は呼びにくいよね。
さて、じゃあ途中でお見舞いの果物でも買って病院に向かいますか！

「ここ、かな」

今、僕は教えてもらった病室の前に立っている。
途中まで看護師さんが案内してくれてたんだけど、このフロアに着くなりそそくさと帰って行っちゃった。
そういえばナースステーションで委員長の名前を出した時、皆変な顔してたけど関係あるのかな。

「…ドアの前の君、早く入ってきなよ」

そんな事を考えていたら、中から声がした。
え、なんでわかったんですか。
委員長ってエスパーなんじゃないかと思う。結構真剣に。

「失礼します」
「やぁ」

何あの、人の山。

病室に入ってすぐ目についたのは、壁際に積み上げられた人の山だった。
どの人も気絶しているのか、動く気配はない。
理由はわからないけど、委員長に噛み殺されたんだよね？多分。
病院に来て怪我を負わされるってご愁傷様としか言い様がないよ。

「何してるの」
「そこの山が気になって」
「ああ、暇だからゲームをしていたんだ」
「ゲーム、ですか？」
「そう。彼らはゲームに負けたから、罰を受けたんだ」

一体どんなゲームをしたんだ。
興味はあるけど薮蛇になりそうだし、聞かない方がいいのかな？

そのまま突っ立ってるのもなんなので、僕は委員長の傍に近寄った。
ベッド横にパイプ椅子が一つある、これ借りてもいいかな？

「座っていいですか？」
「構わないよ」

僕は椅子に腰掛けて、改めて室内を見回した。
…極力、壁際の山は見ないようにして。

委員長の病室は、個室なのに二人部屋と言える程の広さがあった。
普通の病室にはないだろう観葉植物も配置されている。
ベッド横にはテレビも完備。

テレビって患者持ち込みじゃなかったっけ…委員長が持ってくるはずもないし。
委員長って、病院からも特別扱いされる人なんだ…。

僕は病室を眺めた後、この部屋の主へと目を向けた。

ベッドに腰掛けてる彼の手には本が…読書をしていたのかな。

それにしても白を基調とした部屋で、真っ黒な寝巻きってどうなの？

「それで、何の用？」

「草壁さんに聞いてお見舞いにきました」

僕は持っていたビニール袋をキャビネットの上に乗せた。

中身はただのりんご。

何が好きとかわからなかったし、定番かなぁって思って。

「あの委員長が風邪をこじらせて入院って聞いたので、どれだけ具合悪いのかなって思ってましたけど。元気そうで何よりです」

顔色が悪い訳でもないし、トンファー振るえるくらい元気みたいだし。

「君、たまに僕に喧嘩を売ってくるよね」

「そんな事あるはずないじゃないですか」

「…はぁ」

とても失礼な感じで溜息を吐かれた気がするんだけど。

僕が委員長に喧嘩を売るとかそんなばかな。

さて、じゃあそろそろ僕は帰ろうかな？

凪も待たせてることだし…。

「委員長、僕はそろそろ…」

「それ、むいて」

「え？」

「君が持ってきたそれ」

僕が持ってきたって、りんご？
いや、でも果物ナイフも皿もないし、って思ってたらりんごを置いたキャビネットの中に入ってるらしい。
どこまで完備されてるの。

「一つだけですよ」

一つくらいならそんなに時間もかからないし…。
飾り切りの定番、うさぎりんごにしてみる。
うん、うさぎにしておいてなんだけど食べる時皮が邪魔だよね。

「皮むきましたよ」
「うん」

皿の上からうさぎりんごを一つとって、委員長が口にいれた。
一瞬間が空いた気がしたけど、うさぎの耳の部分が気になったのかな。
ちなみに自分で食べる時はうさぎにしないよ、だって邪魔だもの。

さて、皮むきも終わった事だしお暇しようかな。

「じゃあ僕は寝るから。院長が来たら起こして」

…ゑ？

「ちょ…僕はこれから用事が」
「…」
「あるんですけど」

寝るの早！

僕が言い終わらないうちにさっさと横になって寝ちゃったよ。
結局むいたりんごも、１／５しか食べてないし。

「はー…」

溜息しか出てこない。
院長先生？が来るのがいつになるかわからないなぁ。いつまでも二人を待たせる訳にもいかないし。
仕方ない、メールして先に行ってもらうことにしよう。

「『…先に行ってて』と、送信」

これでよし、と。
昶にメールを送って、僕は携帯を仕舞う。
凪と遊ぶの楽しみにしてたんだけどなぁ…院長先生早く来てください。

それにしても、委員長の寝顔って初めて見たかも。
目を閉じただけなのに、かなり印象が変わるんだね。
いつもの近寄りがたい雰囲気も消えて、なんだか年相応？ちょっと幼く見える気がする。

「寝顔だけ見てたら並盛最強とは思えないよね」

他にもまつげ長いんだなーとか、結構肌白いんだなーとか。
やることもないので、ひたすら委員長鑑賞会。

あ、意外と髪の毛細くてさらさらしてる。
触り心地良さそう。

触ってみたいなぁ。
……触っても、いいかな？
そーっと僕は右手を雲雀さんの頭へと近付ける。
気付きませんように、と祈りながら。
もう少しで髪に触れる。というところで、僕の腕はぐいっと身体ごと引っ張られた。
「わわっ」
「今、何しようとしたの」
気付くと僕はベッドの白い布団に顔を埋めていた。
全身乗り上げるような事はなかったけど、上半身が引っ張られたのかな…横になったままなのになんて力だ。
まだ手首を握られているのか、自分以外の体温をそこに感じた。
左手で身体を支えて楽な体勢を取ろうとしたけど、腕を掴まれた状態じゃ無理だった。
せめて委員長が右手じゃなくて左手で僕の腕を引っ張ったなら、もう少し楽だったのに。
仕方ないので、この変な体制のまま言い訳をしてみよう。
「ええと…髪が予想以上にさらさらしてたので、触ってみたくなりました…？」
「ふざけてるの？」
「ふざけてなんかないです」
近所の野良猫の雲雀さんを思い出してつい手が。言わないけど。
「君は本当に…」

委員長が呆れたようにいいながら、僕の腕を解放した。
それ以上が無かったのはよかったって喜んでいいよね？
呆れられたけど。

「僕は葉が落ちる音でも目を覚ますから、次はないよ」
「それってやっぱり院長先生が来るまでここにいろって」
「…」
「ことですか…せめて最後まで聞いてから寝てください」

さっきと同じく数秒で夢の国に旅立つ委員長。寝入り良すぎ。
あと葉が落ちる音でもって、寝起き良すぎじゃないかな。
あれ？じゃあさっき僕が独り言呟いてた時起きてたのかな。
寝たフリ？まさかね。

「…委員長がよくわかりません」

特に必要でもなさそうなのに僕を引き止めたりとか、何がしたいのかと。
ゲーム？とやらの相手をさせる訳でもないし…。
いつもの気まぐれなのかな。

「早く院長先生来ないかなぁ」

その後、僕の思いに反して院長先生は３０分は顔を見せなかった。
その間に積み上げられてた人が意識を取り戻して再び委員長に噛み殺されたり、ツナが例のゲームとやらに巻き込まれたり色々カオスでした。

解放されたのは凪が帰る少し前…うう、次こそは一緒に遊ぼうね。

## ２７．僕とお見舞い（後書き）

色々詰め込もうとして削ってよくわからなくなｔｔ

## 28．俺と凪

「雲雀さんって本当どこにでも顔が利くって言うか…」

俺は雛の案内に選ばれた看護師を思い出しながら、ツナの病室へと向かっていた。

これから自分の処刑台にでも上がるかのように、目に見えて怯えてた看護師。

雲雀さんって本当どこでも恐れられてるんだな。

原作では院長が感謝してたくらいだし、ただ怖いだけじゃないんだろうけど。

「っと、ここだな。ツナの病室」

危ない危ない。考え事してる間に通り過ぎる所だった。

扉横の名前を確認。

うん、沢田綱吉ってなってる。

一人しか書いてないから、もう個室に移動したのかな？

って事はこれから見舞客が来るのか…雲雀さんの所に移動させられる前には帰りたいけど。

考えてても仕方ないので、俺は軽くノックをして扉を開けた。

「失礼しまーす」

「怪しい人を入れないでくださいって！何ですか今の…？おんみょうじ？」

「いや」
「他の患者さんが怖がります！」
「あの…」

病室に入ると、ちょうどツナが看護師に怒られている所だった。
陰陽師？って事は京子ちゃんとハルが来たのか…。
元気づけようにもあれはないよなぁ。

「だからあれは…あ」
「よっツナ。元気か？」
「昶君！」

ツナが俺に気付いたようなので、俺は片手を上げて挨拶した。
明らかに助かった！って顔をしたツナ。
そこの看護師さん怖そうだし仕方ないかな。

「元気そーじゃねーか。見舞いに来たぜ」
「お、山本も来たのか」
「山本ォ！！」

俺の後ろからひょいっと顔を覗かせる山本。
手には船の器に盛られた刺身の活造り…どうでもいいけど、それ、そのまま家から持ってきたのか？

「親父がこれもってけって」
「わっすごっ！！！これ…すごい高いんじゃないの……？」
「気にすんな。親父人にものやるの好きなんだよ」
「本当にありがとう！」
「いーってことよ」

そういえば刺身ってすぐ食べないといけなくないか…これから食べるのかな。
まぁ、どうでもいいか。

「山本の後だと出しにくいけど、これ俺と雛から」
「そんなことないよ！昶君もありがとう」
「早く治せよ」

俺は持っていた袋をツナに手渡した。
中身は果物屋で買ったりんご。
渡してから思ったけど、むいてくれる人いるのかな。

「若きボンゴレおケガですか。お気の毒に」
「大人ランボ！！」
「おや、昶さんもいらっしゃったんですか」
「…どちら様？」

山本に続いてお見舞いに現れた未来のランボ。
誰かは知ってるけど、確か初対面だよな。
雛は会った事あるみたいだけど…１０年後のランボが俺の事を知ってるって事は俺は未来でもボンゴレに関わってるんだな。

「昶君、１０年バズーカで未来から来たランボだよ」
「そうなのか？」

山本に聞かれない様に、ツナが小さい声で教えてくれた。
知ってるんだけどね。

「えーと、ランボ？知ってるみたいだけど小日向昶だ。よろしくな」
「よろしくお願いします。今日はあの女性と一緒ではないんですね」

「…あの女性？」
１０年後の俺は誰かと一緒にいるってことか？
誰だか気になる所だけど、聞かない方が楽しいかもな。

「１０年後からいきなりきたので何も用意できなかったのですが…」
「いやいいよ。気をつかわなくて」
「トイレそうじ頑張ったで賞です」
「…！」

取り出された腰掛便器型のトロフィーにツナが絶句した。
貰っても困るよなあれ。
ところで未来のランボってボンゴレの一員なのか？
だとしたらあのトロフィーを用意したのはツナって事になりそうなんだが。

あ、トロフィーが出てきたって事はそろそろ獄寺が来て騒がしくなるよな。
一足先に帰らせてもらった方がいいかも。

「じゃあツナ、俺はそろそろ帰るよ」
「あ、うん。ありがとう昶君」
「お大事になー」

手をひらひらと振って俺は病室を出た。
廊下を歩いてる時に、血塗れの獄寺と擦れ違ったが…よくあれで走れるなぁ。
床に点々と血の跡が残ってるんだが。
ツナも獄寺も暫く安静にするべきだと思うよ。

「あれ？まだ雛は帰ってきてないの？」
「…うん」

病院前の公園のベンチで一休みしていたらしい凪の横に、雛の姿は無かった。
俺より先に看護師に案内されてたはずだから、問題がなければここにいるはずなんだけど。
問題があったんだな。

「メールしてみるよ」
「うん、わかった」

雲雀さんの病室だし通話はしない方がいいだろう。
俺は携帯を取り出してメール画面を開いた。
新着メールが1件…？

『すぐに帰れそうにないから先に行ってて』

どうやら気付かないうちに、雛からメールがきていたらしい。
それにしてもすぐに帰れないって何が起こってるんだろう。

「雛から先に行っててくれってメールが来てたよ」
「…？何かあったのかな」
「相手が雲雀さんだから大丈夫だと思うけど…」
「風紀委員長の？」
「そうそう」

どういう種類の感情なのかわからないけど、雲雀さんは雛の事を気に入ってるようだしね。
案外引き止められてるんじゃないかな。
傍に居てくれって…ないか。

「そのうち来るだろうから、どこかでお茶でもして待ってようか」
「うん」

凪が凪（猫）を抱いて立ち上がる…ってややこしいな。
名付け親の俺が言う事でもないけど。

凪（猫）は凪の腕のなかですやすやと眠っている。
…猫、か。

「凪はさ、もし車に轢かれそうな猫を見つけたらどうする？」
「…」
「猫は自力で逃げられない。今にも轢かれそうな状況だったら」

俺の質問に凪が、困惑した表情をしている。
そりゃ突然こんな質問されても困るよな。

「……わからない」

たっぷりと考えてから、凪は言った。
意外にも“助ける”とは口にしなかった。

「助けたいと、思う…けど、身体が動くかわからないから」
「…そっか」

俺はそんな場面を見つけても、確実に見捨てると思う。
無意識に身体が動くなんて事もないだろう。
相手がうちの飼い猫なら話は変わってくるかもしれないけど…。

「そんな事があったら、俺はその猫を見捨てて欲しいと思う」
「…でも」
「助けようとして凪が怪我をしたり、最悪死ぬかもしれない。そんな事になったら俺と雛は悲しむ、それだけ覚えておいて」
「…」

凪が泣きそうな表情で俯いた。
今言わなくてもいいことだったかもなぁ。

来年、凪が猫を助けようとして事故に会う事を俺は知ってる。
原因となる猫を先に助け出せればいいんだけど、具体的な日時・場所が全くわからない。
黒曜騒動が終わって骸が脱走失敗した頃、ってのはわかるけどそれだけだ。
住む地域が違う、学校も違う。そんな状態で四六時中注意しておくこともできない。
現時点で、俺の力であの事故を回避できるとは思えない。

だから、俺の言葉が少しでも思い止まる為の楔になってくれればいいと思う。

「…それでも」
「ん？」
「それでも…私は、助けたい」
「…知ってる」

彼女はその時が来たらきっと、無意識に駆け出してしまうんだろう。
そして俺の知ってる未来に繋がるんだ。

それでも、願わずにはいられない。
彼女が無事でいられる未来を。

その後はいつまでも暗い雰囲気ってのも気が滅入るから、できるだけ賑やかな場所で会話しながら雛を待つことにした。
結局雛が来たのは凪が帰る少し前だったけど。
物凄く悔しそうだったなぁ雛。

冬休み中ずっと泊まりに来る予定なんだから、そこでリベンジしたらいいと思うよ。

## 28．俺と凪（後書き）

昶にとっての凪は、どの程度のものなのか。

## ※少女の想い

「ただいま」

玄関を鍵を開けてそう口にするけど、返事は返ってこない。
誰もいないんだから当たり前。
たとえお母さんやあの人が居たとしても、『おかえり』なんて返ってこないんだろうけど。

靴を脱いで自室へと向かう。
廊下の明かりを点けようか迷ったけど、足元が全く見えない訳ではないから必要ない。
また消しに戻るのが面倒…。

自室のドアを開けて明かりを点ける。
携帯電話を取り出してから鞄を床に置き、私はベッドにうつ伏せになった。

携帯を横に置いて、枕に顔を埋めて瞼を伏せる。
…何も聞こえてこない。
私以外に誰もいないんだから、当たり前、だけど

「静か…」

さっきまで昶と雛と一緒に居たからかな。
いつもと変わらないのに少し、寂しい。

「今日は、楽しかった」

久しぶりに会った子猫は、ご飯をちゃんと食べてるのか健康そうだった。

昶と雛も、笑って私を出迎えてくれた。

子猫が縁で知り合った二人、初めての友達。

嬉しくて、泣きそうになった。

〜〜〜♪♪

「…メール？」

二人と出会うまで、鳴る事のなかった携帯電話。

お母さんからもあの人からも連絡が来た事なんてないから、来るとしたら雛か昶のどっちかだけど…

携帯を手に取り新着メールを開く。

―――――――――――――

Ｔｏ　　凪

Ｆｒｏｍ　　雛

題名：

本分：今日はごめんね

冬休みはたくさん遊ぼうね！

―――――――――――――――

「雛、から」

瞬間、別れ際に何度も何度も謝ってくれた雛が思い浮かんだ。
冬休みには色んなお店に行こうね。って約束をした。

「『気にしないで。冬休みは私も楽しみ』…送信」

勇気を出して、聞いてみてよかった。
迷惑かもしれない。って思ったけど、初めて人と過ごした夜が嬉しくて。

二人とも、迷惑なんかじゃない。いつでも来ていいよ。って言ってくれた。

前は“お客さん”だったけど、今度は“友達”として泊まりに行ける。
クリスマスやお正月に誰かと過ごせるなんて、今から本当に楽しみ。

～～～♪♪

「またメール。今度は、昶から？」

―――――――――――――――

To　　凪

Ｆｒｏｍ　昶

題名：

本分：今日は変な事を言ってごめん
　　凪が泊まりにくるのを楽しみに待ってるよ

―――――――――――――

「病院での事？」

『凪はさ、もし車に轢かれそうな猫を見つけたらどうする？』
『猫は自力で逃げられない。今にも轢かれそうな状況だったら』

昶はそう言っていた。
ふざけている訳じゃない、真面目な表情で。
“変な事”ってメールにはあるけど、昶にとっては大事なことだった？
それとも、私にとって…？

よく、わからない。
でも…

『助けようとして凪が怪我をしたり、最悪死ぬかもしれない。そんな事になったら俺と雛は悲しむ、それだけ覚えておいて』

今まで私は居ても居なくても変わらないと思ってた。
血の繋がったお母さんも、義理のお父さんも私にはいつも無関心で。
私が傷ついても、居なくなっても悲しむ人なんていないと思ってた。

でも、私が傷つく事で二人が悲しむのなら…

「私は“私”を大事にしたい」

猫を目の前にして、私がどう動くかなんてその時になってみなきゃわからないけど。
優しい二人の為に、できる限りのことはしたいと思うの。

## ※少女の想い（後書き）

頭でそう思っててても身体は気持ちに正直になるって事あるよね

## ２９．俺と約束

今日は１２月２４日クリスマス・イブ。
日本では宗教関係関係なく恋人や家族と過ごす日って認識らしいね。
冬休みに入って凪が泊まりにきてるし、折角だから夕食は外で食べよう。って俺と雛は決めていた…けど。

「大丈夫？」
「うん…薬のおかげかな。熱は結構下がったよ」

ベッドに横になっている雛が、俺と凪を安心させるように微笑んだ。
まだ顔が赤い。下がったとはいっても、平熱よりまだ高いんじゃないか？

腕時計で時間を確認…まだ余裕はあるけど、そろそろ支度しないと予約した時間には間に合わないかな。
でも雛を一人にする訳にも行かないし。

「やっぱり今日はやめておこうか」
「うん…雛が心配だし」

それにしても雛が風邪をひくなんて、どんだけ悪質なウイルスなんだろ。
自称神様に病気にならないようにしてもらったはずなんだけど。

朝からベッドに張り付けにして俺と凪が看病した成果が出たのか、少しは良くなったみたいだけど…この状態で外に出す訳にもいかない。

「風邪が治ったら改めてどこか行こうか」
「…3人で行きたい」
「二人で行ってきなよ。中々予約取れなかったんでしょ？」

俺と凪が話している所に、雛が口を挟んできた。
勿体ない。って事なのかな…確かに今日行く予定の店は予約が取れにくい事で有名だけど。
実際俺も最初予約を断られたし。運良く予約取り消しした人の分がまわって来たけど。
そのことを雛に言わなきゃ良かったな。

「折角予約したんだし、楽しんできて？」
「でも…っ」
「僕は猫とお留守番してるからさ」

雛がいつもより頑固だ…もし俺が同じ状況で風邪を引いたら絶対に予約を取り消すくせに。
ここは行くふりをして予約取り消しの電話をするしか…

「昶、予約取り消しとかしたら暫く口利かないよ」

…ばれてる。
風邪で思考力が鈍るどころか鋭くなってんじゃないの？
困ったなぁ、誰か雛を見てくれる人がいれば安心できるんだけど。

「一応聞くけど、俺と凪が雛を心配して言ってるって事わかってる

よね？」
「うん、わかってるよ」
「雛…」
「でも折角凪が来てるんだし、楽しんできてもらいたいんだ」
そういえば、雛は凪から家族の事を聞かされたんだっけ。
今までクリスマスらしいことをしてこなかった。って言ってたのが引っかかってるのか？
雛が欠けてたら楽しめるものも楽しめないんだけど。
クリスマスに暇してる人っているかな？
奈々さんはツナと愉快な仲間達（笑）の面倒を見る為に離れられないだろうし…。
山本は寿司屋だから忙しそうだな。
獄寺は…ないね。ツナ相手なら何をおいても駆けつけるだろうけど。
…ああ、そうだ。
あの人に連絡してみようか。
「雛はちゃんと寝ててよ？早めに帰ってくるから」
「え？昶…あの…」
「ゆっくりしてきていいよ。昶も凪もいってらっしゃい」
困惑する凪の腕を取り、俺は雛の部屋を出た。
扉を閉めてから携帯を取り出し、手早くメールを送信。
本人に電話をすればいいんだろうけど、俺はあの人の番号もアドレスも知らないし。
間に人を立てさせてもらおう。

「昶、雛を一人にするの？」
「一人にはしないよ」
程なくしてメールが届いた。
“そちらへ向かった”
本文は一行だけだったけど、十分だ。
「これで大丈夫」
もっとも、あの人に看病が出来るのかは謎だけど。
こっちに来るって事は、看病くらい出来るって信じたいけど。
「誰に連絡したの？」
「同じもやもや仲間、かな？」
「…もやもや？」
この前会った時アドレス交換しといて本当良かった。
凪が首を傾げてる…確かにこれじゃ何のことかわからないよなぁ。
「雛が一人にならないように、これから人が来てくれるよ」
「そうなの…？」
「俺から雛へのクリスマスプレゼントって所かな」
二人っきりにするのは問題かな？いや、それ以前の問題か。
…少しは意識し始めてくれればいいけど。

「…美味しかった」
「そうだね。フランス料理とか初めて食べたから味がわからないかと思ったけど」

会計を済ませてレストランを後にする俺と凪。
小さめの店だったけどドレスコード無し、従業員も気さくな人が多いようで全体的に開放的って感じがしたかな。
他の店に行った事ないから比べられないけど…マナーに縛られて味がわからない。て事はなかった。
なんとなく予約がいっぱいの理由がわかった気がするよ。

凪も満足したみたいだしあとは帰るだけ、か。
雛は大丈夫かな？

「凪ちょっと待って」
「…ん」

道路端に寄ってから携帯を取り出す。
凪も気になっていたみたいで、俺を、というよりは携帯をじっと見ていた。

電話帳から家の番号を呼び出して通話ボタンを押す。
聞こえてくるコール音…一回、二回、三回、四回

『何の用？』

人の家の電話に出て、第一声がそれとか…俺じゃなかったらどうするんだ。
いや、出るだけ良い方なのかな？もしかしたら無視されてたかもしれないし。
切られるのも困るし、さっさと用件だけ聞こう。

「雛の様子はどうですか？」
『今は寝てるよ』
「…熱は？」
『下がったよ。心配はいらない』
「そうですか。よかった」
『それだけ？』
「ああ、はい。ありがとうございます」

ガチャッツーツーツー

…切るの早くないか？最後まで言わせてよ。

「雛の様子、どうだって？」
「熱は下がったって。明日には治ってるかもね」
「よかった…」

凪が軽く安堵の息を吐いた…その気持ちはよくわかる。
朝は３９度近くまで熱が上がって本当に驚いたもんなぁ。

寝てれば治るって言って病院に行こうとしないし。
何はともあれ症状も落ち着いたようでよかった。

「少し商店街をまわってから帰ろうか？」
「え？でも…」
「雛の代わりに飾り付けられた商店街を見て、教えてあげないと」
「…うん」

あの人も雛の為に家に来るくらいだし、もう少しくらい大丈夫…だよな？

凪と連れ立って歩いていると、商店街の明かりが見えてきた。
植木を電飾が彩り、店にはリースやクリスマスボールが飾られている。
これはこれで綺麗だけど…今日の目玉は商店街中央にあるんだ。

「綺麗…」

大きなクリスマスツリーに見惚れて立ち尽くす凪。
うん、話には聞いてたけどこんなに大きいとは思わなかったかな。
何メートルあるんだろう…ツリーとはまだ距離があるのに見上げないと天辺の星が見えない。
近付いてわかったけど、飾りも色々あるみたいだ。
色とりどりのイルミネーションを中心に、小さなサンタ人形やらトナカイやら…ん？
なんで短冊がくくりつけてあるんだ？

『サンタさんへ』

…なんだか色々間違ってる気がする。

それにしても、何人がかりで飾り付けたんだろう。
これが明後日には撤廃されるってなんだか勿体ないなぁ。
雛にも見せたいけど、明日熱が下がったとしても外には出ない方がいいかもしれないし。

「…また、見られるかな」

雛に見せる為にツリーを携帯で撮影していたら、凪がぽつりと呟いた。

また…かぁ。
来年の今頃にはもう凪は“凪”じゃなくなってるかもしれない、けど。

「来年また来よう。今度はちゃんと3人で」
「うん。また、来年」

嬉しそうに笑う凪と指きりをして、来年の約束をする。

この約束が、凪の支えになりますように。
猫を助けないのが一番だけど、もし助けて事故にあったとしても諦めないで欲しいから。

余談だけど、翌日の朝食の席に何故かあの人も一緒にいました。

もしかして泊まったのか？

そうだとしたら一体どこで寝てたんだ…家に帰ってから一回も姿を見なかったけど。

## ２９．俺と約束（後書き）

難産…もやもや仲間は某人の補佐やってるあの人。
拍手ＳＳに微妙に繋がってます。

## 30．僕と風邪

「雛はちゃんと寝ててよ？早めに帰ってくるから」
「え？昶…あの…」
「ゆっくりしてきていいよ。昶も凪もいってらっしゃい」
ようやく出かけることに決めた二人を送り出し、僕は額に右手を当てた。
朝よりは下がったと思うけど、まだまだ微熱より上かもしれない。
「まさか初めての風邪が今日だなんて」
凪には悪いことをしたなぁ。
初めてクリスマスを祝うって楽しみにしてたのに。
ツリーもテレビでしか見た事無いって言ってたし…昶がちゃんと商店街まで連れて言ってくれるといいけど。
部屋を出て行くとき、昶が何か悪巧みを思いついたような顔になってたけど。
僕を一人にしないように誰かに連絡するつもり、ってとこかな？
お隣の奈々さんくらいしか思いつかないけど、ツナの所はいつも大所帯だからパーティーの準備で大忙しだろうし。
考えても昶の考えなんてわからないし、もう一寝入りしようかな。
起きた時に喉が渇くだろうし、今のうちにペットボトルに水を入れてこよう。
さっき飲み干しちゃって空のままだし。

僕がベッドから降りると、まとわりつくように凪が僕の足の周りをぐるぐると回りだした。
蹴っちゃうから落ち着こうね。

「もしかして、凪は僕の見張りをしてるのかな？」
「にゃーん」
「えらいえらい」

この部屋に一匹にするのもなんなので、僕は凪を抱いて部屋を出た。
…予想以上に僕の体力は消耗していたみたいだ。
階段を降りるだけなのに、物凄く疲れた。
しっかり歩いてるつもりだったんだけど、階段踏み外しそうになって焦った。

「降りるのでこれじゃ、上るのはもっと大変そうだなぁ」

ペットボトルを水で満たしながら僕は呟いた。
だからって部屋に行かずに居間のソファに座ってる訳にも行かないんだけど。
風邪悪化するし。
さて、頑張って上りますか。

「にゃん」
「抱いてる方が危ないみたいだから、凪は自分で歩いてね」

言葉がわかったのかどうなのか、さっきまで足元をうろうろしていた凪は階段を一気に駆け上がった。
この子も結構賢いよね。
次は僕の番…手摺りをしっかりと掴んで一歩一歩確実に前に進む。

「もうちょっと…っ」

不意に視界が歪んだ。
その一瞬身体から力が抜けてしまったのか、気付いた時には僕の身体は重力に従って背中から落ちて行く。

あー…これは痛いかも。

そんな事考えてる場合じゃないんだろうけど。
凪が鳴いてるとか、僕が落ちようとしてるとか、全体的に物凄くゆっくりで…これがスローモーション現象って奴なのかな。

また昶や凪を心配させちゃうなぁ。

「…って、あれ？」

痛くない？
っていうか、落下してない…？

真正面を向いてるはずなのに視界に階段上にいる凪と天上が映ってるって事からも、僕の身体は今後ろに傾いてるはずだけど。
足はしっかりと階段についている。
え？おかしくない？僕の体勢。

「君、病人の癖になんで寝てないの？」

耳元で誰かがそんな事を言った。
一瞬肌が泡立ちそうになったけど、無視しよう。

それにしても物凄く聞き覚えがあるこの声は…

「委員長？」

恐る恐る首だけ動かして後ろを確認する。
呆れたような、なんともいえない委員長の顔が目に入った。
っていうか近い。なんでこんなに近いの。
慌てて前を向いた僕は悪くないと思う。

あれ？でも委員長がすぐ後ろにいるって…もしかして、委員長が僕の身体を支えてる？
だから階段を転げ落ちなかった？

なんだか前にもこんな事があったような？
あ、僕が未来に行った時のことか。
委員長にはいつも助けられてばかりな気が…

「ねぇ、いつまで僕の事を無視するの？」
「え！？してませんよ無視なんて」

ちょっと考え事をしてただけですよ。
その結果委員長の事を忘れたってだけで。
そういえば委員長はなんで家にいるんだろう、玄関の鍵は閉まってるはずだけど。
きっと昶が閉め忘れてたんだね。そういう事にしておこう。
委員長に聞いて、鍵を壊した。とか合鍵で。とか答えられても何て返せばいいかわからないし。

「助けてくれて、ありがとうございます…？」
「何で疑問系なのさ。はぁ、もういいよ」

助けてもらうことも多いけど、同じくらい呆れられてる気がするのは気のせいかな。
気のせいだよね、その溜息も僕のせいじゃないよね。

後ろで委員長が動く気配がした。
僕の傾いたままの体勢を戻してくれるのかな？
そう思った次の瞬間、僕の身体が宙にふわっと浮いた。

「え、えっ！？」
「暴れると落ちるよ」

予期せぬ浮遊感に軽く混乱。
気付けば委員長の顔は近くにあるし、足は下についてないし、体勢は不安定だしで取り乱さない方がおかしいと思う。
僕が委員長に横抱きに、所謂お姫様抱っこされていることに気付くまでに少し時間がかかったのは仕方ない。

僕が静かになったのを見計らってか、委員長がそのまま階段を上り始めた。

「ちょっと…重いんで降ろしてください」
「いいから大人しくしてなよ」

抗議してみたけど、降ろしてくれる気はなさそうだ。

それにしてもこれ、怖いです。
前にクラスメイトが女の子の憧れって話してたのを聞いたけど、そんなにいいものじゃないです。
自分の身体を支えるのが二本の腕だけとか、動く度に揺れたりとか

本当怖いです。
あと僕はどこに掴まればいいんですか、手の置き場がわかりません。
結局僕はベッドに降ろされるまで、委員長に横抱きにされたままだった。
なんで僕の部屋がわかるのかとか、もう突っ込んじゃいけない気がする。

もそもそと布団をかけていると、帰る気がないのか委員長がベッドに腰掛けて来た。
そういえば、何で委員長は家にいるんだろう。
またいつもの気まぐれで立ち寄ったとか？

聞いてみようか。と思ったとき、額に何かが触れた。
冷たい委員長の右手。熱があるからそう感じるのかもしれないけど。

「まだ熱い。さっさと寝て治しなよ」

これは委員長なりに心配してくれてる、のかな？
元々水を汲んだら寝ようと思ってたし、目を閉じてしまおう。
人に寝顔を見られるとか恥ずかしいから、布団を頭までかぶって。

おやすみなさい。

「……るよ」

話し、声？
まだ眠気は残っているけど、誰かの声で起きてしまったらしい。

「下がったよ。心配はいらない」

声のする方に顔を向けると、何かがぽてっと落ちた。
濡れたタオル…？
もしかして僕の額に乗せられてたんだろうか。

「それだけ？」

そう言うと、委員長は子機を操作して机に置いた。
家の電話に誰かが掛けて来たのか…委員長が出てくれるなんてなんか意外。
意外といえばこのタオルも、確か寝る前にはなかったのに。

「起きたの？」

僕の視線に気付いたのか、委員長がこっちを向いた。
その腕の中には顎を撫でられて気持ち良さそうにしている凪。
…意外だ。

「さっきの電話…」
「君の従兄弟から」

昶から？僕の携帯にじゃなくて家電に？
もしかして委員長が家に来たのって…

「熱は下がったみたいだけど、起きて何か食べる？」

何かって…その何かは委員長が作るんですか？
作れるんですか？

「何、その目」
「なんでもないです」

何が出てくるのかとても興味があるけど。
まだ眠いし寝ることにしよう。

「もう一眠りします」
「そう」

委員長がそういいながら僕の額に濡れたタオルを乗せた。
いつ絞ったのかわからないけど、冷たいタオルが気持ちいい。
さっきまで僕の額に乗ってたんだから、ぬるくなってただろうに。
人並みに看病もできるとか、委員長の意外な一面を見た気がした。

翌朝、いつものように僕はすっきりと起きることができた。
目を開けたら委員長の顔が目と鼻の先にあったとか、委員長が隣に寝てるとかどういう状況？とか色々突っ込みたい事があったけど。

## ３０．僕と風邪（後書き）

お姫様抱っことか腕枕とかは女の子の夢だけど、夢と現実は違うよねっていう中の人の偏見。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2858x/

僕と親友と漫画の世界

2011年10月28日11時04分発行